
神と悪魔と人魚

山川四季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神と悪魔と人魚

【Nコード】

N61160

【作者名】

山川四季

【あらすじ】

帝国一の魔法学園に通うニーナは、ほとんど魔力が無い落ちこぼれ。冷めた性格で、友人が居なくても気にしないマイペースな少女。将来の夢は娼婦かダンサー。ニーナの唯一の親友レナスは美貌と才能と地位を兼ね備えた、向かうところ敵なしの存在。性格は恐いもの知らずで、取扱い注意な美少女。ある日、学園に美形の音楽教授アキがやって来る。こいつがけっこうな俺様体質だった。類は友を呼ぶとはこのことか。これだけキャラの濃い奴等が集まって、何も起こらないわけがない。本人の意思とは関わり無く、ニーナは周囲

で起こる騒動と事件に巻き込まれていく。それは人間界だけにとどまらず、闇世界や光世界までをも巻き込む事態に発展していくのだ
った。

1、美貌の音楽教授

一日の終わりを告げる鐘が鳴り響くと、少女はため息と共にノートを閉じた。

授業の時間をこつそりと課題の反省文を書くことに費やし、どうにか書き終えたのだ。

あとはこれをジン教授に提出すれば、居残りせずに帰ることができると。

「聞いてニーナー！」

壊れんばかりの勢いで教室のドアが開けられ、非常に美しい少女が飛び込んで来た。

豊かに波打つ水色の髪が、少女の背中で弾んでいる。

クラスメイトたちは彼女の姿を見たたん、慌てふためきバタバタと教室の後ろへ集まると整列した。

ニーナはノートの上に手を置いたまま迷惑そうな視線を彼女へと向ける。

「……ここには来るなと言っただろうが、レナス」

「知らないわよそんなこと」

抗議の声をバツサリと切り捨て、レナスがニーナの隣の席に腰掛けた。

ニーナはチラリと直立不動のクラスメイトたちに目をやり、心の中で嘆息した。そして非難がましい視線をレナスに送る。

だがレナスは首を振って髪を後ろに流すと、平然と言い放った。

「なによ。私が来たからって普通にしていればいいだけじゃない」

そう言えるのは自分の好きなように生きてきたレナスだからこそ、だ。

普通は貴族クラスの生徒が、しかも「学園の人魚」と呼ばれている彼女が飛び込んできたら、庶民クラスの生徒が萎縮しない方がおかしい。

むしろ身分の差に頓着しない彼女の方が珍しいのだ。

「歩きながら話そうか」

これ以上クラスメイトを緊張させておくのも申し訳ない気がして、ニーナが立ち上がる。レナスもすぐにそれに習った。

「ちよつと教授にこれを提出してくるから」

「何よそれ」

二人並んで歩きながら職員室へと向かう。

「反省文」

「今度は何をやらかしたのよ」

驚いた様子も見せずレナスが尋ねた。ニーナが罰則を受けるのは日常茶飯事のことだから、いちいち反応してられない。

ニーナは何かと目立つのだ。

容姿は平凡なのだが、不思議な存在感があった。それが独特の物言いと相まって人の目をひきつける。

ついでに言うと、教授陣さえ一目置く「学園の人魚」と親しくしていることも、良くも悪くも彼女が注目される理由の一つであったのだが。

「作文の内容が悪いって」

「作文？」

レナスが形の良い眉を潜めた。

「将来の夢、という内容で書かされたんだけどね」

「それでどうして反省文まで書かされるのよ」

「夢は娼婦かダンサー、って書いたら気に入らなかつたらしくて」
呆れて立ち止まるレナス。

ニーナはそれに気づかず、数歩進んだところでようやく、隣に彼女が居ないことに気がついた。

振り返ると咎めるような視線が突き刺さる。

「どうしてそんなに要領が悪いのよ!」

「えー……でも本当のことだし」

「正直に書けば良いってもんじゃないのよ!」

苦虫を噛み潰したような顔で立腹するレナスに、ニーナは不思議そうな視線を送るばかりだ。

レナスはしばらくギリギリと歯軋りをしていたが、やがて諦めた様子で肩を落とした。

「もう良いわよ。それでこそニーナよ」

「ありがとう」

「褒めてない！」

二人は再び並んで歩き出した。

木造だった庶民クラスの校舎を抜けて、中庭を突っ切る。その先にはガラスで建てられた教授棟があった。

乳白色のガラスで出来た建物は一見すると脆そうだが、実は土神の加護を受けた教授が魔法で強化しているため、実際は要塞なみの強固さを持っている。

その壁は今、茜色の夕陽を浴びて不思議な紋様を浮かべていた。

先ほどまで膨れっ面だったレナスの顔が、教授棟に近づくにつれて何かを期待するような夢見がちなものに変わっていく。

それに気づいたニーナが声をかけた。

「どうした、レナス」

「あのね、あのね、さっき話そうとしてたことなんだけど、うんうんとニーナが頷く。

「新しく来た音楽の教授がすごく素敵なのよ！ 今行けばお会いできるかもしれないわ！」

頬を紅潮させ、瞳を輝かせて言うレナス。

そのはしゃぎぶりは、まるで憧れの俳優や先輩を語る思春期前の少女のようだった。

「レナス……たしか私より年上だったよね？」

「そうよ。あなた今年で十五でしょ。私は十七よ。なぜ？」

「いや……」

言葉を濁しながらニーナは視線を逸らせた。

ニーナはレナスの様子を見て、十七にしては反応が初々し過ぎな

いだろうか……と考えていたのだが、それは単に彼女の周辺に居る女たちが強くて逞しいのと、ニーナ自身が年齢にしては冷めているだけだったりする。

しかしその美しさで数多くの男を夢中にさせてきたレナスが、自分から男に関心を持つというのも珍しい。

一体どんな相手なのだろうかと、少し好奇心をそそられた。

教授棟の入り口を入ってすぐの場所に職員室があり、授業を終えた教授たちがチラホラと戻ってきている。

ニーナがジン教授にノートを提出している間にも、レナスはそわそわと辺りを見回していた。

「来たわ！ 彼よ」

耳元で囁かれたニーナが顔を上げると、一人の教授がドアをくぐって入ってくる所だった。

ゆったりとしたローブに包まれた細身の身体。知性的な顔にかけた眼鏡は、髪と同じ銀色だった。

こういうインテリタイプが好みなのか……と観察している間にも、レナスは積極的に話しかけている。

「友人のニーナです」

レナスが嬉しそうに紹介すると、教授がこちらに視線を向けた。

軽く会釈するニーナ。

彼女が庶民クラスの生徒であることは、制服の刺繍で分かるはずだ。

レナスの制服には白い糸で学園のエンブレムが刺繍されている。

対するニーナの制服は、紺色の刺繍がされていた。

教授の中には庶民クラスというだけであからさまに見下したり嫌悪の表情を浮かべる者もいる。

この新しい教授がそうした反応を見せたとしても、ニーナは気にしなかっただろう。

だからこそ、笑顔で握手を求められた時は少し面食らった。

「初めまして。音楽教授のアキです」

「ニーナと言います」

握手を交わしながら、ニーナは相手を観察した。

顔立ちの整った綺麗な男だ、と思う。ニーナとの身分の差も気にしている様子は無い。

「貴女は音楽の授業をとっているんですか？」

「いいえ。私の授業カリキュラムには含まれていませんから」

肩をすくめるニーナ。その言葉に皮肉な調子はない。

貴族と違い庶民は必要最低限の授業しか受けないため、音楽や作法などの科目とは無縁だった。

「良かったら今度、音楽クラブを見学しに来て下さい」

「考えておきます」

当たり障りのない返事をしながらニーナは呆れていた。

この教授 - アキと言ったか。庶民クラスの生徒がクラブ活動をする余裕があると思っているのだろうか？

ほとんどのクラブは金銭的にも時間的にも余裕がある貴族クラスの生徒で占められている。

彼らは学校が終わった後で、家業を助けるために働く必要も、生活のために労働する必要もないのだから。

世間知らずで呑気な教授だと思いながら横目で見ると、レナスの目に嫉妬の色が浮かんでいるのに気がついた。

そういえば先ほどから握手をしたままだ。

ぱつと手を離し、「ではこれで」と挨拶をするとドアに向かう。

ただの教授と生徒。しかもニーナは音楽の授業をとっていないのだから、これ以上アキと親しくなることもない。

長居は無用だった。

「ね、素敵な教授でしょう？」

教授棟から出たところでレナスが言った。

上の空で相槌を打ちながらニーナはアキのことを思い返していた。

愛想良く微笑みながら握手をした彼の、瞳だけは笑っていなかった。

いやに無機質な、それでいて警戒と探るような色を浮かべた瞳。
何が目的でこの学園に来たのか。自分には関係の無い話だが、何か気にかかる男だ……と首を捻った。

その頃、アキもニーナのことを全く同じように感じていたとは露知らず。

2、娼館ウィッチグラス

「ただいま、母さん」

「お帰り。すぐに夕飯だからね」

自分に背中を向けたまま言うミヤオの言葉に、ニーナは「おや？」と眉を潜めてみせた。

「今日、忙しいの？」

「そうなんだよ。予約のお客さんが多いらしくてね。先に食べとかないと」

「ふーん」

言いながら自分の部屋へと向かう。

何人もの姉さんたちと廊下や階段ですれ違った。

誰もが皆、開店前の忙しさでバタバタしている。

なかには全裸に近いような扇情的な格好の女も居たけれど、ここでは珍しくもない格好なので誰も気にしない。

ニーナの住む場所、それは娼館であった。

この館で厨房仕事を任されているのがミヤオ。その息子のレンは用心棒と力仕事をしている。

十五年前、レンは生まれたばかりの捨て子を拾ってきた。それがニーナである。

ミヤオとレンは実の家族のように自分を受け入れ、育ててくれた。幼い頃から娼婦という仕事を間近で見してきたニーナには、それが特異な職業だという意識が無かった。

成長するにつれ娼婦に対する世間の見方も知るようになったが、ニーナの価値観がそれで揺らぐことはなかった。

魚屋や肉屋などと同じように、彼女の中で娼婦というのはあくまでも職業の一つでしかなかったのだ。

娼婦だからといって、何を悲観的になる必要がある？ 何を蔑む必要がある？

捨て子で、必要最低限の学しか持たず、裏町で暮らしている自分である。

このまま成人すれば娼婦か酒場の踊り子が妥当な職業だろうな、と本気で思っていた。

教授たちのほとんどは階級意識を強く持っているため、自分たちの気に障るものでない限り、庶民のニーナの言動や思惑などには無関心だ。

むしろ「その通りだ」と賛同さえしただろう。

だがジン教授は珍しく、庶民であっても高い志と目的を持って勉強すべしという教育理念に燃えている教師だったため、ニーナの作文の内容を嘆いた。

それが反省文の課題へとつながったのである。

自分のやったことに後悔も反省もしていないが、罰則を受けたなどと聞いたらミヤオもレンも心配するだろう。

このことは二人には黙ってしようとニーナは決めた。

彼女が着替えを済ませ厨房に戻ると、すでに二人分の夕飯が食卓の上に乗っていた。

レンの姿は無い。いつものようにお風呂を沸かしているのだろう。慌しくミヤオと共に食事を済ませ、仕事に取りかかった。

忙しくなる前に夕飯を済ませようとやって来る姉さんたちの給仕と皿洗いをしているうちに、店は開店時間を迎える。

三十人を超える娼婦たちの面倒を二人で見るのだから、この時間はいつも戦場のようだった。

給仕、皿洗い、シーツの交換、洗濯……目の回るような思いをしながら働いていると、デイジー姉さんからの注文が来た。

客が夜食と酒を所望しているから、部屋まで運んで欲しいというものだ。

手早く銀の盆にワインとつまみを乗せ、店の方へと足を向けた。

厨房があるのは「裏」と呼ばれる建物で、ミヤオたち一家と全ての娼婦の寝泊りする部屋がある。

娼婦たちが仕事をするのが「店」と呼ばれる建物で、「裏」とは廊下一本で繋がっていた。

ニーナは突き刺さるような光に目を細め、廊下の出口で一瞬、足を止めた。

煌々キラキラと輝くシャンデリアを見上げ、優美な曲線を描く螺旋階段へと向かう。

視線を伏せて歩き、客や姉さんたちとすれ違う時は道を譲り、頭を下げる。

そうしてやっと目的の部屋へと辿り着いた。

「姉さん、ニーナです」

控え目なノックをし、そっと囁く。

しばらく待っていると、ガウンを羽織ったデイジーがドアを開けた。

「ありがとうございます」

艶っぽい笑みを浮かべて盆を受け取ったデイジーの後ろから、客の男がひよいと顔をのぞかせた。

「やあ、ニーナ」

呆気にとられて男を見つめるニーナ。

デイジーはそんな二人の様子を見て、男を振り返るとしとやかに尋ねた。

「お知り合い？」

「生徒だよ」

アキの言葉にデイジーが目丸くする。

「ちょうど良い。もっと話したいと思っていた。少し相手をしてくれ」

「あ？」

「え？」

アキはニーナの肩に腕を回し、強引に部屋の中へと引き寄せる。

入り口は三人もの人間が自由に動けるほど広くない。

気づけばデイジーは、ニーナと身体を入れ替わるようにしてドア

の外へと押し出されていた。

「ちよっ……アキ、ニーナは未成年よ!!」

「大丈夫だ。抱きはしない」

閉まりかけたドアの向こうで叫ぶデイジーの顔は、自分を追い出したことへの怒りよりも、ニーナの貞操への心配が浮かんでいた。

強引にドアを閉めたアキは、ニーナを寝台に連れて行って座らせる。

ようやくそこで自分の置かれた状況を理解したニーナ。

「……よく教授の給料でこの店に来ましたね」

ワインの栓を抜くアキを上目遣いで見ながら呟いた。

ここ「ウィッチグラス」は裕福な商人や上流階級の客を相手にする高級娼館だ。

教授の給料がどのぐらいか分からないけれど、そう簡単にこの店の門をくぐれるとは信じがたい。

「それは誤解だな。教授の給料もそれほど悪くない」

アキはニヤリと笑うと、ニーナの真正面に椅子を寄せて座り込んだ。

手の中のグラスに満たされたワインを一気に飲む。

その様子を見ながら眉を潜めるニーナ。

学園に居た時の紳士然とした雰囲気は消え去り、目の前の男は傲慢で不敵な笑みを浮かべていた。

いっそ見事と言えるほどの豹変ぶりだ。

この男のこんな姿を見たら、レナスは何と思うだろう。

レナスのヒステリックな憤慨ぶりが目に浮かぶようでニーナはげんなりした。

そんな彼女をアキは面白そうに観察している。

「なるほどな」

頬杖をついたまま彼が呟き、ニーナは小首をかしげた。

「お前の作文をジン教授が見せてくれた。反省文を書かせたが、全く内容が変わっていないと嘆いていたが。」

この環境に居るのなら、あの作文の内容を怒る方が間違いだ」
クツクツと笑って言うアキに、ニーナはその通りだと頷いた。

「居心地が悪いだろう？ あの学園は」

問われてニーナはアキの瞳を真っ直ぐに見つめた。

その瞳に揺らぎは無い。

「悪く、ないわ」

アキの片眉が持ち上がる。ニーナの言ったことを信じていないようだ。

理由を説明しようか。だが、説明しようと言葉を重ねるほど言い訳っぽく聞こえないだろうか。

ニーナは黙っていることにした。代わりに「嘘ではない」という気持ちを込めて見つめるだけで。

その時、アキの瞳が神秘的な金色をしていることに気がついた。

「……そうか」

アキは小さく呟くと、おもむろにニーナの髪を一房手に取り、自分の方へと引き寄せた。

彼女の髪は肩に届くぐらいの長さだったため、それにつられて彼の方へと顔が近づく。

至近距離で見つめあうニーナとアキ。

アキの薄く形の良い唇が、言葉を発するために少しだけ開かれた、その時。

「ニーナから離れてもらおうか」

怒気を含んだ声に驚いて振り返ると、堂々たる体躯の男が腕を組んで壁に寄りかかっていた。

「レン」

目を丸くしたニーナが名前を呼ぶ。

レンは今まで見たことが無いほどの渋面を浮かべていた。

「おやおや。客の邪魔をするのか？」

立ち上がったアキが、皮肉な笑みを浮かべて言う。

「第一に、ニーナは娼婦じゃない。素人女にちょっかいを出すのは

客としてのルール違反だ。

第二に、たとえ客とは言え、俺は悪魔が家族に手を出すのを見逃すつもりは無い」

レンの言葉にニーナは、ゆっくりと首をめぐらせてアキを見つめた。

きよとんとした顔で言う。

「悪魔？」

アキは微笑みを浮かべたままニーナを見つめ、そのまま視線をレンに移した。

「分かるのか。……この娼館もなかなか面白い人間が集まっているようだな」

その顔は、笑っているはずなのになぜか恐ろしく、とても美しかった。

ああ。人間じゃないって言うのも納得できるな、この美しさは……その顔に魅入られながら、ニーナはぼんやりと思っていた。

3、なし崩しの契約成立

学園の図書室は、どこか神秘的な雰囲気のある場所であった。

校庭の北側に広がる常緑樹の森。木々に囲まれるようにしてレンガ造りの細長い塔が建っている。

その塔全体が図書室になっていた。

地形のせいか生徒たちは滅多に寄り付かず、中は静寂と不思議な匂いに満ちている。

天井まで吹き抜けになった空間が広がり、窓は天窓が一つだけ。

あまりにも高い位置にあるため、下から見上げてぼんやりとした光が見えるだけだ。

しかし、そのままじっと目を凝らしていれば次第に見えてくる。

天井近くを浮遊する無数の球体 - 「知識の水晶玉」だ。

「……………」

膝を抱えて床に座り込んでいたニーナが、ゆっくりと目を開けた。伸びをしながら手を広げると、掌に納まっていた水晶玉がふわりと飛び立つ。鈍い桃色に光るそれは、吸い込まれるように上昇し見えなくなった。

「また会ったな」

眠そうな瞳で水晶玉を見上げていたニーナは、肩越しに声の主を睨みつけた。

「……………教授が会いに来たんでしょ？」

会ったのが偶然みたいに言わないで、と無言でつつこむ。

「その通りだ」

アキは例の不敵な笑みを浮かべ、ニーナの隣に来ると腰を下ろした。

昨夜のレンとの短いやり取りの後、彼はデイジーと寝るでもなくさっさと帰ってしまった。

「あいつにはなるべく近づくな」

レンの方もニーナにそれだけ言うと、それ以上の話を決してしようとしなかった。そしてニーナが仕事を終える少し前に、ふいどこかへ出かけてしまったのである。

そのまま朝になってからもレンは帰ってこなかった。

「何を調べてたんだ？」

アキが水晶玉を見上げながら聞いた。

「四十八手の解説書」

「あるのかここに」

「冗談よ」

「……」

無表情でお互いの顔を見つめあうニーナとアキ。

けれど引き結ばれたアキの唇はびくびくと引きつっているし、間違いない青筋が浮いている。

唇の隙間から押し殺した呟きが漏れていた。

「この俺をおちよくるとは……いい度胸だ。人間ふぜいが」

「ん？」

よく聞こえなかったニーナが、下からアキの顔を覗き込むようにして聞き返す。

アキは目を細めて彼女の顔を見下ろすと、口を動かさずに「いいだろう」と呟いた。

ニーナはその瞬間、本能的に身の危険を感じて身体をのけぞらす。しかし、アキが彼女の腕をつかんで床に押し倒す動きの方が素早かった。

「なんっ……」

驚きの声は途中から、重ねられたアキの唇に吸い込まれた。そのまま深く口づけられる。

とつさに目を閉じてしまったせいで、意識は嫌でも彼の舌の動きに集中する。

すくいあげられ、吸われ、なぞられ、甘噛みあまがされて。

成す術もなく、されるがままだったニーナが違和感を感じて眉を

潜めた。

今、口腔内に感じた微かな味は、血ではないだろうか？
薄目を開けると、からかうようなアキの視線とぶつかった。

「！」

驚いた拍子に、先ほど感じた違和感の正体である液体が喉元を通
つていった。

「……………」

「ちゃんと受け入れたな」

ニーナの白い喉が上下したのを確認して、アキは彼女の戒めを解
いた。

身体を起こし床に座りなおすその姿を、ニーナは身動きもできず
に呆然と見つめる。

「今の、血じゃなかった？」

視線をアキの口元にやると、下唇に血がにじんでいる。

「そうだ。これでお前は俺のものになった」

「は？」

床に寝転がったままニーナが間抜けな返事をした。

「俺の血を受けれいれた相手とは、自動的に契約が成立する。俺は
契約者に対し力を分け与え、その身を保護する義務がある。契約者
は俺のために仕えなければならぬ」

ニーナははじけるように飛び起きた。

「俺が悪魔だということは知ってるな？」

文句を言おうとしたところで唐突に質問され、面食らったニーナ
が曖昧に頷く。

それを確認したアキが再び口を開いた。

「光世界ひかりせかいと闇世界やみせかいのことは知っているか？」

「え、と……………神学の授業で教わる程度のことなら」

ニーナの返事にアキは頷いてみせた。

その視線に「説明してみる」という彼の意図を感じ、ゆっくりと
言葉を紡いだ。

「光世界は善と平和の象徴。闇世界は悪と混乱の象徴。光世界と闇世界は永遠に闘い続けている……それは善と悪の力の均衡が取れているから。悪が無くなることも善が無くなることもない。どちらかが片方よりも強くなつてはいけない。」

この世界はその微妙なバランスの上に成り立っている。善と悪のバランスが崩れる時、世界は滅びる」

「合格点。さすが成績優秀者なだけあるな」

「魔法以外はね」

ニーナは肩をすくめた。彼女の魔力はかなり弱いため、魔法の授業では常に落第すれすれだ。

その穴埋めをするかのように、一般科目では学園一と言って良いほど成績が良い。しかし魔力の高い者ほど重宝されるこの世界においては、価値がないも同然だった。

「じゃあ悪魔と善魔ぜんまの違いは？」

「光世界の住人は善魔。闇世界の住人が……悪魔」

チラリと上目遣いにアキを見る。

「善魔は人間界に善と平和をもたらすよう働きかける。その反対に悪魔は悪と混乱をもたらすように働きかける」

「その通り。そこから先は授業じゃ教わらないだろう？」

ニーナが頷いた。

「善魔と悪魔の働きによって人間の魂は善と悪に染められる。その人間が死して冥界の王の裁きを受けた時、善の比率が高ければ光世界へ。悪の比率が高ければ闇世界の住人となるんだ。」

光世界と闇世界の闘いにおいて、戦力は多い方が良い。だから善魔も悪魔も積極的に人間界に介入する」

そこでアキはニーナの視線に気がついて苦笑した。その顔は神妙に授業を受ける生徒そのものといったもので、瞳には知的好奇心が溢れんばかりに輝いている。

「悪魔なのに教えるのが上手ね、アキ教授」

「アキでいい。どうせ教授という立場は一時的なものに過ぎないか

らな」

答えながらアキは、ニーナが初めて自分の名を呼んだことに気づいていた。

ようやく彼女の中で自分という存在がそれだけの価値を持ったということだろうか。

考えながらも話を続ける。

「実は闇世界の俺の屋敷で盗難事件があつてな。まあ、それはいつものことなんだが」

「……いつもなんだ」

「闇世界の住人の本質は、悪だ。同じ世界の住人同士であつても、常に相手を陥れ蹴落とすことを考えている。」

俺の位は高いからな。その座を狙って暗殺者に狙われたり敵から差し向けられた盗賊が忍び込むことは日常茶飯事だ」

ニヤリとアキが笑う。

「なんだか壮絶な話だ……と考えていたニーナは、続けて語られたアキの言葉に目を瞠みはった。

「盗賊団のほとんどはその場で始末したんだが、人間界に逃げ込んだ奴が居たんだ。そいつが持って逃げた宝物ほうちものが非常に危険な代物で、何としても取り返さねばならない。」

俺はそいつを追ってここに来たんだ。お前には俺の手助けをしてもらおう」

「なんで私が！」

「ちょうど人間界での手駒が欲しいと思つてたんだ。闇世界から俺の部下を呼び寄せると、その気配で盗賊が逃げるからな。残念ながら俺ほど完璧に気配を消すことができる部下は居ない」

問いかけるようなニーナの視線に、最後の一言を付け加える。

要するにアキほどの実力者でなければ、敵に悟られないほど完璧に気配を消すことができないということか。

「闇系統の魔女でも探して使い魔にしようかと思つていたんだが。」

レンとか言つたか？ あの大男。お前、あいつから俺が悪魔だっ

て教えられただろう。正体を説明する手間も省けたし、同じ学園に居るからピツタリだと思ってな」

「断る」

アキの話聞き終えたニーナが即座に言い放った。

だがアキはニマア、と人の悪い笑みを浮かべると嬉しさを隠し切れない声で答えた。

「もう契約は成立した。破棄することは不可能だ」

4、ニーナの胸のうち

なんでこんなことになってしまったのか……。

娼館に帰り、自分の部屋のベッドに座り込みながらニーナは溜め息をついた。

生々しく思い出す、アキとのキスの記憶。

ニーナは複雑だった。

唇を重ねるだけのキスならば経験はあったが、いわゆるディープキスは初めてだった。けれどそんなことは大したことじゃない。

将来、娼婦になることを考えているから、キスなんて取るに足りないことだと思う。せいぜい「初めての相手が顔のいい男で良かったな」ぐらいのものだ。

問題は相手が、友人 - レナスの想い人だと言うことだ。

彼女のことを考えると気が重い。しかも、ニーナを使い魔にするためだけなら、わざわざディープキスをする必要は無かったのだ。

アキからそのことを聞いた時のことを思い出し、彼女の胸は苛立ちを覚えた。

血を吐き出せば契約は無効になるのか - そう問いかけたニーナに、アキはあっさりと首を振った。

「体内に入った瞬間、身体中に広がるからな。吐き出そうとしても出るのは胃液ぐらいなものだろう」

そして更に続けられたアキの話に、ニーナはゾツと青ざめる。

「契約者は定期的に俺の血を受け入れなければ、俺に仕える義務を放棄したとして罰を受ける。身体の末端から肉体が腐っていき、やがて死に至るんだ。

諦めるんだな。今までの話を聞いておきながら無関係で居るのは虫が良すぎるだろう？」

いや、説明して欲しいなんて言った覚えないし。勝手に喋ってた

のアキじゃないか……。

絶望的な気分になったニーナは、思わず両手を床についてうなだれた。

やはり「近づくな」と言ったレンの言葉は正しかった……言いつけを破ってアキに近づいた拳あけく句、使い魔にされてしまったなんて知られたらどんなに怒られるだろう。

しかもディープリキスをしてしまったなんて、レンにだけは知られたくない。

そこまで考えてニーナは、あることに思い当たった。

「定期的に血を受け入れる……って、まさか……」

恐る恐る顔を上げたニーナを「ん？」と見下ろしたアキは、何かに納得したような顔になった。

「ああ。血という言い方で表しているが、要するに魔力のことだ。

指先でお前に触れて、そこから魔力を注入するだけでもいい。キスにこだわる必要は無い」

ホツとしたニーナだったが、疑問が頭に浮かぶ。

「じゃあ、何でさつきは……」

「お前が生意気だったから」

満足げな笑みを浮かべて言われ、額に青筋が立った。

「アキ……！」

「なかなか面白かったぞ。普段から取り澄ましてるお前が動揺する様さまは。何だったら、毎回キスにしても良いが？」

顎をすくわれ、顔を近づけられたニーナが慌てて後ずさりする。

拳を口に当てて笑っているアキの姿が、腹立たしいことこの上ない。

ニーナに睨みつけられながらもひとしきり笑ったアキが、再び彼女に向き直った。

「盗まれた宝物なんだが。物は指輪だ」

真面目な顔に戻ったアキの言葉に、ニーナも思わず居住まいを直す。

「指輪？」

「ああ。この国ぐらい一瞬で吹き飛ばすほどの力を秘めている」
目を丸くするニーナをよそに、あくまで淡々とアキは語る。

「あれだけの力を持った道具だと、半端な悪魔じゃ使いこなせない。
その点は安心なんだが。」

もし指輪が魔力の高い人間の手に渡つたら……例えばレナスのよ
うな人間に渡つたら厄介だ」

息を飲むニーナ。彼女の脳裏には友人の姿が浮かんでいた。

レナスは水神の中でも最高権力を持つ、ミルラーデル神の加護を
受けた娘だ。そのため彼女の魔力はずば抜けて高く、水系魔法の威
力は帝国一と言われている。

その美貌と魔法の系統が、「学園の人魚」と呼ばれる所以だ。

「でも、使い方を知らなければ使うことは出来ないでしょう？」

ニーナの問いに、アキは溜め息をついた。

「使い方を知らなくても、持ち主の感情次第でその力が暴走する可
能性がある」

ニーナは絶句した。

レナスは貴族の出自という恵まれた境遇に加え、その魔力を国防
力として重要視した国家によって保護されてきた。

美貌、家柄、国家の後ろ盾を備え持つレナスは、幼い頃から特別
扱いされてきた。

恐いもの知らずに育つたレナスの、感情の起伏はかなり激しい。

出自も才能も性格もニーナとは対照的な少女だが、なぜか彼女は
ニーナを気に入っている。

「待てよ。レナスが指輪の力に取り込まれる前に、使い魔にしてし
まえば……」

アキが呟いた言葉にニーナがギョツとする。

感情の浮き沈みの激しさに疲れることもあるが、レナスはニーナ
の友人だ。使い魔にさせたくはない。

そんな彼女の無言の訴えが届いたのだろうか。アキが肩をすくめ

た。

「やめとこう。疲れそうだ」

……どうやらアキも彼女の性格を見抜いているようだ。

けれど、もし彼がその気になれば、ためらいなくレナスを使い魔にしてしまうだろう。

「私が、協力するから」

レナスのためにも。そんな思いでその言葉を口にしたニーナに、アキはニッコリ笑って手を差し出した。

それは学園の教授に相応しい、紳士的な笑顔だった。

「あの猫つかぶり……」

無然とした顔でニーナが呟いた時、部屋の扉がノックされた。

「あ、はい」

返事をしてドアを開けたニーナは、意外な人物の姿を目にして驚いた。

「こんにちは、ニーナ。久しぶりね」

扇を口元に当てて微笑んでいるのは、絶世の美女だった。

ハチミツ色の髪の毛は、弱々しい光の下でも艶やかにきらめいている。

豪華な薔薇色のドレスとアクセサリーは、華美になりすぎないよう抑えられた上品なデザインでありながら、一目で高価なものと分かる。

身につけた宝石に負けないほど美しい瞳はエメラルド色。見ているだけで吸い込まれそうだ。

「レイチエル。どうしたの？」

身体を脇に寄せると、レイチエルと呼ばれた美女はしずしずと部屋の中に入ってきた。

そのまま簡素な椅子に腰を下ろす。

質素な部屋の中で、そこだけが華やかで異質な空間であった。

一体何の用事だろうと思いつながらニーナは紅茶を入れる。

レイチエルは宮中娼婦として、普段は王城や貴族の屋敷に滞在している。

高級娼婦の中でも更に高い教養と美貌を持つものが、厳しい審査をくぐりぬけて宮中娼婦になる。

名目は貴族と王族全員が共有する娼婦だが、時に公式の場で外国からの大使を接待するなど、重要な役目を果たす。

レイチエルは名目上はウィッチグラスのオーナーだが、宮中娼婦の仕事が忙しいため経営は店長のミレイユに任せっぱなしだ。

たまに店の様子を見に来るが、その時でさえ「裏」の娼婦の部屋にまで来ることは無い。ましてニーナは娼婦ではなく、ただの下働きである。

「ありがとう」

笑顔でティーカップを受け取ったレイチエルが、優雅に紅茶を飲む。

その表情がほころんだ。

「美味しいわ」

同性すら魅了する笑顔を向けられても、ニーナは平然とした様子で「良かった」と言っただけだった。

レイチエルの瞳に面白そうな表情が浮かぶ。

「悪魔に会ったんですって？」

自分の分のティーカップを持ち上げたニーナの手が、空中で止まった。

「昨日レンが来て教えてくれたわ」

レンがレイチエルに会いに行った。

かすかに感じた胸の痛みを押し隠し、ニーナは無言でレイチエルに頷いた。

「けっこう顔がいらいしいわね。私も見てみたいわ」

「デイジー姉さんのお客らしいから。また来るんじゃないかな」

そう。会ったのは昨夜が初めてだったが、数日前からアキは毎晩のようにやって来ていたらしい。

ニーナの言葉に頷くレイチエル。

ふいに彼女が身を乗り出した。口元には相変わらず微笑みが浮かんでいたが、目が真剣だ。

「悪魔に、何もされなかつた？」

「……大丈夫よ」

ニーナは安心させるように、少し笑ってみせた。

心の動揺は、隠し通せたはずだ。

探るようにつめてくるレイチエルの視線を、じっと見つめ返す。やがてレイチエルは、その目をニーナの顔から外し、ゆっくりと姿勢を正した。

「……良かったわ。でも、お願い。その悪魔には近づかないで。レンも私も貴女のことを心配しているのよ」

「ありがとう、レイチエル」

部屋を出て行く彼女を戸口まで見送ったニーナは、貼り付けたような笑みを浮かべたままだった。

5、襲撃事件

石造りの建物の中を、眉間に皺を寄せて腕組みをしたニーナが歩いていった。

窓が小さくて差し込んでくる光が少ないせい、薄暗い廊下の中はひんやりとしている。

ニーナが腕を組んでいるのは、悩み事のせいだけではなく肌寒さから身を守るためでもあった。

ここはレナスの所属する貴族クラスの校舎。本来ならばニーナが足を踏み入れるような場所ではない。

にもかかわらず彼女がここに居るのは、盗まれた宝物と窃盗犯の悪魔を見つけるためにレナスの力を借りようと思ったからだ。

「生徒の中に不審な動きをしている奴が居るとか、妙なものを拾ったとか、情報収集をしてくれ」

アキにそう言われ、ニーナは頷いた。しかし……
「完全にアキの人選ミスだな」

天井を見上げて溜め息をつく。
レナスを除けば、ニーナには友人らしい友人が居なかった。

元々彼女の性格が社交的でなかったせいもあるが、ニーナと積極的に関わろうとする子供たちも居なかったのである。

ニーナには、同世代の子供たちから距離を置かれる条件が揃いつぎていた。

捨て子で、娼館に住んでいて、魔力が低い。それなのに一般科目は成績優秀。そして大人に囲まれて育った子供特有の落ち着きを持っていたため、よそよそしく他人を受け付けない雰囲気に見えた。そんな彼女をからかいや嘲り、嫉妬や中傷の的にすることはあっても、友人として踏み込んだ付き合いをしようとする子供は居なかった。

そのことがまた、ニーナをますます非社会的な人間にしていた

のだ。

友人が居ないことを今更嘆くつもりもないし、無理して作るうとも思わない。だが、今まで興味がなかった生徒同士の噂話やゴシップを集めなければいけない今、途方にくれていた。

考えた末ニーナは、レナスに協力してもらおうと思った。

本人が望もうと望むまいと、レナスの周囲には常に取り巻きが集まってくる。彼らから噂話やゴシップを聞かされているレナスであれば、変わった出来事があれば知っているに違いない。

なんだか友情を利用するようで後ろめたい気がするし、今までそういう話題に興味が無かったニーナが急に関心を見せても不審がられるだろうし……どうしようか。

「ニーナ？」

間違えようのないレナスの声が背後から聞こえ、心臓が跳ね上がる。

動揺を押し隠し平静を装って振り向いたニーナだったが、意外な光景に思わず目が点になってしまった。

レナスの背後に大勢の男子生徒が連なっている。

類稀たぐいまれな美貌の持ち主であるレナスの信奉者は多い。少年たちに囲まれるレナスの姿は、もはや学園では当たり前前の光景となっていた。だが……。

それにしたって多すぎる、と廊下いっばいに広がっている男子生徒を見ながらレナスは思った。

一体、何事なにごとだろうか。

彼らは庶民クラスのニーナを横目で見ながら、ひそひそと囁きあっている。不快の表情を隠そうともしない生徒も居る。

しかしレナスの手前、あからさまにニーナを侮蔑しようとする人間は居ないようだ。

「どうしたの？ あなたが来るなんて珍しいわね。でも、会えて嬉しいわ。話したいことがあったの」

純粹に喜びを浮かべるレナスの表情と、後ろの取り巻きの表情と

のコントラストが面白くてニーナが苦笑する。

「ちよつとね。話したいことって？」

「これから春の花祭りの練習があるんだけど、見学しない？」

レナスの言葉にニーナは考えた。

春の花祭りは学園の恒例行事の一つで、特に女生徒にとっては楽しみなイベントだ。

花神の加護を受けた教授と生徒が大量の花びらを生み出し、風神の加護を受けた教授と生徒が祭の間中それを宙に舞わせる、幻想的で華やかな祭。

中庭に設けられた舞台の上では、選ばれた女生徒たちによる唄と踊りが繰り広げられる。

男子生徒は、参加者の中からこれと見定めた少女に花冠を贈る。

少女が、花冠と同じ花を相手の胸ポケットに挿すと求愛を受け入れたことになる。逆に、魔法で花冠を分解されると断りの意味になる。

普段は地味な制服をまとった少女たちが美しく着飾ることのできる機会であると共に、将来の伴侶を見つける可能性のあるイベントなのだ。

去年のレナスは信奉者たちから差し出される花冠を分解することに忙しく、地面にもった花びらに彼女の足首が埋まるほどだった。

「練習……ってことは、何かの役をもらったの？」

「ええ。唄い手の一人に選ばれたのよ」

頬を染め、はにかみながら言うレナス。

踊り手や唄い手に選ばれるのは、ほとんどの女生徒たちの夢と言っても良い。

春の訪れを神に感謝し、全校生徒の代表として踊りと唄を奉納する栄誉な役目だからだ。

当然、それだけの實力を持った者でなければ選ばれない。

しかしレナスが喜ぶ理由は、他にもある。

誰もかなわないほどの魔力を持ち、ゆくゆくは王宮つき魔術師か

賢者にと望まれ、将来は安泰だと言われているレナス。だが彼女は密かにプロの唄い手になりたいと思っていた。

音楽の授業にも音楽クラブにも熱心に取り組んできたレナスは、今回、唄い手に抜擢されたことで張り切っていた。

レナスの本当の夢を知っているニーナも、微笑ましい気持ちで喜ぶ友人の姿を眺める。

「良かったね、レナス。私も練習してるとこ、見てみたい」

午後の授業があつたが、一回サボツた程度で困るようなことは無い。

顔を輝かせたレナスがニーナの腕を取って歩き出す。

腕を組んで歩く二人の少女の後から、面白くなさそうな顔をした男子生徒がゾロゾロとついて来た。

「ところでコレ、どうしたの？」

隣のレナスに顔を向けて尋ねる。何が言いたいかは通じるはずだ。

「ああ……護衛なんですって」

「護衛？」

レナスが肩をすくめる。

「例の襲撃事件のせいよ」

きょとんとしたニーナの顔を見て、呆れたようにレナスが続ける。

「知らないの？ 被害者の一人はあなたのクラスメートじゃないの」
言われて思い出す。

数日前、アリエスというクラスメートが帰宅途中に何者かに襲われたとジン教授から聞かされた。

道を歩いていたら突然、背後から何らかの衝撃を受けて気を失つたとのこと。

しばらくして意識を取り戻すと、カバンを持ち去られていたという。

乱暴された形跡もなく、荷物を奪われただけなので単なる物盗りの犯行だと思われた。

盗られたものの中に貴重品があつたわけでもなく、登下校の際は

気をつけるようにとの忠告だけでその話は終わった。

「ほかにも被害者が居たなんて知らなかった」

「貴族クラスの生徒が二人、襲われたの。アリエスが襲われる前に一人と、アリエスの後に一人。どちらも下級貴族の子だったから徒歩で登下校してたらしいわ。」

この三人には、ある共通点があったの。皆、魔力が高かったのよ」
「それで、この事態になったわけか」

ニーナは納得した。

魔力の高い生徒が三人も襲われた。必然的に、次に狙われるのも魔力の高い人間だと予想される。

そうすると当然ながら、学園中で最も魔力の高いレナスが標的になる可能性が出てくるわけだ。

実際のところ、彼女の登下校には送迎馬車も警護の者もついていないし、襲撃者を魔法で撃退することなど簡単だから護衛が必要とは思えない。

けれどレナスと親しくなりたいと思っている男子生徒にとって、今回の事件は願ってもないチャンスであろう。

護衛という大義名分のもと、堂々と彼女に近づくことが出来るのだから。

「心配するなレナス。どんな奴が来ても、俺が君を守るから」

レナスの真後ろに控えていた男子生徒が、なれなれしく彼女の肩に手を乗せた。

その言葉を無視して、相変わらず前方を見つめ続けているレナスだが、その眉間がわずかに陰ったことにニーナは気がついた。

首を巡らして男の顔を見る。

濃い茶色の髪と、整った顔。オルサー次期子爵、ウィードだ。

女受けする甘いマスクの持ち主だが、隠しきれない好色で下品な雰囲気全てを台無しにしている。

今も、他の男子生徒たちに自分とレナスの親しさを見せつけようとしているのが明らかだ。

その親しさも完全にウィードの思い込みによるものだけで、うぬぼれが強く傲慢な彼などレナスの眼中にないのだが。

完全に黙り込んだ二人をよそに、そのままウィードはベラベラと話し続け、ついにそれは音楽室に到着するまで続けられたのだった。

6、指輪の行方

「やあ、来たね。レナス……とニーナ？」

ドアの開く音に振り返ったアキが、柔らかな微笑を浮かべたまま首を傾げる。

アキは音楽教授なのだから、ここに居るのが当然と言えば当然なのだが……心の準備をしていなかったニーナは、レナスと二人で居る時に彼と顔を合わせたことで少なからず動揺していた。

しかし傍目には相変わらず無表情のままなので、外から見てそれに気付ける人間は居なかっただろう。

「アキ教授、ニーナが見学しても構いませんでしょうか？」

レナスがおねだりする子供のように、甘えた口調でアキを見上げた。

その可憐さと、純真無垢なようで色気も含んだ表情には教授と言えど逆らえない。

「許しましょう」

だがレナスを見下ろしてニッコリ笑ったアキの笑顔も、直視した女を卒倒させるぐらいの威力を含めていた。

顔を輝かせうっとりとしてアキを見つめ、胸元で手を握りしめるレナスは完全に恋する少女だった。

一見、美貌のバカップルにしか見えない二人。しかしアキの腹黒さを知っている分、ニーナは複雑な気分だった。

レナスにアキとのがバレたら……という思いがますます強くなる。

思わず身震いした。

「では練習を始めましょう」

アキの声に、出演者たちはバラバラと自分の持ち場へと動く。

レナスの信奉者たちは教室の片隅に集まり、ニーナはその反対側の隅に収まった。

壁に寄りかかり、祭の練習を見つめる。

娼婦は客に唄や踊りを披露することも仕事のうちだ。

ウィッチグラスのような高級娼館であれば、娼婦たちに求められる芸事げいごとのレベルも高い。

幼い頃から一流の技術を見て育って来たニーナは、芸術に対して鋭い感性を持っていた。

花祭りの舞台の善し悪しは、音楽教授による演出と構成にかかっている。

見たところアキのセンスは悪くない。今年は群舞とコーラスによる構成にしたようだ。

唄い手たちの中で一生懸命に歌っているレナスも、初々しさが微笑ましい。

「どうだ？ 舞台の出来は」

いつの間にかニーナの隣に来たアキが、出演者たちを見つめながら口を動かさずに呟いた。

「今回はソリストが居ないんだ？」

「ソロをやるだけの実力者が居なくてな」

「群舞とコーラスだけにするほうが難しいじゃないの。全体の調和を保たなきゃいけないから」

一瞬だけ、ニーナとアキの視線がぶつかった。お互いに相手の芸術的センスの高さに思わず感心してしまったせいだ。

「……襲撃事件のことは知ってるか？」

即座に舞台の方へと向き直ったアキが尋ねる。

「ついさつき、レナスから聞いたところ」

アキが頷いた。

「犯人は指輪を盗み出した悪魔だ」

「その根拠は」

「あの指輪は、身につけた者の力を増大させる。俺は巨大な魔力の固まりを追って人間界へと来た。」

それが、この学園まで来たときに気配が消えた。つまり悪魔の身

から指輪が離れたことを意味している。

そこから考えられることは、奴が指輪を隠したか紛失したか……だ」

そこまで言っただけでアキは話を中断すると、踊り手たちを指導するために離れて行った。

アキは踊り手の一人一人に対して細かい指導をした後、しばらくの間、群舞のみの練習をすることに決めたようだ。

唄い手たちはアキのお呼びがかかるまで、思い思いの休憩に入る。レナスがニーナの下へと駆け寄って来た。

「どうだった？ ニーナ」

「良かったよ。唄が上手くなったねえ、レナス」

お世辞拔きのニーナの賛美に、嬉しそうに微笑んだレナスが「ところで……」と続ける。

「アキ教授と何をお話していたの？」

「……ああ、舞台の構成が素晴らしいですねって」
アキとニーナは顔を合わさないようにして、口も動かさないようにして会話をしていた。

にも関わらず、離れた舞台にいたはずのレナスがそれに気づくとは……これが恋する女の直感、というやつだろうか。

だがニーナの返事は嘘ではない。確かにアキと舞台の構成について会話を交わした。

嘘ではないが全てではない。こういう言葉は罪悪感なく話せる上に具体性があるので、相手にとって強い信憑性を持つ。

案の定レナスも、何の疑いも持たなかったようだ。

こんなテクニクを無意識のうちに駆使するニーナのことを、娼婦たちは「男に生まれていれば凄腕のジゴロになっただろう」と囁き合っている。

「……ねえ、今年もニーナには参加要請がなかったの？」

レナスの肩ごしに彼女の信奉者たちの嫉妬の視線と対峙していたニーナだったが、何か不穏な気配の込められたレナスの声に、視線

を戻す。

「来るわけないでしょーが。」

毎年、唄い手や踊り手に選ばれるのは、音楽の授業をとってるか音楽クラブに所属してる生徒だけなんだから。

それに私が舞台に立つなんて快く思わない人間が多いからね。生徒も教授も」

「くだらないわ、そんな偏見」

吐き捨てるように言うレナス。

去年は憤慨し「教授棟に乗り込んで抗議するわ！」と激昂したもののだが。多少は感情を抑えることが出来るようになったらしい。

「教授陣に一服盛ってやろつかしら」

だが行き着く結論は去年から全く変わってない。むしろ凶悪になっている。

ニーナはため息をつきながらも、レナスが自分のことを心底思ってくれているのが分かって、少し嬉しくも感じていた。

「いいんだってば、レナス。私はあんたの晴れ姿が見られれば、それで十分。」

ほら、練習始まるみたいよ」

レナスが驚いて振り向くと、アキの指示で再び全体練習が始めるれようとしていた。

「あ、じゃあ、ニーナ。また後でね」

片手をあげて挨拶したレナスに、はいはいと笑って自分も片手を上げようとしたニーナは、彼女の指にあるものを見つけて眉を潜めた。

白くほっそりとした指にはめられていたのは、細い金の指輪。

踊り手、唄い手、魔法の使い手。花祭りの運営に関わる人間全員に配られる、魔力の制御装置。

「……盗まれた指輪っていうのは、どんなデザインなわけ？」

再び隣に戻って来たアキに問いかける。

アキは「ほう」と呟いて片眉を上げた。その表情から、何だか知

らないがアキが自分のことを見直したのが分かる。

「いたってシンプルな金の指輪だ」

「あの制御装置に似てるんでしょ」

ニーナの言葉に、間違いなくアキはニヤリと笑った。

「よく気づいたな」

「笑ってる場合じゃないでしょうが。私の推測を話すから、アキの思ってることと違ってたら教えて。」

……恐らく、アキに追われた悪魔はこの学園に逃げ込んだ。追っ手がすぐ後ろに迫って来ている。どうすれば良いか。

そこで悪魔は見つけたのよね、制御装置の入った箱を。

似たような指輪がたくさん入っている、その中に、盗んだ指輪を紛れ込ませた」

横目でアキを見上げたが、彼は相変わらず微笑みを口元に浮かべたまま舞台を見つめている。

そんな彼に構わず説明を続けた。

「悪魔はこの学園に潜んで、追っ手が諦めるまで気長に待つつもりだった。」

ところが春の花祭りのために生徒に制御装置が貸し出されたものだから、隠した指輪を見失ってしまった。

指輪はそれを身につけた者の魔力を増幅させる。パニックに陥った悪魔は、魔力の高い生徒を次々に襲っては荷物を奪って指輪の行方を探した」

相変わらず舞台を見つめたまま、アキが頷いて口を開いた。

「花祭りの練習期間中、制御装置は音楽教授と、花魔法の教授、風魔法の教授によって生徒に受け渡される。」

俺が管理する分は練習開始と共に生徒に配り、練習終了とともに回収しているが、他の二人の教授は祭りが終わるまで生徒に預けっぱなしらしい。

……ちよっと管理がずさんすぎないか？ それほど安いものでも無いっていうのに」

ブツブツと独り言のように呟くアキの、苛立ちが伝わってくる。

「じゃあ、花魔法か風魔法の使い手が指輪を持つてること？」

もしアキの管理しているものの中に問題の指輪があったなら、とつくに見つかっているはずだ。

「その通りだ。盗んだ奴もバカじゃない。今頃はそのことに気づいているだろう」

アキが首を曲げて、ニーナの目を真つ正面から見つめた。

「この後の予定を空けておけ。奴よりも先に指輪を見つけるぞ」

7、風魔法の練習

そつと音楽室を抜け出したニーナは、校庭へと足を向けた。

風魔法の練習がそこで行われているとアキに聞き、一足先に偵察に行こうと思ったからだ。

「あそこか」

広大な校庭に目をこらしていたニーナは、鶏舎の近くに居る集団に目を止めた。

彼らの頭上では、何やら細かいものが宙を舞っているのが見える。そちらの方へと歩み寄って行くと、舞っていたものは紙切れや木の葉、鳥の羽だというのが分かった。

「いいかー舞い上げる高さは六メートルまでだー。そして螺旋を描きながら落とすことー。そこ、落下スピードが早い！」

集団の中心では、ダレル教授が声を張り上げていた。

「次、フォーメーションA！」

教授のかけ声とともに、五人の生徒を残して他の生徒は片膝をつく。

完璧主義のダレル教授らしいな、とニーナは舌を巻いた。

花祭りで最も観客の視線を集めるのは、やはりレナスたちによる唄と踊りの舞台だ。

しかし、たとえ脇役と言われる仕事であろうとも手を抜かず、風魔法にも様々なフォーメーションを考え徹底的に練習する。

ダレル教授のプロ意識は大したものだ。

宙に集められた木の葉たちが、まるで生き物のような動きをするのを感じしながら眺めるニーナ。

彼女の存在に気づいた生徒の何人かが、顔をしかめる。

ダレル教授もチラリ、とニーナを見たものの全くの無関心だった。

「娼婦が何の用だ」

男子生徒の一人がニーナを嘲る。

数人の生徒がそれにつられたように、下卑た笑い声を上げた。

「男漁りにでも来たのか？」

「お前の器量じゃあ相手をしてくれる男なんて居ないだろうがな」

「高望みはやめて、庶民クラスの下男共でも誘惑してるんだな」

腕を組み、木に寄りかかったニーナは涼しい顔で男子生徒たちを見返した。

「こんな中傷には慣れっこになっている。

「そこ。練習に集中しろ」

ダレル教授の声に、男子生徒たちは「お前のせいで怒られた」と言わんばかりにニーナを睨みつけると、魔法に集中した。

一糸乱れぬ生徒たちの動きを見つめながら、ニーナは誰が問題の指輪を持っているのだろうと考える。

人間の魔力の大きさを感知する能力も、自身の魔力の大きさに比べる。

つまり、ほとんど魔力の無いニーナが他人の魔力を見極めることは難しいのだ。

では何のために来たのかと言うと、ただ単に様子のおかしい生徒が居ないか見に来ただけである。

木陰から練習を眺めて、四半刻もたつただろうか。

ニーナは気になる女生徒を見つけていた。

彼女は時折チラチラとこちらへ視線を送って来ていた。その顔色の青白さと、どこか敵意の込められた目つきが気になったのだ。

制服のエンブレムから貴族クラスの子と分かったが、面識は無い。

にも関わらず敵意を持たれるとは……どうということだろう。

「ニーナ、ここに居たの」

顎に指をかけて考え込んでいたニーナは、横手からかかった声に思考を中断された。

首を巡らせてみれば、レナスが近づいてくる場所だった。

相変わらず男子生徒たちを従えて、隣にはなぜかアキも居る。

「レナス。練習が終わったんだ」

「そう。あなただったら途中でどこかへ行っちゃうんだもの」

レナスは少し不満そうに唇を尖らせた。

「ごめん。風魔法も見てみたくてさ」

「ええ。アキ教授に聞いて、私も見学しようと思って。教授もダレル教授にお話しがあるそうだから」

一瞬だけアキとニーナの視線が絡まり、お互いの思惑を確認し合う。

ニーナ、レナス、アキの三人は横一列に並び、レナスの信奉者たちはその後方に控えて立った。

「これはどういう練習なんだい？」

生徒たちの練習風景を見ながらアキが、誰にもなく質問を口にした。

「本番の花祭りで、花びらを綺麗に舞わせるための練習なんです。

今は羽毛や木の葉を使ってますが、本番が近くなれば花魔法の使い手たちと合同練習をすることになってます」

レナスが答える。

「ただ舞い上げて落とすだけじゃダメなのかい？」

「ええ。見ていただくと分かると思うんですけど、舞い上げる高さ、落下スピード、回転数、落ちる位置などを全員で揃えるんです。その方が綺麗ですし後片付けも簡単ですから。……ダレル教授は特に完成度の高い舞台が好きですし」

ふふ、と面白そうに言うレナスに「なるほど」と頷くアキ。

二人のやり取りを無言で聞きながらニーナは、先ほどの少女を見つめていた。

レナスとアキが現れてから、明らかに少女がこちらを見る回数と敵意が増している。

横目で伺つてみると、アキもそれに気づいているようだった。

今は他人の目が多くて無理だけれど、後でアキと話合ってみよう……と思いつながら練習風景に目を戻す。

「違う、そうじゃない！ 花びらを跳ねさせるリズムはこうだ！」
順調に見えた風魔法の練習風景だったが、つい先ほどダレル教授
がアレンジした魔法を生徒が上手く使えずに戸惑っているようだ。

教授が指揮者のように両腕を動かすと、木の葉が複雑なリズムを
刻みながら見事に踊る。

「難しいなーこれは……」

魔法の制御力のみならず、リズム感まで必要とされる技を見て二
ーナが思わず呟いた。

制御装置の力があるので魔法に集中する必要は普段より少ないと
は言え、かなりの精神力が必要になる。

「そう？」

隣でレナスがしゃがみこみ、足元に生えていた花の花びらを摘み
取った。

それを風魔法で宙に浮かべると、先ほどダレル教授が見せた複雑
な動きを見事に再現してみせる。

制御装置も使わず、指先をひよいひよいと動かすだけで簡単に難
度の高い技を見せるレナスに、二ーナは呆れた視線を送った。

「……普通、自分の系統外の魔法は上手く使えない、って言われて
るけど。レナスは何の魔法でも使えるんだね」

「そんなことないわよ。やっぱり風魔法は水魔法ほど使えないもの」
これだけできて何を言う。

花びらを宙に浮かべるだけでも、他人の倍の時間を要する二ーナ
は思わず溜め息をついた。

ダレル教授の方も、生徒が四苦八苦している様子を見て、結局魔
法の難度を下げることにしたようだ。

先ほどよりも花びらの動きが大きくなり、リズムも簡単になった。

「レナス、風が出てきた」

ウィードが自分のマントを脱ぎ、レナスの肩にかける。

「……ありがとう」

風魔法を使っているのだから、風が出てきたと言うのも妙な言葉

だと思ったが。

恩に着せるような押し付けがましい親切を、それでもレナスは無^む碍^げに断りはしなかった。

ただしその表情と口調は、ひどくそっけない。

おざなりの感謝の言葉とは言え、言われた方のウィードは得意満面で他の信奉者たちを見渡す。

「練習も終わったようだし、この後どこかに出かけないか？」

自惚れと傲慢さが増長されたウィードの言葉に目を戻すと、確かに練習が終わったらしく、生徒たちがばらばらと校舎に向かって歩き出していた。

「無理よ、ウィード。今日は父様と約束があるの。そういうわけでニーナ、一足先に帰らないといけないんだけど。ごめんなさいね。」

アキ教授もごきげんよう

「気にしないで。またね」

「また明日」

アキとニーナに会釈したレナスは、信奉者たちの顔も見ずにさっさと歩き出した。

慌ててその後を追うウィードは、まだ何かをしつこく話しかけているようだ。

そして無言でぞろぞろとくっついていく男子生徒の様子は、まるでゾンビのようだと思わず笑った時だった。

突然アキが背後からニーナの身体を抱き寄せた。

その荒々しさに目を丸くし、声を上げようとしたニーナだったが、急に足元からすさまじい勢いの風が巻き上がった。

耳元でうなる風の音。舞い上がる塵が目に入り、痛みにも目を細めると、もう風圧がすごくて元通りに開くことが出来ない。

アキが片腕でニーナの身体を抱えたまま、反対側の腕をゆっくりと持ち上げた。

涙目になりながら必死でそちらを見たニーナは、自分を取り巻いていた空気の塊がその腕先から一人の少女へと向かって飛んでいく

のを目撃した。

意思を持った空気の塊に包み込まれ、直後、少女の身体は意識を失って崩れ落ちる。

思わず小さく悲鳴を上げたニーナの頭上から、「死んじやいない」というアキの落ち着き払った声が振ってきた。

ホツと力を抜き、自分がアキに抱きかかえられていることに気がついて慌てて周囲を見回す。

だがすでに、校庭には自分とアキと気絶した少女以外の人影は消えていた。

「あの女。レナスを襲おうとした」

顎をしゃくって少女を示したアキを、ニーナが怪訝な表情で見上げる。

「レナスを……襲う？」

「簡単に言うと、風魔法でかまいたちを発生させてレナスの背後からぶつけようとしたんだ。あの女、指輪を持っている」

ギョツと振り返り、信じられないという目で未だ気絶したままの少女を見つめる。

その時、あることに気づいた。

「……いつまで抱きかかえてるのよ」

「抱き心地いいな、お前」

ニーナの拳がアキの鳩尾に叩き込まれた。

8、リリアナ

ゆらめくランプの光が、壁に影を映し出す。

一組の男女が向かい合って立っており、男の手は女の腰にしつかりと回されている。

じっと見つめあっていた二人は、やがてゆっくりと唇を重ね合わせた。

唇を離しては、角度を変えて重ね合わせる。

徐々に熱を帯び激しくなる接吻は、やがて行き交う舌のシルエツトまでくつきりと壁に映し出されるほどになり――

「もういいって」

ニーナがランプの火を吹き消すと、男女の影は跡形もなく消えた。「意外と初心つひなんだな」

からかってくるアキを睨みつけると、床に横たわった少女を見下ろした。

レナスを襲おうとした貴族クラスの少女。練習中に敵意のこもった目でこちらを見ていた、例の少女だ。

ハンカチの刺繍を見ると、リリアナと言つ名前らしかった。

あの後、気絶したリリアナはアキとニーナによって図書室へと運び込まれた。

場所も近く、人気ひとけの無い図書室は絶好の場所だったのだ。

彼女の指から指輪を抜き取ったアキは、間違いなくそれが盗まれた宝物であることを確認した。

「これが『根源の指輪』だ」

アキの手に乗せられたそれは、本当に制御装置に良く似たシンプルな指輪だった。

違いと言えば、微かな玉虫色の光を帯びていることと、光の当たり具合によって薄い刻印が浮かび上がることだが、よほど気をつけ

て見なければ分からない。

「さて。指輪も取り返したことだし、帰るか」

「え」

立ち上がって伸びをしたアキの言葉に驚くニーナ。

「でも……レナスを襲った理由とか……」

「俺に何の関係がある？」

不思議そうな顔で聞き返してくるアキに、ぐっと言葉に詰まった。確かに関係ないけど……知りたいじゃん。レナスは友達なんだし……」

「別に」

取り付く島もない言葉に、グウの音も出ないニーナは不満そうに膨れていたが

「……うちの店のタダ券あげるから」

と、餌をまいてみることにした。

「いいだろう」

即答かよ、と心の中で突っ込む。

「尋問なんかは面倒だからな。勝手に記憶を見させてもらう」

アキが右手を振ると、どこからともなく小型のランプが現れた。掌にすっぽりと収まってしまいそうな、本当に小さなランプだった。

「それは？」

「人間の記憶を映し出すランプだ」

そう言つとアキはリリアナの額に指を当て、ゆっくりと持ち上げた。

目の前の光景に言葉を失うニーナ。

リリアナの額から、黒い霧状の帯が立ち上っていた。その端はアキの指先に絡みついている。

アキが霧を指で巻き取りながら引き抜いていくと、リリアナの表情が苦悶するようなものになった。

「だ、大丈夫なの？」

「ちょっと痛いだけだ。それより、店ではお前を指名するからな。相手しろよ」

「はあっ?!」

思わず声を上げるニーナ。

「ちよ、ま、わ……私は娼婦じゃっ……」

「分かってる。そろそろお前に魔力を分けておかなければならない」その言葉に口を閉じるニーナ。

なんだ、そのためか……と脱力。余計な気を回して勝手に焦って、馬鹿みたい。

「……レンに見つかるとうるさいから、明け方にこっそり来てくれる?」

小さな声でニーナが呟くと、「ブツ」とアキが吹き出した。顔を上げると、肩を震わせて笑っている。

「お前、ときどき子供っぽいよな」

カアツと顔に血が上る。

「なっ……」

「ほら、取れた」

アキは巻き取った霧をランプに入れると、火をつけた。

壁にシルエットが映し出され、ニーナはしぶしぶ口を閉じる。

もつとも、子ども扱いされたことに文句を言おうとしただけで、そんなことをすれば益々自分を幼く見せてしまうだけだと考え直した。

どういう仕組みなのか分からないが、リリアナから取り出された記憶は時に鮮明な映像となり、時にシルエットとなり図書館の壁に映し出された。

校舎の廊下を歩くりリアナの姿を見ながら、床に横たわったままの彼女に目をやる。

相変わらず苦悶の表情を浮かべたままピクリとも動かない。

「いつ目が覚めるの? 彼女」

「あと二時間ぐらいだろう」

何となく安心して壁に視線を戻した。

記憶の中のリリアナは、見た目の通り内向的で地味な少女であつたらしい。

学園でも一人で過ごすことが多かったようだ。

やがて、そんな彼女が恋をした。

相手はあのレナスの信奉者ウイード。

彼から声をかけられ最初は戸惑っていたリリアナだったが、毎日のように優しく言葉をかけられるうちに惹かれていったのだろう。

壁に映し出された彼女の表情は、どんどん明るく幸せそうなものになつていった。

そして二人の関係は深いものへと変わる。

ニーナがランプの火を消したのは、その時だった。

「かわいそうに」

リリアナを見下ろして呟く。

もはや続きを見る必要は無かつた。

あれほど幸せそうだったリリアナの顔は、今は青白く、その時の面影は無い。

レナスに向かつて魔法を放つたのは、嫉妬と恨みの感情が『根源の指輪』の力で魔法として発動してしまつたのに他ならない。

彼女はウイードに捨てられたのだ。

ニーナはウイードの人間性も手管も知っていた。彼にとっては、いつもの火遊びだったに違いない。

もしかすると仲間内で、リリアナを落とせるか否かで賭けをしていた可能性もある。

貴族の貞操観念はかなり低い。結婚してしまえば男も女も、それぞれ愛人を作ったり夜会で一夜限りの相手を見つけることなど日常茶飯事だ。

いや、結婚前の男女であっても自由気ままに恋愛を楽しんでいる。ただし表向きは、貴族の子女が異性と婚前交渉を持つことは好ましくないとされているため、おおっぴらに付き合うような剛の者

は居ないだけで、秘密の関係を楽しんでいる者は多いのだ。

しかしリリアナは本気でウィードに恋をしてしまい、遊びと割り切れることも出来ず、一人で悶々と悩み苦しんでいた。

その嫉妬はレナスに向かい、レナスと親しいニーナに対してまでも敵意を向けるほどだった。

自分を捨て、ひどい目に合わせた男へは恨みの感情を向けなかったところが憐れだ。

ニーナは溜め息をついた。

「愚かだな」

淡々と言ったアキに、ニーナは悲しそうな瞳を向けて頷いた。

「愚かよ」

「それで、どうするんだ？」

「リリアナのことは、こっちに任せて。指輪さえなければレナスを襲うこともないだろうし。アキはどうする？」

「窃盗犯を捕まえる」

「どうやって？」

指輪をもてあそびながら考え込んでいたアキは、しばらくして口を開いた。

「……まだ漠然とした計画しかないんでな。今日の夜までには詳細を決めて話そう」

そうだ、今夜アキが来るんだったと気づかされたニーナは、急いで策を巡らせた。

「アキ、今夜のことなんだけど」

ニーナの言葉にアキが片眉を上げてこちらを見た。

「出来れば店の誰にも見られずに来て欲しいの。入り口から来ると絶対にレンにバレるから。もしレンが居なくても、誰か姉さんに見られたらそこからバレるわ。だから、営業時間が終わって姉さんたちとレンが店から引き上げてから来て欲しいんだけど」

アキは頷いた。

「店の北側の最上階に、普段は使われていない部屋があるからそこ

に……時間は……」

アキに説明をしながらニーナの胸には不安が強く渦巻いていた。

これがバレた時のレンの反応は……想像するのも恐ろしい。

どうか上手く行きますように、とニーナは神に祈った。

9、契約

雲が多く、星さえも見えない夜空に「座つて」いる男が居た。

男は頭から漆黒のマントをかぶっていたため、その姿は周囲に溶け込んでいる。

マントの隙間から飛び出た銀色の髪。眼鏡をかけた端整な顔立ち。その視線の先には四階建ての建物があった。

ところどころ明かりの漏れている窓がある。こんな夜更けに明かりのついている建物など、周囲には他に存在しない。

その明かりが一つ、また一つと消えていき、ついに建物全体が暗闇の中に包まれると、男はため息をつき組んでいた足を伸ばした。

ゆっくりと階段を下りるように、夜空を歩いて下りていく。

目指すのは建物の最上階、北の端の部屋。

音がしないように静かに窓を開けたアキは、部屋の中へと降り立った。

打ち合せどおり鍵を開けておいてくれたらしい。

たとえ鍵がかかっていたいようと何の障害にもならなかっただろうし、そもそも彼ほどの実力者であれば誰にも見られずに侵入することなど赤子の手を捻るようなものだった。

それが人間の少女の立てた計画に従い、わざわざ回りくどい行動をするなどは。

弟が聞いたら目を剥くに違いない、とクスリと笑った。

しかし、と口を引き結ぶ。

ニーナの兄代わりというレンは、一目でアキを悪魔だと見破った。人間界に居る以上、アキは自分の気配を極限まで消して行動している。それこそ、たとえ中級悪魔や善魔が相手であっても、おいそれとは見破れないほどだ。

それを見破った人間。しかもレンの気配を読もうとした魔法は、

何かにかき消された。

彼も闇世界の住人か？ いや、それならば自分に分らないはずがない。

アキの頭にある考えがよぎった。

かつて人間界で一度だけ出会ったことのある種族……いや、まさか。あの一族がこんなところに居るわけがない。

「馬鹿な」

小さく呟くと、首を振ってありえない考えを頭の中から振り払った。

いずれにせよレンという男は油断がならない。用心に越したことは無いだろう。

そこまで考えたアキは、寝台の方から軽い寝息が聞こえてくるのに気がついた。

マントを脱ぎ捨て、そちらへと近づぐ。

普段は使われていない部屋と言っていたが、内装は普通に娼婦たちが商売をしている部屋と変わりない。

部屋の中央に置かれた寝台の周りにはレースのカーテンがかかっていた。

近くの台に燭台があったが、すでにロウソクは燃え尽きている。

蜀台に手をかざし、アキが指先をこすり合わせると、炎をたたえた真新しいロウソクが現れた。

それを手にカーテンを開ける。

「……なぜ寝ている」

寝台の上には、布団に身体ごとしがみついて寝ているニーナがいた。

すやすやと幸せそうな顔で穏やかな寝息をたてている。

この緊張感の無さは何なのかと、思わず眉間に指をあてて考え込んでしまった。

あれほどレンに見つかるのを恐れビクビクしていたというのに。

いや、それだけではない。

飯にも男が夜更けに忍んで来るといえば、不安と緊張で身を硬くして待っているものではないか。

「そのつもりは無かったが、思わず襲ってやりたくなるな」

この身体の中に湧き上がる苛立ちをぶつけてやりたくなった。

なぜ苛立ちを感じるのか。自分でも明確な理由は分からないが、闇世界でも人間界においても、自分の神経をこれほど逆撫でする存在はこれまで居なかった。

目を細めてニーナを見下ろし、「フン」と息をつく。

その気配を察したのか、ニーナの眉間に皺が寄せられた。

「おい、起きろ」

「うう……」

目をギョツと瞑ったまま、しばらく顔を布団に押し付けたりモゾモゾ動いていたニーナだったが。

ようやく薄目を開けた。その表情は「迷惑この上ない」と如実に語っている。

どうにか寝台の上に取り上がったものの、その頭は左右に揺れていた。

「アキ……?」

「起きろ」

「みいー!」

アキに頬を引っ張り上げられたニーナが、猫のような悲鳴を上げた。

なんなんだコイツは……。

「なぜ寝ている。羊皮紙一枚分の文字量で簡潔に説明しろ」

「……やたら注文が細かいね」

頬をさすりながら、半眼のままニーナが睨みつけた。

「えっと、寝起きが悪いんだよね、私」

「それは今ので分かった」

「やっぱり? だからアキの来る時間に起きるなんて絶対に無理だと思って、仕事が終わってからずっとここに居ることにしたの。い

つの間にか寝ちゃったみたいね」

肩をすくめて言うニーナの顔は、すでに普段の落ち着き払ったものに帰っていた。

悪びれている様子も無い。

アキのこめかみに再び青筋が浮かんだ。

「なるほど……よく分かった。服を脱げ」

「は？ ……ぎゃあ！」

呆気にとられた一瞬の隙について、アキはニーナの身体をうつぶせに組み敷いた。

「く、苦し……ちょ、ちよつとお?!」

腰で結ばれたエプロンのリボンが解かれ、焦りでジタバタと手足を動かすニーナ。

「動くな。魔力を注入するだけだ。指先から腐って崩れ落ちたいか」
その言葉にピタリとニーナの動きが止まる。

抵抗しても力技ではかなわないと悟ったのか、ふてくされた様子で呟いた。

「服、脱がす必要ないじゃん」

「やかましい。大人しくしてろ」

返事をするアキの瞳は、動揺で左右に揺れ動いていた。

(なぜだ……契約の証あかしが無い)

うるたえ、指先を背骨に沿って滑らせる。

その感覚にニーナの身体がピクリと動き肌が粟立ったが、もはやそれに気づく余裕はなくなっていた。

アキと契約を交わした者は、その証が刻印として肌に現れる。

通常であればそれは、目立たない腰骨の上に浮かび上がっているはずだった。

証が無いということは、アキとニーナの契約が成立していないか、一旦成立した契約が解除されたことを意味している。

(契約が成立しなかった? いや、俺は確かに血を分け与えたはずだ。では解除された? まさか。この俺の契約を解除できるものな

ど存在しない)

ならば・・・と、今までとは違った目でニーナを見下ろす。

この娘の肉体が、魔法の効かない性質と言うことか……。

非常に稀だが、そういう存在が居ることは文献で知っていた。

歴史上でも三人ほどしか確認されておらず、なぜそうした性質を持つているのかは不明だが、確かに存在するのだ。

そうだとすればニーナの魔力が低いのも納得できる。魔法の効かない性質の人間が、自ら魔法を駆使することなどできるわけがないのだ。

自身の放つ魔法でさえ、その魔力を身体の外へと放出しようとした瞬間に、その肉体の性質ゆえ打ち消されてしまうのだから。

「……アキ？」

剥き出しになったニーナの背中を見下ろしたまま考え込んでしまったアキに、さすがに不安になったのだろう。

首を巡らせた少女に小声で問いかけられ、アキは我に返った。

どうやらニーナ自身は、契約が無効になったことに気づいていないようだ。

気づいていれば、今こうして大人しく押さえ込まれてはいないだろう。

ならば、わざわざそれを教えてせっかくの手駒を手放すことは無い。

それに……。

見下ろすと、訝^{いぶ}しげな表情を浮かべた瞳と目が合った。

魔法の効かない、非常に珍しい存在。使いようによっては強力な武器になるのではないか。

特に闇世界に存在する、自分の敵対勢力に対しては。

ニヤリと唇の端を吊り上げたアキの顔に、思わずニーナが身構える。

「心配するな。これから魔力を注入する。……首の筋を違えるぞ。前を向いてろ」

不安そうな表情を浮かべたまま大人しくニーナが前に向き直ると、アキの顔がゆつくりと腰に向かって降りていく。

「……っ！」

肌を吸い上げられる感覚に、思わず腕をつき上半身を起こすニーナ。

アキがゆつくりと顔をあげると、腰骨の上には朱色の内出血の跡ができていた。

ニーナは動機の早くなった胸元を押さえつつ（これっていわゆるキスマーク？）と混乱する頭で考えていた。

そして、その跡を冷たい目つきで見つめるアキの胸の中には、思わぬ切り札が自分の手駒になったことへの満足感と――自分の魔力を打ち消されたことにより、傷つけられたプライドの痛みと怒りが渦巻いていた。

「春にしては寒いね。今夜は」

衣服を整えたニーナが、手早く紅茶の用意をしながら言った。

寝台の上には、シャツの襟元を緩めてリラックスした様子のアキが横たわっている。

仕事を終えてこの部屋へやって来た時、ニーナはあらかじめ紅茶の道具を用意しておいたのだ。

茶葉が開くのを待つ間に、アキが窓際に脱ぎ捨てたマントを回収して畳み直す。

その様子は娼婦というよりも、甲斐甲斐しい小間使いという形容詞がぴったりだ。

「……ブランドーか」

手渡されたティーカップから立ち上る芳香に、アキが呟いた。

「そう。客の分には垂らすのがうちの慣習」

濃い目が好きなニーナは、じつとティーポットを見つめながら紅茶が十分に煮出されるのを待った。

「どうせならワインにしてくれた方が嬉しかったんだがな」

「私、ワイン飲めないもの」

紅茶を一口飲んで、細く息を吐き出したニーナがカップの縁ごとにアキに目をやった。

「考えたんだけど。窃盗犯を見つける必要があるの？ 指輪はもう取り返したし、アキが指輪を奪還したぞーって発表すれば……相手も諦めて闇世界に帰るんじゃないかな」

「そう単純な話なら良いんだが」

紅茶を飲み干したアキがお代わり、とカップをニーナに差し出す。実はまだ、窃盗犯の正体をつかんでいない。おおよその見当はついているんだがな。問題は奴が自分の意思で指輪を盗んだのか、誰かに命じられてだったのか……それ次第で今後の対応が変わってくる

る。それに……」

両手でカップを受け取ったニーナが、小首をかしげる。

「それに？」

「俺のものを盗む奴を、生かしておくわけにはいかない」

紅茶を注ぎブランデーを垂らしていたニーナの動きが、一瞬だけ止まる。

「この俺にたてつくとうどうなるか……身を持って教えてやる」

「……巻き込まれた方は迷惑なんですけど」

「諦める」

ニーナがジト目で睨みつけても、アキはどこ吹く風と言った顔だ。

「窃盗犯は、まだ学園に潜んでいると見て間違いない。こちらが指輪を取り戻したことを知らず、未だに生徒たちを狙っているんだろう。だから俺は罠を使って奴をおびき出す」

「罠？」

「ああ。すでに学園長に暗示をかけてきた」

思わずニーナはまじまじとアキを見つめてしまった。

学園長は王宮つき魔術師の中でも十本の指に入る実力者で、特に守護魔法に関しては抜けていたはずだ。

それを、いとも簡単に暗示をかけてきたとは……もしかするとアキは、想像以上に強い魔力の持ち主なのかもしれない。

その問題の悪魔はニーナの視線にも気づかず、もはやブランデーを直接カップに注いで飲んでいた。

「明日、点検という名目で生徒の制御装置を回収し、そのまま花祭りの日まで学園長の金庫に保管させる。あの金庫にかかっている守護魔法は、彼が長年研究して作り上げたものだからな。この俺でも手こずるだろう。さすがは守護魔法の第一人者だ」

「制御装置なしで、練習はどうするの？」

「これを使う」

差し出された左手には、クルミほどの大きさのブローチが乗せられていた。

深い紫色の石の中で、白い星のような点が自由に動き回っている。「あ、先代の制御装置だ」

それは五年前まで、学園で使用されていた制御装置だった。原料の鉱石が希少で高価なものであったため、教授のみ、それも祭事にだけ使用を許されていた。

よって以前の花祭りでは制御装置なしに高度な魔法を駆使しなければならず、少数の優秀な生徒でなければ運営委員に選ばれなかったのである。

だが名工タドウルタスが安価な指輪型の制御装置を開発したことから、より多くの生徒が参加することができるようになり、その魔法は祭をより華やかにした。

しかし、以前に比べて安価になったとはいえ、やはり制御装置は高価な代物である。

現在の指輪型制御装置も、生徒に貸し出されるのは祭りの時だけと決まっている。

「花祭りの前日まで、生徒たちにはこの制御装置を使って練習してもらおう」

話を聞きながらニーナは、うーんと腕を組んで考え込んだ。

さぞ窃盗犯は焦ることだろう。

ようやく、風魔法と花魔法の使い手が指輪を持っているところまで突き止めたというのに。

突然それが目の前から奪い去られ、手の出せない場所に保管されてしまうのだ。

追われている状況の中に居るとなれば、その心の動揺は計り知れない。

「暴走しないでしょね？ 窃盗犯……」

追い詰められた悪魔の忍耐力がどれだけ持つのか。

逆上して学園中に攻撃魔法の雨を降らされたら、たまったもんじやない。

ゾツとしたニーナが、両手で頬を押さえながら呟いた。

「恐らく、それは無い」

だがアキはあっさりと否定する。

「窃盗犯の正体が俺の予想と当たっていればな。お前と一緒に、平静さを装おうとするタイプだ」

ニヤリと笑うその顔は、己の予想に誤りが無いことを確信しているものだった。

「それでも、祭の当日まで手を出せないのは奴にとって痛手だ。散々ジリジリと待たされた分、指輪のありかを知った時は夢中で飛び出してくるだろう。畏かどうかを考える余裕もなく……な」

その言葉にニーナが顔を上げる。

「さっき囮って言ってたよね」

「ああ」

アキが頷いた。

「レナスに指輪をはめさせる」

「そつ……！」

ニーナが立ち上がった弾みで、椅子が後ろに倒れて派手な音を立てる。

アキに喰ってかかろうと口を開くのだが、入り乱れる思考のせいで、どう言葉を紡いでいいのやら分からない。

力なく口を開けたまま、視線だけが泳いでいた。

その様子を見無表情で眺めていたアキが、静かに呟いた。

「レナスを信じろ」

ピタリとニーナの動きが止まり、その視線がアキの顔に注がれる。

彼女の黒い瞳は驚きに見開かれていた。

「信じる……？」

「ああ」

アキの金色の瞳は、その視線を真っ向から受け止めて頷いた。

「レナスは強い。指輪の力が無くても、下級悪魔なんか簡単に捻り潰せる。あいつが指輪をはめれば、急激に魔力が増幅されるだろう。その波動を感じて窃盗犯はレナスの前に姿を現わずに違いない。だ

が指輪の力が加わったレナスの魔力には、上級悪魔ですら……かなわないかもしれんな」

「いくら魔力が強力だからって、実戦経験は無いのよ！」
青ざめたニーナがアキに詰め寄った。

その顔は、今にも泣き出しそうに歪んでいた。

「レナスには俺がついている。問題ない」

「でも……」

俯いたニーナの弱気な姿は、学園では決して見ることでできないものだ。

葛藤するその様は、実際の年齢よりも彼女を幼く見せていた。

(レナスの身を案じるあまり……か)

恐らく彼女をこんな風にしてしまうのは、ごく身近な親しい人間だけだろう。

ニーナにとってレナスは、ニーナ自身が思っている以上に大切な存在なのだ。

自覚は無いだらうが。

「気にくわんな」

アキの不機嫌な声を聞き、ニーナが顔を上げた。

「お前は俺の使い魔だ。使い魔は己の主人を何よりも信じ、優先するのが当然だ。気にくわない。俺を信じないことも、俺以外の人間を優先するのも」

次の瞬間、ニーナの身体はアキの腕の中に抱え込まれていた。

ニーナがもがくと、背に回されたアキの腕に力が込められる。

息苦しさに眉をしかめた彼女の耳元で、アキが囁いた。

「俺を信じる」

冷静で静かな声。

けれど、そこに含まれた激しい怒りにニーナが怯える。

彼にとって自分の実力を疑われることは我慢ならぬことらしい。言葉を失くし、怯えたように小さく頷くとアキが腕の力を緩めた。だが戒めを解こうとはしない。離すつもりは無いらしい。

「……アキ、あの……」

「抱き心地いい上に体温が高いな、お前。子供みたいだ」

一瞬呆気にとられたニーナは、アキが元の調子に戻っていることに気づくと、その腕を振り払い憤慨して部屋から飛び出していった。彼女を見送ったアキはゆっくり寝台に倒れこみ、薄暗い部屋の中でしばらく宙を見つめていた。

やがて彼はそっと起き上がると、ニーナの畳んだマントを手に取り、窓枠から外の闇に向かって足を踏み出す。

完全に身体が外に出る前に、その姿は溶けるように消え去った。

11、襲撃

花祭りの当日まで、学園では襲撃事件が起きることも無く平穏な日々が続いていた。

レナスに全てを打ち明けようかと、何度悩んだか分からない。

友を危険な目に合わせたくない気持ちと、アキと自分のことを説明しなければならぬ気まずさと、アキとレナスを信じる気持ちの狭間で、ニーナは苦しんでいた。

花が咲き誇り、穏やかな陽光に包まれた春の日。

自分の気持ちに決着がつかないまま、ニーナは花祭りの日を迎えた。

学園の中庭は色とりどりの花が咲き誇り、甘い香りが立ち込めていた。

生徒も教授も着飾り、会場内を踊るように漂っている。

だが、生徒たちは襟元に小さなピンバッジを着用することが義務付けられていた。

貴族クラスの生徒は白、庶民クラスの生徒は紺の石で出来たバッジを。

そして庶民クラスの生徒は、給仕や掃除などの仕事をしなければいけないかった。

簡素な白いワンピースを着たニーナがバッジをつけていると、会場の片隅を歩くアキの姿が目に入った。

「アキ!……教授」

「ニーナか」

振り返ったアキの手には、小さな箱が乗っている。

「それ、制御装置?」

「そうだ。風魔法と花魔法の担当者たちには配ってきた。これから舞台組の控え室に持っていくところだ」

では、レナスに指輪を渡すのはこれからということか。

「……………ついていっていい？」

おずおずと尋ねるニーナに、アキが目だけで頷くと背を向けて歩き出した。

その後をニーナは小走りで追いかける。

自分が行ったところで何の役にも立たないとは分かっていたが、レナスが襲われると分かっているのにその場に居合わせないなんて耐えられないと思った。

アキについて教授棟に入り、唄い手や踊り手たちの控え室となっている教室へ向かう。

しかし教室の中へは入ろうとせず、外の廊下で立ち止まった。

レナスはともかく、他の出演者の中には庶民のニーナが入ってくることを嫌がる者も居る。

だからニーナは、最初の見学以来レナスの練習を見に行くことも避けていた。

控え室内でレナスが指輪を装備し、何か異変が起こったら即座に踏み込む。

そう構えていたニーナは、アキが控え室から出てきたのを見て拍子抜けした。

「どうしたの？」

「着替えるから出て行けと言われた」

むすっとした顔でアキが呟いた。

ああ、と納得したものの、心配してドアを見つめてしまう。

「……………大丈夫なの？」

腕を組んで壁に寄りかかるアキに尋ねた。

「仕方ないな。俺がここに居ることで良しとしなければ。…………ガキの身体に興味なんか無いんだが」

見る側じゃなくて見られる側の問題だ、とニーナが口を開こうとした時。

ドオンッ！！

閉ざされたドアの向こうで衝撃音が響き渡った。

一瞬、ニーナとアキが顔を見合わせ、同時にドアへと飛びつく。

「レナスッ！！」

悲鳴のような叫び声を上げて部屋へ飛び込んだニーナは、呆然と立ちすくんだ。

レナスは教室の中央付近に立ち、苦痛をこらえるような表情で宙に向けて両腕をかざしている。

片袖の脱げたドレスから覗く白い腕は、真新しい裂傷が出来ていた。

ニーナには見えないが、恐らくレナスが守護魔法を使って防護壁を展開しているのだろう。

視線を落とせば、ぐったりとした生徒たちが座り込んだり倒れたりしていた。

意識を失っているようだが、ぱっと見て重傷を負っている者は居ないようだ。

レナスの防護壁のお陰だろう。

隣のアキが動く気配を感じて視線を向けると、一瞬で彼の姿は天井の片隅に移動していた。

宙に浮いたまま素早く右腕を伸ばすと、見えない何かを握りしめる。

「……もう良いぞ、レナス」

アキは涼しい顔のままだったが、よほど力をこめたのだろう。その手には血管が浮かび上がっていた。

守護魔法を解いたレナスが肩で息をつく。

駆け寄ったニーナがそつとシヨールをかけ、腕の傷に治癒魔法をかけた。

この程度の軽症であればニーナの魔法でも何とかなるのだ。

「ニーナ、レナスの指輪を外しておけ」

アキの指示に頷くと、ニーナはそつとレナスの繊細な指から指輪を抜き取った。

彼女の問いかけるような視線がいたたまれず、視線を合わせるこ
とが出来ない。

「さて。そろそろ姿を現してもらおうか」

その声に顔を上げると、アキが腕に力を込めたところだった。

徐々にアキに掴れている空間が色づいていき、しばらくすると黄色い炎のような塊が完全に姿を現す。

炎の中心には顔が浮かび上がっていた。

「まさか精神体になって来るとはな、モラス」

苦しそうに身をよじっていた炎が歪んだ笑みを浮かべた。

「こちらこそ、わざわざ太閤閣下がいらっしやるとは思いませんでしたよ」

「誰に解脱魔法をかけてもらった」

「……私が素直に吐くとお思いですか」

相変わらず苦しそうな様子だったが、それでもモラスは嘲るような口調で言った。

「私を倒したところでどうにもなりませんよ。すでに闇世界への出口は塞がれています。貴方は油断しすぎなんですよ。私が応援を呼ばなかったと思いますか？ ……諦めるんですね。いくら貴方でも、あのお二人を相手にしては大変でしょう」

ヒステリックな笑い声を響かせたモラスを、アキは冷たい目で見据えた。

「舐められたもんだな、この俺も。その侮辱……極刑に値する」

直後、アキの手から黒い炎が立ち上ると、モラスの絶叫と共に消え去った。

「……」

アキが二人の少女に向き直り、沈黙が辺りを支配する。

断末魔の余韻が消え、室内に静寂が戻ってなお、三人は黙ったままだった。

「……とりあえず負傷者を医務室に送って下さい」

わずかに掠れた声でレナスが言うと、アキは初めて気がついたように床の少女たちに目をやった。

宙に浮いたまま彼が腕を振ると、一筋の煙を残して気絶した少女たちの姿が消えた。

同時にアキが床に降り立ち、ニーナとレナスの方へと近寄ってくる。

しかしそちらには目もくれずに、レナスはゆっくりと首を巡らせてニーナを見た。

その瞳は、今まで見たことが無い光をたたえている。

思わず生唾を飲み込むニーナ。

レナスは重々しく口を開いた。

「説明してちょうだい」

ニーナの話を聞き終えたレナスは、ただ黙って彼女を見つめていた。

その静けさが、かえって恐ろしい。

どのくらいそうしていただろうか。

レナスが長い溜め息をつき、緊張で張り詰めていた空気が破られた。

「……最初から話してくれれば良かったのよ、ニーナ」

ニーナが弾かれたように顔を上げると、レナスが哀れみと同情を込めた目で見つめていた。

怒りの色は、そこには無い。

「最近のあなた、様子がおかしかったから心配してたの。もちろん、この悪魔があなたを使い魔にしてみましたことには怒りを覚えるけれど」

そこでアキを睨みつける。

「私に遠慮する必要なんて無かったのよ。そりゃあアキ教授は素敵だと思っけど、だからって私以外の誰かが教授と親しくすることに

腹を立てるつもりなんか無いわ。それに、あなたがレンを好きだつてことぐらい知ってるのよ」

パツとニーナの顔が赤く染まる。レンの話をしたのは数回だけだったから、まさか見抜かれているとは思わなかった。

「……可哀想に。一人で悩みも苦しみも抱え込んで」

レナスにそつと抱きかかえられ、ニーナの目から涙が零れ落ちた。普段からニーナはレナスを子供っぽいと思うことが多かったが、それでもやはりレナスは年上だった。

自分が思っていたよりも、もつと大人で寛容だったレナスに対し、ニーナは恥ずかしさを感じた。

髪を撫でてくれるレナスの手の優しさに、胸が詰まる。

「取り込み中のところ悪いんだが。悠長に構えている事態じゃなくなつた」

アキの声に、レナスとニーナが顔を上げた。

「次の悪魔が指輪を狙ってやって来る。それもかなりの強敵だ。闇世界からこちらに来たことを俺に悟らせず、モラスに肉体解脱の魔法までかけられる存在。なおかつ『おふたり』とモラスが言っていたことから考えられるのは……双子の悪魔ナゼルとアベル」

黙つて話を聞く二人の前で、アキは苛々と自分の髪の毛を梳いた。

「それよりも教授、もつと大変なことがありますよ」

アキとニーナがきよとんとした顔でレナスを見つめる。

「先ほどの攻撃で唄い手と踊り手が負傷してしまいました。舞台をどうされますの？」

「……それが悪魔の襲撃よりも大変なことか？」

呆れたような顔で問いかけるアキに、レナスは当然だと言わんばかりに頷いた。

その腕の中でニーナは、ビックリした顔でレナスを見上げている。

「私にとっては初舞台ですもの」

「だが、役者が居なければどうしようもない。中止だろうな」

「ですから私に良い案があります。教授が悪魔を捕まえることが出

来て、なおかつ花祭りも中止しないで済む方法が」

「……聞かせてもらおうか」

レナスはニッコリと笑って、腕の中のニーナを見下ろした。

その、いたずらっ子のような笑顔を間近で見て、ニーナは嫌な予感がした。

12、女神

花祭りの盛り上がりは最高潮に達していた。

食事もアルコールもたっぷりと行き渡り、美しい音楽が鳴り響き、会場のおちこちで新しい恋が生まれ、実り、時には散っていった。運営委員たちによって花びらが見事に宙を舞い、いよいよ残すは唄と踊りの舞台だけとなる。

学園長がゆっくりと舞台の中央に進み出ると、会場全員の期待に満ちた視線が注がれた。

春の訪れを感謝し、祈りの言葉を捧げる学園長。

だが彼はその後、今まで見たこともないことをした。

舞台全体に守護魔法をかけたのである。

戸惑い、ざわめく参加者たち。

その声はレナスが舞台に進み出ると、一旦静まった。

しかしそれも、レナスに続き舞台に現れた少女を目にするまでのことだった。

「……………どうするんだ、レナス」

時計塔の上から中庭を見下ろしていたアキが、小さく呟いた。

舞台に進み出たのは、踊り手の衣装を身に着けたニーナ。

その顔にはひどく気まずい表情が浮かんでいる。

参加者たちのざわめきも大きくなり、もはや会場は混乱に陥りかけていた。

「静まりなさい」

風魔法によって拡張されたレナスの声が、凜と響き渡る。

「彼女が踊ることに不満のある者は、遠慮なく申し出なさい。……」

私を敵に回す勇氣があるのならね」

意味ありげに微笑んだレナスの言葉に、全員が沈黙した。

「……………脅迫か」

その様子を眼下に見下ろしながら、呆れた声をあげるアキ。目を丸くして自分を見つめているニーナの視線に気づくと、レナスは力強く頷いた。

ニーナは苦笑した。身体の緊張がレナスの励ましによって消え去り、力が沸いてくる。

レナスの合図で再び音楽が始まると、彼女の口から綺麗なソプラノヴォイスが流れ出した。

ニーナは目を伏せ、一つ大きく深呼吸をすると『根源の指輪』に指を通した。

指輪は自動的に収縮し、ちょうどいい大きさに収まる。

意識を集中させる。観客の視線も、レナスの唄声も、音楽も、自らの息遣いの音さえも消え去っていく。

ニーナは顔を上げると両腕を高々と持ち上げた。

会場中を清冽^{せいれつ}で神聖な空気が満たしていく。

ニーナが踊りだすと、彼女が登場した時とは違ったざわめきが、驚愕と賞賛のざわめきが波のように広がっていったが、しばらくすると誰もがその舞に魅入られ、ただただ舞台上の一点を見つめるだけになった。

彼女の舞は、まさに至高の美だった。

その腕の一振りには春の風の柔らかさと蝶の羽ばたきを思わせ、その微笑みは春の陽だまりを感じさせ、軽やかな足さばきが生けとし生けるものの喜びを現していた。

その舞に魅了されたのは、時計塔の上に居るアキも同じ事だった。「ムーサテリユーズ……」

呆然と呟いたのは、古いお伽噺に出てくる女神の名前だった。

この世界ができた当時から存在する始祖神の中で、美と舞踏を司る最高位の女神。

彼女はある日、人間の男に恋をし、人間として生きることを決め

た。

不老不死の鎖を断ち切り、輪廻転生の輪の中に身を投じたのだ。しかしそれは子供の寝物語の類で誰も信じてはいなかった。

再びニーナに視線を戻したアキが、今度は目を細めてじつくりと観察する。

彼女の指にはめられた指輪は、魔力を増幅してはいなかった。代わりに別の、巨大な力が溢れていた。

かつてないほどの波動を放つ『根源の指輪』。

(これは……)

神力。神々の力。

間違いない。ニーナはムーサテリユーズの生まれ変わりだ。

この時突然アキは理解した。

歴史上に数人しか登場しない、魔法の効かない存在。それこそムーサテリユーズの生まれ変わりだったのだ。

そうと分かれば、指輪の波動も理解できる。『根源の指輪』はそもそも、神々の泉から取り出されたものなのだ。神力と出会った時に最もその力を発揮するのは当然のことだろう。

「よほど俺は強運らしいな」

出会おうとして出会える存在ではない。

おかしそうに笑ったアキは、だが、舞台に向かって近づくと二つの魔力を発見して真顔に戻った。

一呼吸置き、自分の魔力の全てを開放する。その圧倒的で巨大な魔力はたちまち学園中を覆った。

学園は地上を神聖な力で、上空を闇の力で二分された。

舞台に向かっていた魔力の一つが途中で枝分かれし、上昇するとアキの目の前でピタリと止まった。

「お久しぶりですねえ、太閤閣下」

アキの目の前に現れたのは、灰色の長髪にヤギの角を生やした中年の男だった。

厚化粧をして無理やり若作りしているように見える。

「ナゼルか。相変わらず鬱陶しい長髪だな。……ところで、聞かせてもらおうか。あれは俺の指輪だ。なぜお前たち兄弟が追う？」

顎でニーナを示しながらアキが問いかけると、ナゼルはホホ……と笑い声を上げた。

「あの人間が閣下から指輪を盗んだのではないかと思ひましてねえ。取り返して差し上げようと思ったのですよ」

「そうか。では役目は終わったな。闇世界に帰るが良い」

「そうは行きませんねえ。思わぬ掘り出し物を見つけてしまいましたから」

舞台上に目をやったナゼルが、すっと目を細める。

「あれは俺の使い魔だ」

「おや」

ナゼルは驚きに目を丸くすると、高らかな笑い声を上げた。

「悪魔が神を使い魔にできるわけがないじゃないですか！……それとも、そう言っただの少女を騙しているんですか？」

アキの沈黙から答えを読み取ったらしい。ナゼルは「なるほど」と呟くとニヤリと笑った。

「それでしたら私も引くわけにはいきませんねえ」

微笑みながらも、冷たい光をたたえた目でアキを見つめる。

アキもそれを見つめ返し、睨み合いを続けていた、その時だった。足元から絶叫が響き渡る。

「アベル?!」

驚き視線を落としたナゼルは、何本もの水の柱に貫かれた弟の姿を目撃した。

その魔法を放ったのは、レナス。

アベルはニーナと指輪を奪うために舞台に向かったものの、学園長の守護魔法に阻まれて近づくことが出来なかった。

ならば魔法に頼らず実力行使で、と姿を現し舞台に駆け寄ろうとしたのだが。

舞い終えたニーナから指輪を借り受けたレナスは、その強力な魔

法でアベルを撃退した。

水柱はまるで生き物のように、噴き出す血ごとアベルの身体を包み込むと、そのまま凍りついた。

一連の騒動に固まっていた教授たちが、やっと正気を取り戻し舞台に駆け寄る。

「なっ……!!」

驚愕したナゼルの肩に、いつの間にか背後に回ったアキの手が置かれる。

ビクリ、と震えたナゼルの身体から冷や汗が噴き出した。

「お前は二つ間違いを犯した」

アキが耳元で静かに囁く。

「一つ。指輪を奪うのならば、お前とアベルの二人で行かなければならなかった。所詮人間が相手だからと油断したんだろぅが……生憎だったな。あいつはアベルよりも強い」

ナゼルの顔に屈辱の色が浮かぶ。だが、依然として下を睨んだまま身動き一つしない。

地上では教授たちによってアベルにとどめが刺されるところだった。

ナゼルがギリ……と食いしばった歯の間から、血が一筋流れ落ちる。

「……………そしてもう一つは、俺の持ち物に手を出そうとしたことだ」

アキがそう言った瞬間、周囲の温度が急激に下がった。

ナゼルは振り向きざまに攻撃魔法を放つと、急いで後方に飛び距離をとる。

だがそこにアキの姿は無く、放たれた魔法は何もない空中に消えた。

慌てて周囲を見渡し、逃亡のための魔法を構築しようとした瞬間。

「下だ」

その声に思わず下を向くナゼル。

次の瞬間、ドツという鈍い音とともに彼の身体が揺れ動いた。真下から放たれた黒い闇の刃が、狙い違わず彼の喉を貫いたのである。

同時に、闇世界への出口を塞いでいた結界が解かれる。

頭くわくを垂れて、グツタリと宙に縫い付けられているナゼルの死体を闇世界へと送り返すと、アキは花祭りへ視線を戻した。

舞台を終えたニーナとレナスが、生徒たちに取り囲まれている。

アベルのことはレナスが適当な嘘をでっち上げておくといいたが、どうやら片がついたらしい。

ニーナの舞を目の当たりにした生徒たちの、彼女に対する態度が変わったのが伺われる。

これまで敬遠されていた相手から口々に賞賛され、戸惑うニーナをレナスが庇いながら上手くとりなしてやっているようだ。

なぜかジン教授が感涙にむせび泣きながら、ニーナの肩を抱いてハンカチを目に押し当てているのを見て、ムツとした表情を浮かべるアキ。

上空での騒ぎは誰にも目撃されなかったようだ。

彼はローブの裾を翻すと、眼下の会場へ降り立つべく姿を消した。

13、ニーナとアキとレナス

踊り終えたニーナの頬は上気し、僅かに紅潮していた。

先ほどから興奮したジン教授に両手を握り締められているため、身動きがとれない。

「貴女はダンサーになるべきです！ それも一流の舞踏家に！ ええ、酒場のダンサーだなんて低い目標ではありませんよ。大丈夫、貴女ならなれます。私は全力で応援しますよ！」

アルコールが入っているせい、何度も同じ事を繰り返す教授に困った表情を浮かべるニーナ。

酒癖が悪かったんだな、ジン教授……と思いながら伏せられた睫毛が、頬の赤さと相まって男の気をそるような効果を上げていた。教授がニーナを独占しているせいで遠巻きにしていた男子生徒たちが、その色気にあてられてそわそわと動き出す。

レナスは先ほど教授たちと一緒に行ってしまったし、こういうことに不慣れなニーナはどうして良いか分からず困り果てていた。

「失礼します」

その声の主を見たニーナはホッと安堵の溜め息をつく。

アキが柔和な微笑みを浮かべ、紳士的な態度でそこに立っていた。

「アキ教授！ 素晴らしい舞台でしたよお！」

ジン教授からの激しい賛美の言葉に、ニッコリと笑って「ありがとうございます」と返すとアキは、ニーナに向き直った。

「ニーナ。君のお陰で素晴らしい舞台になったよ。よくやってくれたね」

「ありがとうございます」

どうやらアキの仕事の方も首尾良く行ったのだろう。

紳士的な教授を演じるアキに合わせて、殊勝な生徒そのものといった態度で頭を下げた。

「ジン教授。申し訳ございませんが、これからニーナと共に学園長

に挨拶することになっているのです。少しの間、彼女をお借りします」

「ええ。学園長にも素晴らしい守護魔法でしたとお伝え下さい。まだまだ現役ですよ、あの人は……」

だいぶ呂律の回らなくなってきたジン教授に頭を下げると、アキはニーナの腕をとって歩き出す。

男子生徒たちの未練がましい視線が、その後姿を見送った。

アキに引つ張られながらニーナは、教授棟に向かうのだろうなと漠然と考えていたが、彼はその前を通り過ぎ森の中へと歩を進める。

「学園長は？」

「放っておけば暗示が解ける」

学園長に守護魔法をかけさせたのは、アキの暗示だった。

「そうじゃなくて……挨拶するんでしょ？」

「あれはただの口実だ」

ニーナが再び質問をしようとした途端、突然アキが足を止めた。

勢いでその背中にぶつかってしまったニーナが鼻をさする。

「いった……」

「しっ」

アキはニーナの口を片手で塞ぐと、近くの木陰に身体を隠す。

その様子につられてニーナも息を殺し、アキの視線の先へと目をやると、そこには一組の男女が居た。

（ウイード……とリリアナ？）

男の方はレナスの信奉者、ウイードだ。

一方、彼と対面する少女は着飾っているせいで一瞬見分けがつかなかったが、リリアナに違いなかった。

「驚いたなあ、お前がこんな風になるとは」

ウイードが下品な笑みを浮かべて口を開くと、リリアナの眉毛がピクリと引きつったが、すぐにまた取り澄ました表情に変わる。

確かに、地味だった彼女がこれほど美しくなるとはニーナも思いもよらなかった。

だがそれだけではなく、リリアナの纏う雰囲気自体が大きく変わっていた。妙にスッキリとした晴れやかな表情をしたリリアナは自信に満ちており、まるで別人のようだった。

「ダンスのパートナーが居ないんだらう？　俺がなつてやってもいいぞ」

ウィードの口から出る傲慢な言葉に、聞いているニーナの方が切れそうになった。

ここまで自惚れの激しい男だったとは……！

不快感に顔をしかめるニーナだったが、言われたリリアナの方は微笑みを浮かべて悠然と立っていた。

「申し訳ございませんウィード様。私にはすでに決まった相手がありますの」

断られると思っていなかったウィードは、一瞬、聞き間違いかと思った。

「決まった相手がありますの」

リリアナはもう一度繰り返した。

信じられないといった表情を浮かべたウィードの顔が、怒りに歪む。

彼がリリアナの方へ一歩踏み出すと、彼女の背後から一人の男が現れた。

その姿を目にしたとたん、ウィードの瞳が驚愕に見開かれる。

若いながらも威厳と気品に満ちたその男の腕に、リリアナは自らの手をそつと差し入れた。

「ギルケス伯爵……」

ウィードが放心したように呟いた。

「誰だあれ」

「ギルケス伯爵。確かつい最近、爵位をついだばかりだって聞いたけど」

小声で囁くアキとニーナ。

二人は今、一本の木の陰で抱き合うようにしてウィードの修羅場

いる。

薄い布地ごしに感じるアキの大きな手と体温が、ひどく落ち着かない気分させた。

「そんなに怯えるな。……それでよく娼婦になるとか言えるな」

「う」

思わず言葉に詰まる。痛いところを突かれてしまった。

「じゃあ、キスでもいい」

唇を尖らせて拗ねるニーナはしかし、髪の中に指を差し込まれると身体をこわばらせた。

それでも抵抗はしない。

だがアキは、彼女の顔を引き寄せて自分の肩に乗せると、耳元に口を寄せた。

「こんな子供を相手にしても仕方ないからな」

吐息がかかる感覚に、背中がぞくぞくする。

思わず首をすくませたニーナは、続けて耳朵を軽く噛まれて「ひやっ」と声を漏らした。

顔に血が上り、燃えるように熱くなる。

「……お前は、俺の使い魔だ」

噛む場所を少しずらずらしながら、ゆっくりとアキが囁く。

その声は真剣で、いつものようなふざけた調子も、ましてや甘いところなど全く無かった。

もしニーナがアキの顔を見ていたら、何かを思いつめたような表情を見ることが出来たはずだ。

けれど彼女は耳から広がる感覚に、熱に浮かされたようなぼんやりと霞がかった意識の底で、ただ何となくその言葉を聞き流していた。

- - お前は、俺の使い魔だ。

ニーナと別れ、中庭に戻ったアキはレナスと再会した。

「お前、知ってたのか？ あいつが……」

「神様だつてこと？」

口ごもるアキに、レナスはその先を口にすると優雅に笑った。けれどそれは微かな苦味の混じったものだった。

「……初めてあの娘が踊るのを見たとき、分かったわ。自分が目にしているのは、人間じゃない。何か異質な存在だ、つて……。詳しくことは私には分からない。でも、あんなに神々しいもの、他に言い表しようが無いじゃない。神様としか」

「……正確には、神の生まれ変わりだ。美と舞踏の神、ムーサテリユーズの」

アキの言葉にレナスは、驚いた様子もなく黙って頷いた。なんとなく予想がついていたことだ。

「すごいわね。神様を使い魔にするなんて」

レナスが皮肉交じりに言う。彼女もまた、ニーナとアキの契約が継続中だと信じていた。

「ああ。あいつは俺の使い魔だ」

アキの真剣な目を覗き込んだレナスは、何かを確認したかのように頷くと、フツと顔をほころばせた。

「約束よ。あの娘を、守ってね」

「ああ」

アキは短く答えると、何も無い宙を見据える。

そして小さいがしっかりとした声で、きつぱりと呟いた。

「……あいつは俺のものだ。誰にも渡さない」

春が終わろうとしていた。

1、出会い（霧の季節）（前書き）

レナス十四歳、ニーナ十二歳の頃のお話し

1、出会い（霧の季節）

春と夏の間には横たわる、霧の季節がレナスは好きだった。元々自分が水神の加護を受けているということもあるが、寒くもなく暑くもなく、ただ怠惰に時が流れていくような気だるげな空気が何とも言えず心地良かったのである。

今、彼女は霧に覆われた学園の校庭を歩いていた。水魔法によって自分の周囲の湿度調整を行い、肌も髪も適度に潤わせた状態で悠々と歩く。水色の髪の手先で、水滴が七色に光を反射する玉になっていた。

その後を、衣服を肌にとわりつかせるほどの湿気にもめげない信奉者たちが追いかける。彼等はレナスほど水魔法が得意ではないので、それぞれが風魔法や光魔法を使いながら周囲の空気を快適なものにしようとしていた。

「それで、どこにあるのかしら」

レナスが誰にともなく呟き、小首を傾げた。

いつもであれば取り巻きが我先にと彼女の疑問に答えてくれただろう。だがこの日に限っては背後から何の言葉もなかった。

えっと驚いたレナスが後ろを振り返る。

「まさか誰も知らないの？」

目を丸くして声を上げたレナスの前で、男子生徒たちが気まずげに視線を逸らせた。

「なんてこと……あと一時間しかないのに」

レナスが呆然と呟いた。

彼等は今、植物学の授業中だった。この季節に花を咲かせる、貴重な魔法植物の標本作り。そのための植物採取が課題だったのだが、教授から「校庭に生えています」と言われていたが、詳しい場所を知らなくても構わないとレナスは思っていた。どうせいつものように、ゾロゾロ自分の後をついてくる男たちの誰かが教えてくれる

だろうと。

期待を裏切られたレナスは、内心「場所も知らないくせに、何で私についてきたのよ」と目の前の男たちに対して苛立ちを感じていた。

学園の校庭はかなり広い。いくつもの森が点在し、端から端まで移動するには馬車を使わないと一日がかりである。その中で当てもなく植物を探すなんて無理な話だ。

どうしようかと途方にくれ、無言のまま立ちすくむ一団。だがその時、彼等の横手の繁みが揺れたかと思うと、一人の少女がその中から現れた。

黒髪に黒い瞳。制服のエンブレムは紺。庶民クラスの生徒だということだ。けれど彼女は貴族クラスの生徒たちと遭遇しても、萎縮したり卑屈になったりすることなく普通にその脇を通り過ぎようとした。

その素振りは極めて自然で、だからこそ際立って強烈な印象をレナスに与えた。

「待って」

気づいたときにはもう、言葉が口をついて出ていた。

少女が振り返り、先を促すかのようにジッと見つめてくる。普通の人間であれば、その心の中まで見透かされるような視線にたじろいでしまったかもしれない。しかし恐いもの知らずのレナスは、臆することなく言葉を続けた。

「私たちポタバキの花を探しているの。貴女、どこにあるか知らない？」

その口調は、人に物を尋ねるにも関わらず、全く下手したてに出た所がなかった。かと言って相手を見下している素振りも無い。常に人の上に立つが故に身につける雰囲気。それはちょうど、王族が家臣に物を尋ねるかのようであった。

レナスの背後に控えていた男子生徒の一人が、顔をしかめて彼女の耳元で囁いた。

「こいつは庶民クラスの生徒だぜ？ 何もそんな人間に口をきかなくたって……」

「アナタたちが役に立たないからでしょう。いいから黙ってて」
ぴしゃりと一括され、その男子生徒は不満そうに口をつぐんだ。

相変わらず蔑むような視線を黒髪の少女に向けながらも、レナスを怒らせてまで反対するだけの勇氣は無いようだ。

改めて少女に向き直ったレナスがニツコリと微笑む。

「ごめんなさいね、余計な邪魔が入って。それで、貴女がボタバキの花の場所を知っていたら教えて欲しいのだけれど」

レナスの笑顔を見ると、男子生徒であろうと女生徒であろうと、必ず顔を赤らめて視線を泳がせドギマギするものなのだ。その少女は驚くほど無表情のまま口を開いた。

「ここから一番近い場所だと、この道を通り直ぐ行って……二つ目の森の中に入って……塔の前で右の脇道に入って……十字路を右に……泉をぐるっと回って……」

最初はニコヤかに話を聞いていたレナスも、段々と眉間に皺が寄って来る。少女の説明が終わる頃には、すっかり難しい顔つきになっていた。

とてもじゃないが覚えられるような道筋ではない。チラリと横目で信奉者たちを眺めると、彼等も同様だったのだろう。皆、呆けたような表情を浮かべていた。レナスの視線に気づくと男たちは慌てて居住まいを正したが、彼女と目を合わせないようにしている。

本当に使えないんだから……と苦々しく思いながら、レナスは少し困ったような笑みを浮かべて少女の前で両手を合わせた。

「ちょっと道が複雑すぎて覚えられそうにないわ。貴女に道案内をお願いできないかしら」

「悪いけど、予定があるから無理」

あっさりと断られたレナスは、何が起こったか理解するのに数秒を要した。これまでこんな風に彼女がねだって、断られることはまず無かったのである。

「え……？」

かすれた声の呟きは、背後の信奉者たちの声にかき消された。

「おい、この女性が誰だか分かってるのか?!」

「貴族の頼みを断るなんて、何様のつもりなんだ!」

「身分をわきまえろ! 庶民の分際で」

呆然と立ち尽くすレナスの耳には、彼等の怒号が、どこか遠くから聞こえる意味を持たない騒音に感じられた。あまりのショックの大きさに、脳は思考を停止していた。耳から入ってくる言葉の意味を考えることが出来ず、ただただ目の前の少女を見つめていた。

非難を浴びているはずの少女は、無表情で知らぬ方を眺めている。その目は不快さも傷ついた色も浮かべてはおらず、幼い顔に不釣り合いな、物事を悟りきったような大人びた表情が浮かんでいた。

「……方向指南の魔法を使えばいいんじゃないですか?」

しばらくして信奉者たちの勢いが少し落ちた時に、少女は冷静に言った。

一部の生徒が困惑の表情を浮かべる中、レナスを含め数人の生徒が目丸くする。

「方向指南って……」

「宮中魔術師の入団試験に出てくる魔法じゃないか」

「俺達に使えるわけがないだろう」

それは精霊に命じて、自分の行きたい場所までの道案内をさせる高度な魔法術だった。この学園でそれを教わることが出来るのは、成人式を終えた最終学年、それも宮中魔術師を志す者だけと決められている。なぜなら宮中魔術師は任務で帝国内のあらゆる地区に向かなければならず、この術を習得していることが入団試験の前提条件となっていたからだ。

男子生徒たちが「簡単に言うな」「どれだけ難しい魔法か知っているのか」と口々に詰め寄るのを、黒髪の少女は黙って聞いていた。だが、さすがに面倒くさくなったのだろう。持っていた筆記具の中から羊皮紙を一枚とりだすと、サラサラと何かを書き始めた。

「はい」

突然目の前に差し出された羊皮紙を、反射的に受け取るレナス。見下ろすと、よくぞ殴り書きでここまでと思うほど細かい字がビッシリと書き込まれてあった。

「そこに魔法の構成と発動式が書いてあるから。貴女ほどの使い手なら大丈夫でしょ」

「え……あ……ありがとう……？」

先ほどのシヨックに加えて急な展開に頭が混乱しているレナスは、少女を見つめたままぎこちなく礼を言った。

肩をすくませて立ち去ろうとする少女に、慌てて声をかける。

「待って！……私はレナス・ヴィオレッタ・ヨーフ。レナスよ」

「知ってる。学園の人魚の名前ぐらいは」

振り返った少女が淡々と話す。レナスはぐつと息を飲み込んだ。

（しつかりしなきゃ。どう見ても私のが年上じゃないの）

落ち着いた様を取り繕いながら、どうにか笑顔を浮かべて見せた。

「そう。貴女の名前は？」

「ニーナ」

それだけ言うと黒髪の少女は踵を返して立ち去った。

ニーナ。庶民には姓がないことは珍しくない。だから同名の別人ということも考えられるが……彼女がああニーナだろうか。

その名前は、試験結果が貼り出されると常に「首位」の位置に記されていた。それも「学年首位」ではなく「学園首位」、つまり、帝国一の規模を誇るこの魔法学園で一番の成績だということだ。

ただし一般科目のみ。これが魔法技能の成績となると、ニーナの名前は毎回、最下位に近い所を行ったり来たりしていた。

一般科目と魔法技能の成績に差がありすぎる。ゆえに彼女は有名で、その名前を知らない生徒はこの学園には居なかった。

レナスは手の中の羊皮紙に目を落とす、そこに書かれた理論と魔法の発動式を読み込む。

それは教科書や教授陣の教えもかなわないほど、分かりやすく

完璧な文章だった。

目を閉じて意識を集中させ、覚えたばかりの魔法を発動させる。恐る恐る目を開けてみると、顔の前に濃紺の発光体が生じていた。

その光の塊はふわふわと漂い、少し離れた所でジツと留まる。まるでレナスがついてくるのを待ち構えているかのよう。

この時、レナスは確信した。これが私の精霊。そして先ほどの少女は間違いなく、あのニーナだったのだと。

月末に行われた定期試験の結果が貼り出された時、いつものようにニーナの名前は一般科目の学園首位にあった。

あの日以来ニーナに対して好奇心を募らせていたレナスは、試験結果を見上げながら、ますます彼女のことを知りたいという想いを強めた。

ニーナと出会った場所に何度か足を運んだり、庶民クラスの校舎まで尋ねて行ったりもしたが、間が悪いのかいつも会うことができなかった。

そこでレナスは、自分の取り巻きや庶民クラスの生徒にニーナのことを尋ねることにした。

そして分かったことは、どうやら彼女には友人が居ないようだ、ということだった。誰も彼女について詳しいことを知らなかった。

一般科目は成績優秀だが、魔力はほとんど無いこと。進んで人と交わろうとせず、いつも独りでいること。どうやら孤児であったらしいこと。朝は遅刻ギリギリに登校してきて、授業が終わるとさっさと帰ってしまうこと。遅刻してくることも多く、時には登校すらしてこないこと。

話を聞いた相手全員が、同じようなことを口にした。そのどれもがニーナの表面上のことしか教えてくれなかった。

レナスが歯がゆく思っていた頃、信奉者のうちの一人がポツリと呟いた。

「そういえば彼女はウィッチグラスに住んでいたな」

「ウィッチグラス？」

聞き返したレナスの視線に、彼は「しまった」という顔をしながら、バツの悪い顔で視線を逸らせた。

「レナス、君が知るような場所じゃないよ」

フロローに入ろうとした別の男子生徒は、彼女に険のある瞳で睨みつけられて黙り込む。

「教えて」

レナスに低い声で尋ねられて、誰が逆らうことが出来るだろう。

信奉者たちは互いに顔を見合わせた後、諦めた様子で口を開いた。

「……娼館だよ。レイチエル・ドーソンがオーナーの」

「レイチエル・ドーソン？」

レナスが驚いた声を上げた。

宮中娼婦であるレイチエルとは、王宮で何度も顔を合わせたことがある。彼女は並みいる宮中娼婦の中でも一、二を争う存在であり、その権力も大きい。そのレイチエルが娼館を経営しているなんて初耳だった。

だがそれも無理はないだろう。貴族の令嬢であるレナスに、娼館など用はない。耳に入れる必要もない。だから誰も教えない。

「そのウィッチグラスは娼館といっても、上客しか相手にしないところなんだ。レイチエルがオーナーなだけあって、娼婦たちの作法や知識は貴族の令嬢なみだよ」

続けて教えられた情報に眉を潜めるレナス。

「……アナタ、その店に行ったことがあるの？」

言われた男子生徒の顔が青ざめる。彼は慌てて否定し、知人から伝え聞いた話だと弁明を始めたが、その必死さがかえって疑わしかった。

しかしレナスはもはや、彼の話を聞いていなかった。そんなことはどうでも良かったのである。

「レイチエル・ドーソンね……」

彼女の小さな呟きは、誰の耳にも聞き取られずに消えた。

1、出会い（霧の季節）2

シャンデリアに照らされた巨大な舞踏場には、着飾った男女が所狭しとひしめき合っており、目当ての人物を探すことが難しく思われた。

けれどレナスは、人ごみの中を漂ううちに見覚えのある後姿を見つけることができた。

「レイチエル」

呼びかけに対してゆっくりと振り返った女性は、見る者すべてを蕩けさせる絶世の美女。

対するレナスは、まだ幼さが残るものの、見る者すべてを圧倒する美しさを備えている。

王宮で三大美女と呼ばれているうちの二人が対峙している様は、周囲の人間にとって正に眼福と呼べるものだった。

「まあ。ヨーファ家のお嬢様。ごきげんうるわしく」

「レナスで良いわ。貴女に聞きたいことがあるの」

レイチエルが小首を傾げてみせる。

「貴女のお店にニーナという娘がいるでしょう？」

その問いかけに、レイチエルの美しい形の眉が顰められた。

「……レナス様、どこで私の店のことをお聞きになりました？」

「知人からよ。でも、そんなことはどうでも良いの。私が知りたいのはニーナという娘のことだけよ」

腰に手をあててレイチエルを見上げるレナス。自分の満足いく答えが得られなければ引き下がらないという頑固さがその顔に浮かんでいた。

レイチエルの目が思案するように細められる。

「なぜ知りたいのです？」

「え……」

問われてレナスは言葉に詰まった。

なぜ、と言われれば単に自分の好奇心を満たすためだ。自分の前に出て、態度を変えたり変に取り繕ったりしない人間は初めてだったから。

しかし、知ってどうするということまでは考えていなかった。

上目使いでレイチエルを伺ってみると、美しい瞳の中に潜んでいる何かが、中途半端な理由ならば教えないと暗に伝えてくる。

「私、ニーナと同じ学園に通っているの」

少し胸をはり、ゆっくりとした口調で話す。こうしている間にも、脳みそは適当な理由を考え出そうと必死で働いているが、それを態度に見せてはならない。あくまで自然体で堂々とした様子を見せなければ。

「実は、少し前のことなだけけれど、ニーナに魔法を教えてもらったのよ。そのおかげで助かったから……お礼をしたいの。でも、学園じゃ彼女に会うことが出来なくて」

言いながらレナスは、我ながら上手いことを思いついたと考えていた。

ニーナに方向指南の魔法を教えてもらったのは事実だし、そのおかげで助かったのもまた事実である。そのお礼ということならば、不自然な点はないだろう。

やましいところのない理由のおかげで、レナスの態度は自信たっぷりだった。

その返事にレイチエルは考え込む。

彼女はレナスのことをよく知っているわけではない。王宮で会えば挨拶を交わすけれども、その程度の関係だ。

噂によるとレナスは、帝国一と言っているほどの魔力の持ち主であり、すでに国家の後ろ盾もあるらしい。そんな相手に、ニーナが魔法を教えるなどということがあるだろうか。あのニーナが？

また、レナスは類まれな美貌の持ち主だが、幼いころより甘やかされて育ってきたために我が儘放題の少女だという。ニーナに関心を持っているのも一時の気まぐれかもしれない。その気まぐれゆえ

にニーナを傷つけるかも分からない。

そんな相手を近づけるわけにはいかない。レンからの大切な預かりもののニーナに。

レイチエルは目を閉じると、軽く首を振った。

「お礼など必要ございませんわ、レナス様。そのお気持ちだけで十分です。恐らくニーナも同じ気持ちでございますから、そのようなことでお心を煩わせることはおやめ下さい」

レイチエルは軽く会釈をして、その場から立ち去りかけた。

「ま、待って！」

焦ったレナスが呼び止める。

どうしてニーナと言いレイチエルと言い、勝手に私の前から消えようとするのよ！

「それだと私の気が済まないわ。だったら貴女からニーナに伝えてくれない？ 学園の私の教室に訪ねて来て欲しいと。その時にお礼をするから」

「……そんなことはニーナも望みませんわ」

聞き分けのない子供を諭すような口調でレイチエルは言い、憤慨するレナスを冷めた目で見下ろした。

自分の好きなように生きてきたこの少女は、他人から断られた経験が少ないのだろう。簡単には諦めそうにない。ならばとレイチエルが考え付いたのが、これだった。

「レナス様が私の店においでになれば、いつでもニーナと会えますよ」

ピタリとレナスの憤りが治まった。

「レイチエルの店に？」

「ええ。いつでも歓迎いたしますわ」

そう微笑んでレイチエルは今度こそ去って行った。

これで良い。まともな貴族の令嬢であれば、娼館のような場所へと足を運ぶことは無い。諦めざるを得ないだろう。

彼女は気が付かなかった。レイチエルの言葉を聞いたレナスの瞳

が、きらりと輝きを増したことに。

噂のみでしかレナスを知らなかったレイチエルは、彼女を普通の貴族の令嬢として捉えるという過ちを犯したのだった。

「ここね」

レナスは暗闇の中に浮かび上がる建物を見上げた。どっしりとした造りの建物は、ランタンに入れられた緑や黄色の光魔法によって照らされている。

娼館ウィッチグラスの、予想していたよりも地味な外見にレナスは肩すかしをくらったような気がしていた。

確かにこの辺りは治安の良くない地域だし、道端には浮浪者や目つきの良くない男たちがたむろしている。だが目の前の建物には「いかにも娼館でございます」といったケバケバしい雰囲気は無かった。

本当にここで良いのだろうか？

彼女は今、足元ですっぽりと包み込む黒いマントと、黒いフードを目深に被り、黒い布で目から下を全て覆っていた。

いかにマントの隙間から覗く衣装が高価なものであっても、こんな怪しい出で立ちの人間を襲おうという者は居なかったおかげで、レナスはお忍びでここへ来ることに成功していた。

一人だけ、酔っ払いが彼女の前に立ちはだかるようにして絡んできたが、黒いフードの下から凍りつくような視線を浴びせられて大人しく引き下がった。

「悩んでいても仕方ないわね」

顔を覆っていた布を引き下げて呟いたレナスは、扉に手をかけた。ゆっくりと開けると、隙間から突き刺すような光が溢れ出て、思わず立ち止まってしまふ。そのまま数秒間、目が慣れてくるのを待ってから完全に扉を開け放った。

室内に入り込み、後ろ手に扉を閉めたレナスは興味津々といった様子で周囲を見回した。

外見の質素さとは裏腹に、中の調度品は豪華絢爛だった。幼いころより高価な家具を見慣れているレナスには、すぐにそれが王宮で使用されているものと遜色ない名工の作であることを見抜く。しかも、華やかな装飾が施されているが、決してそれが嫌味ではない。

さすがレイチエル・ドーソン。

感心しながらマントとフードを脱いだレナスの姿に、その場にいる娼婦たちの目が釘づけになった。

この店の娼婦たちは上客を相手にするだけあって、容姿も際立っているものが多い。だが並み居る美女たちが、足元にも及ばない美少女が目の前に現れたのだ。その服は一目で高価なものだと分かる。おまけに堂々とした態度は気品が溢れていた。

ウィッチグラスを訪れる客は、男ばかりとは限らない。この世界には色々な需要がある。女性客を相手にすることも少なくない。だが、この少女は……ちょっと若すぎないだろうか？ 一体、何の用があつてここに来たのだろうか。

娼婦たちが戸惑い、レナスに声もかけられないでいると、上階から足取りのおぼつかない男が降りてきた。

男は馴染みの娼婦がなかなか部屋にやってこないことに痺れを切らして降りてきたのだが、ふと玄関前にたたずむレナスの姿を目にとめた。

「ほおおー！ これはこれは、上玉じゃないか。少し胸のあたりは寂しいが」

男がそう叫んだ瞬間、レナスの瞳に獰猛な光が浮かぶ。彼女は密かに、自分の胸が小さいことにコンプレックスを抱いていたのである。

相手を崩した男は、遠慮する様子もなくジロジロとレナスを見つめた。

ぶしつけな男の視線を不快に思った彼女の足元から冷気が立ち上っていたが、その異変に気付くものは誰も居ない。

「お前さん、名前は？」

「……レナスよ」

「そーかそーか。綺麗な名前だなあ。まだ若いし。やっぱり女は若くてぴちぴちしたのが一番だよな」

男の舐めるような視線に、レナスの嫌悪感は募っていく。

常に数多くの男たちに取り囲まれているレナスだが、実は男に触れられることを極端なまでに嫌っていた。ダンスなどの「仕方ない」状況であればまだ我慢できるのだが、挨拶の際に馴れ馴れしく肩に手を置かれたりすると……たとえそれが全く他意の無い相手と分かっているとしても、心の中に冷たい感情が渦巻いてしまう。

この男、見た目は貴族のような服装だが、レナスの名前を知らない所を見ると王宮への出入りを許されていない下級貴族か……あるいは裕福な商人か。

いずれにせよ、この私に絡むなんて良い度胸してるじゃないの。

レナスの足元ではもはや、冷気が白い靄せむやとなり始めていた。

彼女がじつと黙って耐えているのを、「脈がある」と勘違いしたのだろうか。

周囲で見えていた娼婦たちが止める間もなく、調子に乗った男がレナスに抱きつくようにして「今夜はこの娘にするぞ！」と首を巡らせて宣言した。

直後、館中に娼婦たちの悲鳴が響き渡った。

1、出会い（霧の季節） 3

突如として発生した吹雪^{ブリザード}。それは荒れ狂ったように店内を駆け巡り、その場にいた全員を悲鳴の渦に飲み込んだ。

やがて風が収まり、恐る恐る目を開けた娼婦たちが見たものは、手足が凍りつき床に縫いつけられている男の姿と、それを見下ろす美少女の姿だった。

「無礼な男ね」

吐き捨てるように言ったレナスは、害虫でも見るような目つきで男を見下ろした。

すっかり酔いが覚め顔から血の気のなくなった男は、床に尻餅をつくような形で、怯えながら彼女を見上げていた。

誰もがレナスを見つめ、身動きすらできずに固まっていた。

「何があつたの？」

衣擦れの音とともに現れた、低い落ち着いた声の持ち主をレナスが振り返った。

魔女、という形容詞がぴつたり的美女がそこにいた。黒髪の巻き毛に、床まで届く黒いドレス。蠟のように白い肌に、美しい紫色の瞳。血のように赤い唇。

レナスは知らなかったが、彼女こそウィッチグラスの店長であるミレイユだった。

金髪で緑色の瞳のレイチエルと、黒髪で紫色の瞳のミレイユ。客は彼女たち二人を「昼と夜の女王」と呼んでいた。

室内の様子を見回していたミレイユが、床に凍りついている男に目を留めた。しばらくそちらを見つめた後、レナスに視線を移す。

「それで、お嬢様はお客様でいらっしゃいますの？」

「いいえ。私はニーナに会いに来ただけよ。いつでも歓迎するってレイチエルに言われたし」

眉を潜めたミレイユが、その豊満な胸に埋もれていたペンダント

を引つ張り出した。手の中にペンダントトップを収め、それに向かつて囁く。レナスにはそれが、通信機能を持つ魔法鉱石であることが分かつていた。恐らく会話の相手はレイチエルだろう。

低い声でやり取りをしていたミレイユが、顔を上げてレナスに「お名前は？」と尋ねてきた。

「レナス。レナス・ヴィオレッタ・ヨーフよ」

再び魔法鉱石に向き直ったミレイユは、しばらくしてから通信を終えてレナスに向き直った。

「お話は分かりました。私がニーナの所まで案内させていただきます。……ところで、この男性はどうしたのですか？」

レナスは何でもないと顔で、事の顛末を説明した。

話を聞き終わったミレイユはため息をつき、レナスに魔法を解いてくれるよう頼んだ。そして身体が自由になった男に手を貸して、立たせてやる。

「お客様。お聞きの通り、この娘は娼婦ではありませんからお相手は出来ません。……けれど、馴染みの娘がおりながら他の娘を指名するような不義理は、この店では許されませんよ」

間近で男の目を覗き込んだミレイユの瞳が、冷たく光った。その迫力に飲み込まれ、脂汗を浮かべた男が「す、すまない……」と謝罪する。

ふっと目を伏せたミレイユが「お酒も入っていらっしやいましたし、もう懲りたでしょうから」と言い、娼婦の一人を振り返って「ベラ」と声をかけた。

一人の娼婦が針で刺されたように飛び上がると「はい」と返事をした。

「もとはと言えば、貴女がお客様をお待たせしてしまったのが悪いのよ？ 早くこの方をお部屋にお連れして、お世話をしてさしあげなさい」

低く柔らかい口調でありながら、ミレイユの言葉には逆らえない力がある。

ベラと呼ばれた娼婦は慌てて男の傍に駆け寄ると、その腕をとって、彼の身体を気遣いながら階段を上って行った。

「では行きましようか」

ミレイユの威厳ある姿と、その経営手腕に見とれていたレナスが我に返った。

「お願いするわ」

レナスは頷くと、彼女の後について歩き出した。

ミレイユに連れてこられたのは、娼館と廊下で繋がった別棟の一室。案内しながら彼女が説明してくれたところによると、この建物はウィッチグラスで働く全員の居住スペースなのだという。

「ニーナも働いているの？」

「あの娘は未成年ですから、もちろん娼婦として働いているわけではありません」

レナスの質問の意図を先取りし、ミレイユがやんわりと言った。

ここよりも格下の娼館では、年齢を偽って未成年の少女を働かせている店もある。しかしウィッチグラスでは、そういった決まり事は全て忠実に守られていた。

「下働きとして、皆の役に立っているのですよ」

そう言うとミレイユは一つの部屋の前で足を止めた。

「この中にニーナが居ります。では、私はこれで」

膝を折って一礼したミレイユが行ってしまうと、レナスは扉をノックした。

どうぞ、と中から小さな声が聞こえてノブを回す。だがレナスは予想だになかった光景を目にして固まってしまった。

ニーナにとっても、意外な客であったに違いない。

彼女はわずかに目を見張ると「レナス？」と呟いた。

先に気を取り直したのはレナスの方だった。

「お久しぶりね、ニーナ。貴女にこの前のお礼を言いたくて……とここで、何してるの？」

「腕立て伏せ」

「見れば分かるわよ！ ……なんでそんなことしてるの、って聞いてるの」

分かるなら聞くなと言わんばかりの表情のニーナを見て、レナスが苛立たしげに叫んだ。

扉の向こうでニーナは腕立て伏せをしていた。それも、片手片足でというハードなものだった。

息も切らさずに立ち上がったニーナが、ひよいと肩をすくめて言う。

「身体を鍛えるため」

この娘は……！ とレナスの頬が引きつった。質問に対する答えが簡潔すぎて、その答えの背後にある「なぜ」とか「どうして」と言った理由が見えなくてイライラする。

レナスが見つめる前でニーナは、エプロンに着替え始めた。

「ちよ、ちよっと。着替えるなら私、外に出るわよ」

「なんで？」

「なんでって……」

振り返り、不思議そうに尋ねたニーナに言葉を失うレナス。

貴族の女性は、同性であろうと自分の着替える姿を他人には見せない。もちろん、手伝いの召使いは別だが。それを当然の習慣として育ってきたレナスには、ニーナの疑問の意味が分からなかった。ゆえに、答え方も分からない。

まごつくレナスを余所に、ニーナはさっさと着替えを終えた。

「悪いけど、これから仕事あるから」

淡々と言うニーナを前に、このままではせつかくの機会を失つてチャンスしまうと思ったレナスは咄嗟に「わ、私、貴女とお話したいの」と言った。

思わず本音を打ち明けてしまった後の、数秒の沈黙がなんと長く感じられたことか！ 断られたらどうしよう、と恐れドキドキする胸を抱えながら、レナスはじつとニーナを見つめていた。

そう。恐れていた。恐いもの知らずに育ってきたレナスが、今、一人の少女の拒絶を恐れていたのである。

だがニーナは、不思議そうな顔でレナスを見つめた後「仕事しながらで良いなら、ついてきて」と言ったのである。

レナスは安堵し、嬉しそうな顔を浮かべて頷いた。

ミヤオに淹れてもらった紅茶を飲みながら、レナスはニーナの働く様子に息を飲まれていた。

少しも立ち止まることなく、流れるように次から次へと料理をしていく。そして娼婦たちが次から次へと食堂に入ってきては、食事を済ませて去っていく。

ニーナはひっきりなしに手を動かしながらも、レナスと会話をする。

驚くべきことに、こんなに慌ただしい中ミヤオはレナスのためにホットケーキを焼いて出してくれた。

「よく一人で外出できたね？」

外側がカリカリで中がフワフワという、絶妙なホットケーキに感動していたレナスが、ニーナの声に顔を上げる。コクン、と口の中の一かけを飲み下して答えた。

「実はね……しよっちゆう屋敷を抜け出しているの。色々気づまりなことが多いし」

「ふーん」

貴族ならではの苦労があるのだろう、と思ったニーナは皿を拭きながら相槌を打った。

「まあ、私が外出するって言ったところで反対する人間なんて居ないと思うけれど。こうした方が面白いでしょう？　ちゃんと服も地味なものにしてきたし」

言われたニーナがまじまじとレナスを見つめた。確かに装飾のない、シンプルな形の服にしているが、マントも服も生地の上等さが隠れていない。この界限で、そんな服を着ている人間が居たら目立

って仕方ないだろう。

世間知らずだから仕方ないかと思ったニーナは、服のミスメイクについて黙っていようかと思った。だが、それでレナスに危険が及んでも困ると考え直す。

「……もう少し地味なものの方が良いかもしれないね」

「たとえば？」

「うーん。使用人の服とか」

ニーナが言うと、レナスの目が生き生きと輝いた。きっと今度からは、屋敷で働いているメイドの服を着てくるに違いない。

彼女はニーナが自分に興味を持ってくれたのが嬉しかったのか、この店のことを聞き出すのが、いかに大変だったかを語りだした。

「誰も教えてくれないのよ。場所とか営業時間とか」

可愛らしく頬を膨らませた仕草が、自分よりも年下のように見えてニーナは首を傾げた。

「普通は教えないだろうね」

そう応じたニーナは、「なぜかしらね？」とレナスが言った後、「だから結局は脅迫まがいなことまでして教えてもらったんだけど」と聞かされて眩暈を感じた。

どうやらレナスを普通の貴族の令嬢だと思って相手をする、手痛い裏切りに合うらしい。

そんな彼女がなぜ自分に興味を持ったのか。そこがニーナには不思議で仕方なかったのだが、今までレナスのように自分に対して真つ向から付き合おうとする同年代の少女は居なかった。

そのことがニーナの胸に、不思議な感情を呼び起こす。新鮮な驚きと、自分でも良く分からない複雑な戸惑い。けれどそれは、決して嫌なものでは無かった。

レナスが話している途中で、ミレイユが食堂に現れた。

「悪いわね、ニーナ。一曲踊ってくれないかしら」

ニーナは頷いて、エプロンを外す。

「レナス様も、良ければご覧になりますか？」

ミレイユに誘われ、レナスは目を瞠って頷いた。

「貴女、踊りもするの？」

「ごくたまにだけど。姉さんネエが急に舞台に立てなくなった時とか」
言いながらニーナは、ミレイユが持ってきた踊り子の衣装に着替え始めた。普段は娼婦が着るといふその衣装は露出が多く、ところどころ透けている。

しかしニーナの身体は成長過程にありながら、すでに女らしい曲線を描いていた。細くくびれた腰と、丸みを帯び始めたヒップ。その胸はレナスよりも大きい。

若干の嫉妬を覚えつつも、レナスはニーナの鍛えられた肉体を目にして驚いた。これみよがしな筋肉はついていないけれど、引き締まってしなやかな身体は無駄な肉などついていないかのようだ。

「……すごく鍛えてあるのね」

「ダンスって身体中の筋肉使うから」

レナスもダンスは習っているが、それは男性と組んで踊る舞踏会用のダンスだ。確かに体力は使うけれど、そこまで身体を鍛えなければいけないというものでもない。

一体、娼館で踊られるダンスというのはどういふものなのだろう。そしてニーナは、どのようにそれを踊るのだろう。

レナスはわくわくしながらニーナとミレイユの後について、店へと歩いて行った。

1、出会い(霧の季節) 4(前書き)

(注)この世界では十九歳が成人ですが、法律によりアルコールの摂取は九歳から許されています。

1、出会い（霧の季節） 4

時刻は真夜中に差し掛かるうとしていた。

厨房が最も忙しいのは開店前と開店直後の時間帯であり、それを過ぎれば少したが余裕が生まれる。

仕事が一段落ついたミヤオは、自分のために紅茶を入れることにした。

客に提供するものと同じ、最高級の茶葉をゆっくりと煎じ入れる。八チミツを入れてかき混ぜると、カップから立ち上る芳香をゆっくりと吸い込んだ。

ささやかで贅沢な楽しみをじっくり味わっていたミヤオの前に、先ほど出て行ったレナスが戻ってきた。顔が青ざめ、足取りはよろよろとしている。彼女はテーブルまで来ると、崩れるように椅子に座りこんだ。

どうやらこの娘にも紅茶が必要のようだ、とミヤオが紅茶の準備を始める。その背後で、信じられないといった顔つきのまま、レナスが声を絞り出すように呟いた。

「なんなのアレは……」

カップを置いてやったミヤオの眉がピクリと動いたが、彼女は何も言わずに黙っていた。

「アレは……あの娘の踊りは……」

「ニーナはダンスが得意なのよ」

すがりつくような顔で見上げるレナスに、ミヤオは微笑んだ。

「得意？ そんな問題じゃ……」

首を振って正面に向き直ったレナスは、自分の前に置かれた紅茶に気がついた。

「悪いけれど、紅茶よりも強いものをもらえるかしら」

アルコールの強さでショックを和らげようと言うのだろうか。

しかしミヤオがそれに答えるよりも先に、一人の娼婦が食堂に入

ってきた。

「お願いミヤオ。もう一度、唄をさらってくれないかしら。どうしても例の所が不安で……」

唄、という単語にレナスが反応する。

彼女が息を殺して聞き入っていることに気づかないまま、ミヤオは娼婦に唄を教えてやった。

ミヤオが最初に手本を見せて、音階と歌詞を教えると、娼婦がおおずと自分の声をミヤオの声に乗せて唄い出す。その情感たつぷりの唄いつぶりを見れば、ミヤオの教え方が上手いことが分かる。

やがて娼婦は自信を取り戻したのか、にっこり笑うと手を振って出て行った。ミヤオも微笑みながら振り向くと、驚きで目を丸くした少女の顔がこちらを見つめていた。

「まさか、まさか貴女……ミヤオ・ロックウエル……？」

懐かしい呼び名に、思わず目を閉じて感慨にふけるミヤオ。

ロックウエル。最後にその名で呼ばれたのは、いつのことだったろう。

「懐かしい名前だね。それにしても、私がそう呼ばれていたのはずっと前の話よ。あんたみたいな若い娘がよく知ってたね」

再びテーブルについたミヤオを、信じられないという目で見つめ続けるレナス。

言葉を失ってしまったような少女を前に、照れくさそうな笑みを浮かべていたミヤオだったが、次の瞬間、あまりにも意外な一言がレナスの口から飛び出し、思わず目が点になってしまった。

「弟子にして下さいっ……！」

「……は？」

テーブルに両手をつき、額をこすりつけんばかりに頭を下げるレナス。

「え……と？」

「私、唄い手になりたいんです！」

勢い良く身体を起こしたレナスが、ミヤオの両手を握りしめた。

「唄い手に？ 貴族のあんたが？」

「ええ！ そのために唄のレッスンは受けています。でも、貴女に……伝説の歌姫に指導していただければ……」

必死に訴えるレナスの喉が詰まった。

ミヤオは目の前の少女の、大きな瞳を静かに見下ろした。そこに浮かんでいるのは期待と懇願。けれど、その奥には確かに真剣な光があった。

目を伏せ、考え込むミヤオ。

「……いいわ」

やがて彼女が口にした返事に、ぱつと笑顔になったレナスを「ただし」と押しとどめた。

「ニーナと友達になってやってちょうだい。それが条件」

「はい！」

勢い良くレナスが頷いた、ちょうどその時。

レイチエルが厨房に入ってきた。よほど急いで来たのか、息が上がっている。

「おやレイチエル」

「あらレイチエル。こんばんは」

レイチエルは戸口で立ち止まり、手を取り合ったミヤオとレナスを、不可解なものでも見るような目で凝視しながら、呼吸が整うまで待った。

「こんばんは、ミヤオ、レナス様」

テーブルに近づいたレイチエルがにつこりと微笑み、ため息交じりに言った。

「レナス様。まさか本当にいらっしやるとは思いませんでしたわ」

「あら。貴女がいつでもどうぞ、って言ったのよ？」

無邪気にこちらを見上げて言うレナスを、無言で見つめ返すレイチエル。

「レナス様、お家の方が心配されますわ。お送りいたしますから、

帰りましょう。このような店は、公女様が来るのに相応しい場所ではありません。もう来られない方がよろしいかと」

身を屈め、顔だけは笑顔のまま真剣な声で言ったレイチエルを、レナスは可愛らしい声で「あらダメよ」と遮った。

「だって私、師匠に会いに来なければならぬもの」

「師匠……？」

眉を寄せたレイチエルの隣で、ミヤオが「そうだねえ」と笑った。

「ミヤオ？」

「レナスに唄を教えてあげることになったのさ」

「レナスに過去を話したの?!」

驚きのあまりレイチエルは、レナスの名前を呼び捨てにしてしまった。だがミヤオも、当のレナスもそれを気にした様子はない。

「私は何も言っていないよ。レナスが自分で気づいたのさ」

「この道を志す者なら、知っていて当然よ。ロックウエルの称号を得た唄姫の中でも、伝説の存在ですもの。あの唄声、ミヤオという名前。そしてオレンジ色の髪」

「今は白髪交じりだけだね」

恍惚の表情を浮かべるレナスに、苦笑を浮かべるミヤオ。

「これでミヤオ・ロックウエルの名前が出てこないはずが無いでしょう」

びしっと人に指を突きつけるという、およそ貴族の令嬢らしくない振る舞いをしたレナスを、呆然として見つめるレイチエル。

「レイチエル。この娘を侮ってはいけないよ」

ミヤオがゆつくりと、諭すように言った。

「でも、ミヤオ……」

「頭の良い娘だよ。大丈夫。ニーナの良い友達になってくれる」

不安そうな顔で振り返るレイチエルと、その肩を軽く叩くミヤオ。それはまるで母親が娘を宥めているような光景だった。

事実、レイチエルにとってミヤオは単なる雇人では無い。血の繋がりは無くとも、母であり姉であり、良き友として大切な存在であ

った。

その彼女に「大丈夫だ」と諭されれば………不承不承と言った顔で頷くしか無かった。

「と、言うわけでレナス」

振り向いたミヤオの顔を、期待に満ちた目で見つめる少女。

「その紅茶を飲んじやいなさい。紅茶は喉に良いのよ。ハチミツもね」

レナスは自分のカップを引っ掴むと、中身を一気に飲み干した。幸い、淹れてから時間が経っていたおかげで火傷することは無かった。

カップをテーブルに置き「次は？」という顔で見上げているレナスを、レイチエルは呆れた顔で見下ろした。

「そうだね。……ニーナのように毎日、腹筋を鍛えるんだね。喉と腹筋を鍛えなければ良い唄い手にはなれないよ」

「わかりました！」

嬉々としてレナスが返事をした時、普段着に戻ったニーナが厨房に入ってきた。

その姿を認め、駆け寄るレナス。彼女はニーナの手を取ると、嬉しそうにクルクルと回り出した。

「聞いてニーナ！ 私、貴女と一緒に身体を鍛えることになったの」「え？」

「それにね、ミヤオの弟子にもらったのよ！」

「は？」

「これから毎日でもここに来るからね！」

「……はあ」

そろそろ目が回りそうになってきたニーナは、そこに訳の分からないことを矢継ぎ早に言われて混乱していた。だが、戸惑った顔でミヤオとレイチエルを見れば、二人とも微笑んでこちらを見ている。何だか分からないけれど、二人が納得済みならば、そういうことなんだろう。

他人に対して驚くほど淡泊なニーナは、深く考えることをやめて、あっさりとその事態を受け入れた。

その後、今日はもう遅いからとレナスは家に帰されることになった。彼女を裏口まで送って行ったミヤオは、ニーナが聞いていない時を見計らってレナスの耳元に囁いた。

「ニーナをよろしくね、レナス。あの娘は……自分の心に鈍感なんだよ。自分が思っている以上に傷ついたり疲れていることに気づけないの。支えてやってくれるかい？」

目を瞞ったレナスは、しっかりと頷いた。

「前から妹が欲しいと思っていたんです」

師と弟子は、にっこりと笑い合った。

1、出会い(霧の季節) 4(後書き)

f i n .

1、ニーナの変化

パタンと小さな音を立てて閉まるドア。

その向こうに消えた少女の姿が見えるわけではない。けれど遠ざかる彼女の足音が完全に消え去るまで、アキはじつと扉を見つめていた。

やがて彼は苛立たしげに首を振ると、椅子を軋ませながら立ち上がった。

いつもと同じ、いつもの習慣。

なのに、この頭の片隅に引つかかる違和感は何なのだろう。

アキは戸棚からワインのボトルを取り出すと、並々とグラスを満たし一気に喉に流し込んだ。飲み終えたグラスを持って余すかのよう
に手の中で回しながら、違和感の正体に意識を集中する。

毎週金曜日の放課後。それがニーナに魔力を注入する日と決めていた。

使い魔の契約が無効となってしまった彼女にそんなことをする必要は無い。しかし未だ契約が継続中だと信じているニーナを騙し続け、手元に置いておくためにはパフォーマンズが必要だ。

だからこそアキはこうした習慣を作り、魔力を注入するフリを続けている。ニーナの方も、毎週きちんと通ってきている。通ってきているのだが……。

戯れに魔法で手の中のグラスを粉碎する。砂粒ほどの大きさにまで破片を細かくすると、指の間から零れ落ちたそれは毛足の長い絨毯に吸い込まれていった。

アキがニーナとの密会に選んだ場所。それは教授棟にあるアキの研究室だった。

あの花祭りの一件以来、ニーナは以前にも増して学園内で目立つ存在となってしまうた。彼女を熱烈に支持するファンたちが出来たかと思えば、身分の低い彼女が持ち上げられるのを快く思わない一

派も居て、どこに居ても好奇と敵意の視線にさらされる。

以前であればニーナの行動に無関心を装っていた生徒たちも、今やあからさまに彼女の一举一動に目を光らせていた。

この事態で持ち上がった問題が、どこでニーナに魔力を注入するかということだった。

アキもニーナも他人の目を気にするようなタイプでは無いが、教授と生徒が頻繁に逢瀬を重ねていると噂が立つのは、面倒なことになりそうだと意見が一致した。

特に最近のニーナの様子は……と眉を潜めたアキは、手の中に魔力を集中する。一瞬後には、破壊される前の姿でグラスが再生されていた。

つまらなそうな顔でそれを光にかざすアキ。

ニーナと会う場所を決めるのは簡単だった。教授たちには個別に研究室が与えられる。一階にある職員室には大勢の生徒たちが出入りするため、ニーナが教授棟に入っていく姿を見られても不審に思われることは無いだろう。

この建物には生徒の知らないひよっとしたら教授たちも知らないような秘密の抜け道がいくつもあり、アキは学園にやって来た日に、その全てを見つけていた。

教授棟に入ったニーナは、人の目が無くなるタイミングを見計らって抜け道の一つに入り込む。出口を抜ければ、アキの研究室は目と鼻の先だ。彼の力によって守備力が強化された部屋の中に入ってしまえば、中で何が起ころうと誰も気づかない。

そつとドアを開けて入り込んでくるニーナの姿を思い出し、アキは再び椅子に身を沈めた。

一体いつからだ？ ここに来てもニーナが口を利かなくなったのは。

彼女はいつも無言でやって来て、無言で帰っていく。おずおずと、まるで怯えたような様子でアキに近づいてくるくせに、アキが広げた腕の中に抱え込まれるとギョっとしがみついてくる。

拳を唇に当ててアキは考えを巡らせた。

魔力を注入するという建前でアキが唇を重ねると、ニーナは抗うことなく受け入れる。

嫌がりはしないものの、腕の中の身体は固くこわばったままだ。

薄目を開けて伺ってみれば、ニーナの瞳は固く閉じられ、その眉はぎゅっとしかめられている。だからアキは唇を重ねるだけに留めて、己の舌を差し入れることまではしない。

恐らくニーナは己の立場を頭では理解していても、精神と身体がそれについていけないのだろうと思っていた。

ならば、何だというのだ。唇を離れた後の、あの^{すが}縋りつくような目は。

苛々とアキは髪をかきむしった。

キスの後で彼が身体を離すと、アキを見上げるニーナの瞳が一瞬だけ揺れる。

飢えにも似た、その懇願するような瞳にアキはいつも戸惑う。だがニーナはそんな想いを隠すかのように、すぐ下を向いてしまっただ。

そんなに嫌ならキスは辞めるか？

アキの問いに、ニーナはいいやいやと力なく頭を振った。

そのまま数秒間、無言のまま立ち尽くすニーナは、やがて踵を返して部屋から出ていく。

毎週その繰り返しだった。

何だと言っんだ、一体。

最近になって変化したニーナの態度。それが自分の感じた違和感の正体だった。だが彼を不愉快にさせるのは、彼女の変化の原因を自分が知らないせいだと思いだたる。

使い魔ではないが、アキにとってニーナは自分の手駒の一つ。自分分はニーナの全てを把握しておく必要がある。

自分以外の何者かが、ニーナに強い影響を与えたのだ。

そこまで考えたときアキは、己の身の内に憎悪にも似た感情が沸

き上がるのを感じた。

誰だ？ そんなことをしたのは。

教授や生徒など学園中の関係者を思い浮かべたが、どれもピンと来ない。とすれば外部の人間か……そう言えば、いつだったかレナスが、ニーナはレンを慕っていると言っていたな。

もう一つ、あることに気がついてアキは眉をしかめた。ここしばらく、レナスの姿も見えていない。

彼女は音楽クラブに所属しているし、花祭り以降はすっかりアキに打ち解けて、毎日のように職員室に顔を見せていたというのに。

ニーナの変化に気を取られて、レナスのことに気づけなかった自分に舌打ちをした。

この俺としたことが、これほどまでに注意力が鈍っていたとは……！

しかしこれで確信した。何かが起こっているのは間違いない。ニーナにも、レナスにも。

どちらの原因から追究するか、と考えたアキは、瞬時にニーナを選んだ。

何といってもあいつは俺の切り札だ。それに、ニーナの側にはいつもレナスが現れる。

「……ウィッチグラスに行ってみるか」
冷たい目で宙を見据えながら、アキはポツリと呟いた。

教授棟から出たニーナは、とぼとぼと歩きながらため息をついた。自分の感情を制御することが出来ない。いくらでも理屈を考え出して、頭を納得させることは出来るのに。何回自分を納得させてもほんの少しの感情の揺らぎはあつという間にそれを打ち消してしまう。

理屈だけでは抑え込めない感情があるということ、ニーナは初めて知った。その初めての経験に狼狽え、自己嫌悪に陥っていた。

そんな自分を他人に知られるのが嫌で、表面上は今まで通りに学

園生活を送っていた。けれどアキの前では内面を隠し通す自信が無かった。だから彼の前では極力、口を利かないようにした。うっかり妙なことを口走ってしまわないように。

でも……と思う。恐らくアキは何かがおかしいと勘付いてきているだろう。キスした後の一瞬、交じり合う二人の視線。例の探るような彼の視線が自分の胸の奥に入り込んでくる。

言いたくない。いや、言えない。だって自分でも良く分からない。この感情。

これから家に帰って待ち受けているものを思うと、胸が締め付けられるように痛くなる。でも帰らないわけにはいかない。今夜はレナスがやってくる。彼女に会うのは久しぶりだ。何だか大切な話があると言っていた。

ニーナは決心したように顔を上げた。

もしかしたらレナスの話を聞いた後で、自分の相談にも乗ってもらえるかもしれない。ああ、でも言えるだろうか。こんな恥ずかしい自分をレナスの目の前にさらすことなど……できるのだろうか。

2、レンの変化

「婚約した？ 誰が？」

「……この話の流れで、私以外の誰が居るのよ」

物憂げに髪をかきあげながら、レナスがどこか疲れたような顔で言った。

「誰と」

「ビルフレッド・ヘザー・レイ。レイ家の三男」

投げやりな調子で返ってきた言葉に、ニーナは頭の中でレイチエ
ルから聞いた貴族の系譜を整理した。

レイ家と言えば八選家はちせんけに名前を連ねる名門であり、確か王族の血
の流れも汲んでいるはずだ。現当主は公爵、侯爵、男爵の三つの爵
位を有しており、三人の息子にそれぞれを与える予定だと聞いている。
その三男であれば、次期男爵ということだ。

「なんで婚約したの」

「私の意志じゃないわよ」

あくまで淡々と話すレナスとは対照的に、ニーナは黙って考え込
んでしまう。

貴族の婚姻というのはほとんどの場合、本人の意思とは関係なく
決まる。それはニーナも知っていた。だが実際に親友の身にそんな
事態が起こってみると、何と言ってもいいものか分からなかった。明
らかにレナスが憂鬱そうな様子をしているので尚更だ。

なんとなく黙りこんでしまったニーナとレナスは、二人同時に視
線を落とし、そろって絶叫を上げると、その場から飛びのい
た。

床から人間の顔半分が生えていた。サラリとした銀髪に、眼鏡を
かけた金色の瞳……。

「アキ！」

音もなくアキの身体が上昇し、やがて全身が床の上に現れた。

「気味の悪い真似はしないで下さい！」

半ば八つ当たり気味にレナスがアキに詰め寄る。

ニーナもレナス同様、死ぬほど驚いたショックで心臓が激しい動機を刻んでいたが、自分以上に取り乱している人間　レナスを間近に見たせいで、間もなく冷静さを取り戻した。

「良かったな。時空を歪める術は、滅多に見ることの叶わない第一級魔法だ」

「しゃあしゃあと言い放つアキに憤慨するレナスを抑え、ニーナが「心臓に悪いからやめて」と低い声で呟いた。

「……アキ教授、まさか時々こうやってニーナのこと覗いてないでしょうね」

「使い魔の全てを把握しておくのは主あるじの義務だろう。隅々まで、な」レナスの問いに、ニヤリと意味深な笑みを浮かべるアキ。

「ニーナ！　今すぐうちに引越して来なさい！」

ニーナの肩を掴んで強く揺さぶるレナス。
頼むからレナスを刺激しないで欲しい。

ガクガクと前後に揺さぶられながら、ニーナはアキを睨みつけた。相変わらず人の悪い笑みを浮かべて二人の様子を見ていたアキが、ふと怪訝な表情で周囲を見回した。

「……どうかした？」

「いや。俺が魔法を使って現れた上に、お前たちが悲鳴を上げただろう？　以前のようにレンが来るかと思っただが……来ないな」

アキの言葉に、さっとニーナの顔が無表情になった。他人を寄せ付けない、近寄り難くよそよそしい雰囲気は、学園で孤立している時のものと同じだった。

「レンなら来ない」

「それで用心棒が務まるのか？」

「……今は店の方に出てる」

「店に？　珍しいわね」

レナスが驚きの声を上げると同時に、階下から騒がしい物音が

聞こえてきた。この店の雰囲気には似つかわしくない、甲高い罵り声も響いてくる。

ニーナは険しい表情を浮かべると、身を翻して出て行った。残されたアキとレナスは顔を見合わせ、その後を追いかける。

ヒステリックな叫び声と、陶器の碎ける音。高価な食器類が壁に叩きつけられ、飛び散った破片が危うい所でニーナの顔を掠めていった。

咄嗟にニーナの身体を引き寄せたアキは、凍てつくほどに冷ややかな視線でティーカップを投げつけた娼婦を睨みつける。

腕の中に居るニーナはもちろんのこと、アキの背後に続いていたレナスにも見ることは出来なかったが、その瞳の中には激しい怒りが渦巻いていた。

「誰だあれは」

アキの視線の先に居る娼婦を見て、レナスも眉を潜めた。

歳は三十始めというところだろうか。身体つきも顔立ちも悪くないと思うのだが、ピンク色の髪はボサボサで、焦点の合わない瞳で周囲を睨みつけていた。足取りもおぼつかず、相当酒を飲んでいようだ。

この高級娼館には相応しくない娼婦の姿であった。そして開店前とは言え、この店でこのような醜態が許されるはずが無い。

「オリビア。新入りなんだけど、問題があつて」

醒めた目でオリビアを見据えながら、ニーナが小声で説明した。

「元は銀行家の愛人だったんだけど、お払い箱にされてウチに押しつけられたの。でも本人は昔の栄華が忘れられずに、いつまでも現実を受け入れようとしなから……ああやって酒を飲んで暴れるわけ」

オリビアを囲むようにして他の娼婦たちが立っているのだが、皆、怖がって近づけないようだった。

「レンは？ こういう時こそ用心棒の出番じゃないの」

レナスが疑問を口にする、ニーナはきっぱりと首を振った。

「ダメなの。これは女たちの問題だから、自分たちで解決しないと。……でも今日はレイチェルもミレイユも留守だし……どうしよう」
歯がゆい思いをしながらニーナは悩んでいた。

何とかしなければと思うのだが、姉さんたちを差し置いて若輩者の自分が出て行くななんて、そんな差し出がましいことは出来ない。しかしレナスやアキの魔法に頼るというのも問題外だ。これは娼婦の問題なのだから、娼婦の手によって治めなければならない。

そうしてニーナが悩んでいる間にも、オリビアの叫びはエスカレートしていった。

「なによアンタたち！ なに見てるのよ。アタシを誰だと思ってるの？ あのグランジ銀行の頭取に愛された女よ！ アンタたちとは格が違うんだから。アタシが望めばねえ、叶わないことなんて無かったのよ。何でも自分の思い通りにできた。知らないでしょう？

そんな上流階級の暮らしなんて。本当に上質で優雅な生活なんて、アンタたちに分かるわけが無いでしょ！」

呂律の回らない声で、娼婦たちを嘲るオリビア。それは完全に酔っ払いの戯言で、ニーナの隣ではレナスが呆れたように鼻を鳴らしていた。

だが娼婦たちの中には、オリビアの言葉に気分を害した者も居たようだ。

悪化していく事態に、思わずニーナが口を開こうとした時。目の前をさつと影が横切った。

「その程度で上流を名乗らないでちょうだい」

凜とした声が、静まり返った店内に響いた。

まだ年若い、少女と言って良いぐらいの娼婦がオリビアの前に立ち塞がり、じつと彼女を見下ろしている。小柄な身体に似合わない不思議な威圧感に、オリビアがたじろいだ。

「……な、なによ」

「本当の上流階級の女が、どんな立場に居るか知らないでしょう？ 一日中、絹のクッションに座ってじつとしてるだけ。身の回り

のことは全て使用人が世話を焼いてくれる。

……だけどね。人の上に立つ人間は決して自分の我を通したり、自由に物を言うことは許されない。厳しく己を律することが生まれながらの義務。上流に行けば行くほどね。

言つては悪いけれど、好きなように面白おかしく暮らしてきた貴女のそれは、中流の生活でしかないわ」

娼婦の言葉には、不思議な説得力があった。まるで彼女が身を持つて実感してきたことを語っているように。

その態度と物腰は、かつて彼女が自分の言う「上流階級」に属していたことが容易に想像できるほど、堂々としたものだった。

恐らく、オリビアもそのことを察したのであろう。彼女は苦々しげに口を歪めると「アンタが昔はどれだけの階級だったか知らないけど、今じゃただの娼婦じゃない」と吐き捨てた。

「そつよ」
けれど少女は眉一つ動かすことも無く、オリビアの言葉を肯定した。

「今はただの娼婦よ。私も貴女も……ね。お互いに、用済みになつて捨てられた身であることに変わりはないわ」

少女の言葉に現実を突きつけられ、みるみるオリビアの目が見開かれていったかと思うと 彼女は床に崩れ落ちて気を失った。

慌てて他の娼婦たちがオリビアの身体を運び出そうと動き出す。

後片付けをしながらも彼女たちの熱っぽい賞賛の視線が、少女に注がれていた。

揉め事を解決した年若い娼婦はしばらくその場に立ちすくんでいたが、ため息をついて視線を落とすと階段に向かって歩き出した。

さつと彼女に駆け寄り、その身体を支えたのは、レン。恐らくどこかで今の事態を見守っていたのだらう。彼はニーナたちに気づくことなく、そのまま娼婦と一緒に階上へと消えた。

「……あの女性も新入り。エミレア・ランカード」

彼らの後姿を見送ったまま、ニーナが誰にともなく呟いた。

いつものレンらしからぬ行動。それがあの娼婦、エミリアの存在によるものであることは明らかであった。

そしてそれがニーナにも影響を与えていることを、アキとレナスは気がついていた。

3、ビルフレッド登場

レナスは落ち込んでいた。自分の婚約で忙しかったとは言え、二ーナが恋愛上の悩みを抱えていることに気づけなかったのである。昨夜のレンとエミリアの姿を見れば、レンが彼女に強い関心を抱いていることは間違いない。そして二ーナが酷くシヨックを受けていることも。

彼らを見送った時の二ーナの顔は、奇妙なほどに無表情だった。それを思い出し、頭を抱えたくなるレナス。無表情だからこそ、彼女の痛々しいほどの悩みが分かってしまった。

「レナス、何をボサツとしている。前に出てやりなさい」
険悪な目つきで自分に命令した声の主を睨みつけると、舌打ちしたい気分を抑えてレナスは前に進み出た。

クラスの全員が見守る中、彼女が優雅に腕を動かす。シンと静まり返る一同。一拍後には地面が震動し、土で出来た砦が出現した。「うむ、完璧だ。皆も見習うように」

土魔法の教授の慇懃な賞賛も、クラスメイトたちの感嘆の拍手も、レナスにとってはどうでも良いことだった。再び腕を振って砦を地面に戻すと、軽く一礼してその場を離れる。

そもそもこんな魔法が上手くできたところで、唄い手になるといふレナスの目標には何の役にも立たなかった。この土魔法の選抜クラスは、主に軍隊への入隊や土木作業員を目指す者のための授業だったからである。

十六歳を迎えると、生徒たちは通常のクラスのほかに、選抜クラスを受講することになる。将来の夢にそって自分でクラスを選ぶことが出来るので、もちろんレナスは音楽のクラスを受講していた。

だがそれ以外に、教授側から選ばれる選抜クラスというものが存在する。生徒たちの成績や技能から、その生徒に向いている職業を学園が判断し、その職につくための必要技能を習得できるクラスに

振り分けるのである。

生徒たちは自分の夢を追うと同時に、適性のある他の職業についても学ぶことが出来る。たとえどちらかの道が上手くいかなくなっても、もう一方の道で生計を立てていくことが出来るというわけだ。しかしレナスはこのシステムによって、多大な迷惑を被っていた。彼女は選抜クラスの全てに出席しなければならなかったのである。

理由は簡単。教授の誰もが、圧倒的な才能を持つ彼女を手放したからなかったためだ。

張り切って授業に参加しているクラスメイトたちを、レナスは無関心に眺めていた。ここ最近、彼らが盛り上がっているのは、間近に控えた魔法技能格闘大会のせいだろう。

読んで字のごとく、生徒同士が魔法技能を駆使して格闘する大会である。軍隊への入隊を希望している生徒にとつて登龍門とも言うべき大会で、当日は大勢の王宮関係者が見学に来る。また大会の打ち合わせのために、学園にしばしば軍の関係者が訪れるため、運が良ければ彼らの目に留まる可能性があるのだ。

もしレナスが大会に参加すれば必ず上位に入賞するだろうが、当然のことながら彼女にそんな気は欠片も無かった。

けれど、いつものように授業を適当に流して過ごすつもりだったレナスは、目の前で一人の生徒に異変が生じ、そちらに意識を集中させた。

その生徒は苦しそうに自分の胸をかきむしりながら、地面にがつくりと膝をついた。白目を？いて口から泡をふくその様に、クラスメイトはもとより教授ですら呆気にとられて突っ立っている。しばらくすると彼は、ピタリと動きを止めてゆっくりと前に倒れこんだ。ようやく騒ぎ始めた周囲をよそに、レナスは落ち着き払った様子で彼に近寄ると、その身体を風魔法で空中に浮かべて言った。

「教授。私が医務室へ連れて行きますわ」

「あ、ああ。では頼む」

まだ混乱している教授は、反射的にレナスの申し出に頷いた。

堂々と授業をサボれる、という彼女の思惑など、知る由もない。

人のいない廊下を医務室に向かって歩いていたらレナスは、前方にアキの姿を発見した。

「アキ教授、こんにちは」

「……レナス。何だそれは」

振り返ったアキが、頭上に浮いている男子生徒の身体を胡散臭そうに見上げる。

「クラスメイトなんです。演習中に具合が悪くなったようで、医務室に連れて行くところですわ」

「それで、俺を呼び止めるためにコイツをぶつけてきたってわけか？」

乱れた髪を撫でつけながら、アキがレナスを睨みつけた。しかしレナスは輝くような微笑を浮かべると「死にはしませんわ」と男子生徒に目をやった。

「……俺の身体の心配は？」

「教授がこの程度でどうにかなるわけありませんでしょう？」

けろりと言い切るレナス。あくまで謝るつもりは無いらしい。と言うか、そもそも謝る必要性を感じていないようだ。

「お前、最近二ーナに似てきたな」

疲れた様子で呟いたアキは、さっと真面目な顔に戻ると気絶したままの男子生徒に目を戻した。

「レナス、ちよつとそいつを降ろせ」

小首を傾げながらもレナスが言われた通りにすると、アキが男子生徒の上にかがみ込む。そして、どこからともなく取り出した花びらを彼の口元に持って行った。

男子生徒の呼気に触れた花びらが、みるみる萎れていく。

「こいつもか」

アキはそういうと、今度は白いハンカチを取り出した。ハンカチはアキが一振りすると巨大化し、まるで意志を持っているかのようになり男子生徒の身体を包み込んだ。そのまま鳥の姿に変わり、窓から

外へと飛んでいく。

「どこへ運んだんですの？」

「ああいう奴らを収容するために作られた、特別室だ」

レナスが驚いた顔で振り向いた。

「奴ら？ 他にも薬物使用者が？」

アキが感心したように「冴えてるじゃないか、レナス」と答える。先ほどアキが取り出した花びらはトーピグという植物のもので、この花は世界で最も浄化された島にのみ生息する。浄化された土と水のみで育つせいから、トーピグの花には薬物や毒物に反応するという性質があった。

男子生徒の呼気に反応したということは、彼が何らかの薬物を使っていた可能性が高い。彼は気絶していたけれど心拍数や呼吸は正常だったから、毒を盛られたということでは無さそうだ。つまり薬物……麻薬か何かだろう。

アキがレナスの耳元に口を寄せて囁いた。

「実は最近、中毒症状で倒れる生徒が増えていてな。これで二十人ぐらいか。まだ教授の間でしか知られていない事実だが。……どうやら生徒に違法薬物を売りつけている奴が居るらしい」

さすがにレナスも真剣な顔で黙り込んでしまった。

「生徒の間でそういう噂は聞いていないか？」

「それが……」

アキに顔を覗き込まれたレナスが謝罪の言葉を口にしようとして彼の肩越しに見えた人影に、さっと顔色を変えた。

それに気づいたアキが振り返ると、一組の男女が近づいてくるどころだった。

女は金髪に緑色の瞳の、絶世の美女。男は黒に近い茶髪を短く刈り込み、がっしりとした身体に上質そうなマントを巻きつけていた。彫の深い顔には、額から右目を通して耳まで達する傷跡があったが、なかなか良い男ぶりだった。

その目に敵意さえ浮かんでいなければ。

「姫。そちらは？」

近寄ってきた男はレナスの前に立つと、挨拶も抜きに言った。

何気ない風を装っているが、威圧するような冷ややかな感情がアキへと向けられているのが分かる。

「アキ教授。私の音楽の教授よ。ビル、貴方こそなぜここへ？」

「私は魔法技能格闘大会の打ち合わせで……」

「レイチエルと一緒に？ 公務に愛妾が必要ですの？」

レナスも冷静に返そうとしているが、その目は怒りと苛立ちに燃えている。

二人の間に流れるとげとげしい雰囲気は余所に、アキとレイチエルは勝手に会話を交わしていた。

「貴方がアキ教授でいらつしやいますのね。ウィッチグラスのオーナー、レイチエルでございます。お目にかかれて光栄ですわ」

「貴女がレイチエルか。噂に違わず美しいな」

アキが差し出されたレイチエルの手を取ってキスをした。

「近頃はお店にお顔を出して下さらないようで残念ですわ」

「いや、どうやら俺はレンに嫌われたようだな」

「まああ。お客様として店に来て下さるだけで、ニーナに近づきさえしなれば、レンも文句は言いませんわよ」

口に手の甲を当てて笑うレイチエルと、穏やかに微笑むアキの間で火花が飛ぶ。

ふと気づくと、呆れたような顔でレナスがこちらを見つめていた。

「どうしたレナス」

アキが聞くと、ビルがその視線を遮るように、レナスの前に進み出た。

「お初にお目にかかる、アキ教授。私はビルフレッド・ヘザー・レイ。レナスの婚約者だ」

差し出された手には痛いほどの力が込められていた。

4、薬物事件

内密な話をしたい、とビルフレッドに言われたアキは三人を研究室へと連れてきた。

魔法でソファを取り出すと、レナスがつかつかと近づいてきて、アキの腕をとりそのまま一緒に座り込んだ。

テーブルを挟んだ反対側ではビルフレッドが何か言いたげな顔で立ちすくんでいるが、レナスはつんと顎を上げたまま視線を合わせようとしない。

一体どういうつもりかとアキもレナスを見るが、彼女は素知らぬふりを続けていた。

ようやくビルフレッドが腰を下ろし、少し離れたところにレイチエルが腰かけた。

「実はアキ殿に頼みがある」
重々しい口調でビルフレッドが話し出した。その目には隠しきれない嫉妬の炎が見え隠れしている。

若いな、と思いつつアキは「頼み？」と聞き返した。

「私は現在、正剣隊長の任にある」

正剣隊とは王都の治安を維持するための部隊である。隊員は常に街を巡回し、至る所に詰所を構えている。市民にとって最も親しみやすい軍人と言ったところだろうか。

見たところビルフレッドは二十代前半と言ったところ。この若さで隊長を務めているというのは、よほど家柄が良いのか本人の腕が立つのか、あるいはその両方か。

さりげなく彼の魔力の波動を読んだアキは、決して名ばかりの隊長というわけではなさそうだと読み取った。

ビルフレッドは「くれぐれもこの件は内密に頼む」と念押しをしておいてから話し始めた。

近頃、正剣隊の取り締まった事件の中で、薬物使用者によるもの

の割合が増加しているのだという。

「それで、中毒者が使用した薬物についてレイチエル殿に調べてもらったのだ」

ビルフレッドの説明に、レンが片眉を上げてレイチエルを見ると、彼女は優雅に微笑んだ。

「レイチエル殿は薬草についての知識が豊富で、王宮の薬師ですら敵わぬほどだ。今回の事件では、特殊な麻薬が使われていたために普通の検査官では薬物を特定できなかったのだ」

それでレイチエルの力を借りた……というようなことを説明しながら、ビルフレッドがチラリとレナスの顔色を伺う。

彼女は相変わらずそっぽを向いていたが、腕を掴まれていたアキには、その身体から少し力が抜けたのが分かった。

それまでずっと黙って座っていたレイチエルが静かに口を開く。

「彼らが使った薬物なのですが、恐らくターマの粉末です」

「ほう」

急にアキの態度がガラリと変わった。先ほどまでは話半分に聞き流していたのに。

はつきり言ってアキにとって、人間界での騒動など関係ない。そんな煩わしいことに巻き込まれたくないし、力を貸してやる義理も無い。

しかし今や彼は、興味深そうに金色の瞳を細めて話の続きを待っていた。

「ご存じでいらつしやいますわよね？」

「ああ。闇世界でしか取れない貴重な麻薬だ。たとえあちらの世界の人間であっても手に入れることは難しい上に、人間界への流通は禁止されている」

ビルフレッドが「その通り」と頷いた。

「麻薬を売っている黒幕は、どうやら闇世界とも違法取引をしているらしい」

闇世界とも取引が出来るほどの権力と資本がある人間が犯人、と

いうことであれば調査は慎重に行わなければならない。しかしあまりにも手がかりが少なすぎる。

困っていた所に、この学園で起こっている麻薬中毒事件について学園長より密かに調査を依頼されたのだ。

先ほど学園内をビルフレッドとレイチエルが歩いていたのは、格闘大会の打ち合わせという表向き理由とは別に、薬物中毒で倒れた生徒たちの診断のためだったのだ。

「間違いなく、彼らもターマを使っています」
レイチエルが頷いた。

時期も内容も市中の事件と一致する。ビルフレッドはこれらの事件を同一犯によるものと確信した。

「なるほどな。それで俺に頼みとは？」

話の合間にレナスが淹れた茶を飲み、アキが尋ねる。

「我々が捕まえた麻薬中毒者たちは、まともな証言ができるような状態では無い。しかし彼らの話の中で、麻薬を売ってくれたのが若い男だった、という点は共通している。よく居るようなチンピラタイプでは無く、それなりに階級の高そうな人間だったらしい。そして……その男のマンントの影から、この学園のエンブレムが見えたという証言があったのだ」

「つまり、この学園の生徒が犯人だと？」

沈黙がビルフレッドの答えだった。

確かに倒れた生徒たちも、同じ学園の生徒からなら麻薬を手に入れやすかったことだろう。

「……話は分かったが、なぜ俺に協力を？」

「姫から常々貴殿の話は何っていた。アキ殿は闇世界について詳しいと言っし」

「詳しい、ね……」。

微妙に顔をしかめるアキをよそに、ビルフレッドの熱弁は続く。

「この学園で一番信用できる教授だとまで言っていた。ならば婚約者である私が信頼しない道理はあるまい？」

アキが横目でレナスを睨むと、彼女はこちらに背を向けて書棚を見上げていた。

さも本の背表紙を読んでいるような恰好をしているが、その形良い耳は真つ赤に染まっている。

しかしビルフレッドという男。よくも大真面目な顔で気恥ずかしい台詞を堂々と言えるものだ。

アキはため息をついて思考を巡らせた。確かに、事件に興味はある。ターマの粉末を横流ししている闇世界の犯人が誰か、ということに対してだが。

まあ、それを調べるついでに手を貸してやっても良い。

ソファに座りなおしたアキが協力を承諾すると、ビルフレッドは片手を差し出した。それは先ほどの握手とは違う、彼の友好の意志が込められたものだった。

「それから姫。危険だからこの件には関わらないように」

ビルフレッドに釘を刺され、レナスが肩をすくめた。

「関わらせたくないのなら、聞かせない方が良かったのでは？」

「夫婦の間に隠し事があってはいけない」

アキの問いにビルフレッドはきっぱりと即答した。

けれどアキが見たところ、レナスはすでに、この件に首を突っ込む気であるようだ。そこにはレイチェルへの対抗心も混ざっているように思える。

レイチェル　　そうだ、彼女にあのことを話しておかなければ。

ビルフレッドと共に部屋を出ようとした彼女をアキは呼び止めた。他の二人を部屋の外に押し出し、レイチェルと二人きりで向かい合う。

「なんでしょっつ？」

「レイチェル。最近ウィッチグラスに顔を出しているか？」

アキの問いにレイチェルが不思議そうな顔をした。

「ビルフレッド様のお手伝いが忙しくて顔は出しておりませんけれ

ど、ミレイユから業務連絡は受け取っております」

「では、新入りのことは聞いていますか」

やっと納得いったという顔でレイチエルが微笑んだ。

「オリビアのことですね。お得意さんから頼まれたのですが……困った娘ですわ。いずれ他の店に移そうと考えておりますの」

「そっちじゃない。エミレアという女の方だ」

アキの言葉に、レイチエルは眉を潜めた。

「どうやらレンがエミレアに惚れているようだ。そのせいで最近のニーナは情緒不安定になっている。ただ気になるのが、どうもレンの惚れ方が普通じゃないような気がしてな」

レイチエルの顔がさっと蒼褪めた。

「そんなレンが……まさか！」

何かに気づいたようにレイチエルは目を見開いて息を飲んだ。しかしすぐさま何事も無かったかのように笑顔を取り繕ったのは、さすがと言つべきだろう。

「ありがとうございます、アキ様。今日にでも店に顔を出してみますわ」

「ああ。……それと、覚えておいてくれ。俺は何があるかと、ニーナを守り通す」

その言葉にレイチエルは、じつとアキの目を見つめ返した。

「……貴方を信じますわ。アキ様。レンが今聞いたような状態にあるならば、あの娘を守るのはアキ様だけだと思います。どうか、ニーナをよろしく願いましたます」

レイチエルは深々と頭を下げた。

5、ニーナの失恋

ニーナが帰宅すると、裏庭の方から人の声が聞こえてくるのに気がついた。

言い争うような声の調子がかかり、建物の角からそっと窺^{うかが}ってみれば、レンに詰め寄るレイチエルの姿があった。

こんな時間にレイチエルがこの場所に居ることに加え、普段の彼女からは考えられないほど取り乱したその様子に、ニーナは目を丸くする。

「頭を冷やしなさい、レン」

「それはお前のことだろう」

放っておいてくれと言わんばかりのレンの返事に、レイチエルが一步前に踏み出す。固く握られた拳が震えていた。

張りつめた緊張感に、知らずニーナの身体も固くなる。

だがレイチエルはグツと詰めていた息をゆっくり吐き出すと、震える声でポツリと呟いた。

「……レン。エミレアは、リディアじゃないわ」

レンの顔に、頬を殴られた子供のような表情が浮かんだ。

「な、にを……」

「貴方はあの娘とリディアを重ね合わせているだけよ。違う？」

「……そんなことは、無い」

レンの否定はしかし、とても弱々しかった。

その狼狽ぶりを見れば、レン自身も己の言葉に確信を持ってないでいることが容易く想像できる。

リディア。自分の知らない名だ。けれどその女は、レンの中で大きな意味を持っているのだろう。彼にあれほどの動揺を与えるのだから。

ちりつとした嫉妬を感じながら、ニーナは二人のやり取りから目を離すことが出来なかった。

「驚いたわ、あの娘の顔。……生き写しと言って良いほどなんですもの」

視線を伏せ、落ち着かなく両手を揉み合わせるレイチエル。思わずその肩に手を伸ばしかけたレンだったが、顔を上げたレイチエルにまっすぐ見つめられて動きを止めた。

「とにかく貴方がエミリアに構うほど、ニーナを傷つけていることを覚えていて」

「ニーナ？ ニーナは関係ないだろう」
関係ない。

その言葉は鋭くニーナの胸に突き刺さった。あまりの激痛に呼吸すら止まる。

胸を押さえて身体を丸めたニーナは、目を閉じて、喉の奥からせり上がってくる空気の塊を必死で飲み下そうとした。

ぶるぶる震えながら、気持ちを落ち着かせるために細く長く息を吐き出す。

やがてゆっくりと開いた彼女の目には、うつすらと涙が浮かんでいた。

「……本当に気づいてないの？」

レイチエルが呆れたような、悲しんでいるような顔で言う。やめて、というニーナの祈りは届かない。

「これは俺の問題だろう。なぜニーナに関係があるんだ」

ニーナはふらつく足で後ずさりをする、身を翻して駆け出した。これ以上、聞いていられなかった。聞くのが恐かった。

考えることを拒否し、ただ走り続けるニーナの脳裏に浮かんだのは、レナスの顔。

彼女は藁にもすがるような気持ちで、レナスに会いに行こうと決めた。この時間ならまだ、クラブ活動をしているはずだ。

学園に駆け戻ったニーナは、門のところまでピタリと足を止めた。

柱にもたれかかるようにして男が一人、立っている。その男の体軀も、側に控えている馬車も巨大で、圧倒されてしまう。

男の彫が深い顔が、斜めに走る傷のせいで凄みを増していた。彼はじつと自分を見つめている少女に気づくと、片眉を上げて「何か用か？」と聞いた。

ニーナは慌てて首を左右に振り、男とは反対側の柱の前に立った。思わぬ先客に驚いたものの、そこでレナスが出てくるまで待つつもりだったのである。

足元の地面を見つめてレナスにどう説明するかを考えていると、先ほどのレンの台詞が思い出され、またしても涙が滲み出た。

指の背で拭うだけでは間に合わず、涙は後から後から零れ落ちてくる。何度もこすられた頬に、涙がヒリヒリと染みた。

鼻をすんすん言わせながら必死で涙を拭っている、頭上から突然、「寒くはないか？」という声が降ってきた。

ビククリして見上げると、先ほどの男がすぐ隣に立って彼女を見下ろしていた。

確かに今日は初夏にしては霧が濃くて涼しい日だけでも、寒いほどではない。

ニーナが無言で首を振ると、男は「そうか」と言っただけ。そのまま自然な調子で手を伸ばし、濡れて頬に貼りついた彼女の黒髪を、親指の腹で払う。

それはとても優しい手つきだった。こちらに向けられた目に浮かぶのは、慈愛の光。

戸惑い、されるがままになっていたニーナは、ふと袖から覗く彼のカフスポタンに目を留めた。

正剣隊の徽章……？ なぜ学園に正剣隊が？

彼女の表情を不思議に思ったのか、男がニーナの視線の先に目をやって「ああ」と納得したような顔をする。

だが男が口を開くよりも先に、良く通る声はその場に響き渡った。「ビル？ 貴方ニーナに何をしているの？」

二人がそちらを振り向くと、腰に手を当てたレナスがこちらを睨みつけていた。彼女は男の答えを待つまでもなく、ニーナの下へと

駆け寄ってくる。

「ニーナ、大丈夫？ 何も痛いことされなかった？」

心配そうに覗き込んでくるレナスに、ニーナは赤面しながら「大丈夫」と小声で答えた。

「姫。俺がこのような少女に乱暴な真似をするとと思うか？」

「貴方は普通の人より力が強いのだよ。力加減が分からなくてニーナに怪我をさせたらどうするつもり?!」

いささか過保護なレナスの台詞に、居心地悪そうに視線を逸らしたニーナは、今更ながらある事実気がついた。

「ビルって……」

ニーナの呟きに、レナスが「あら」と振り返る。

「そう言えば、紹介がまだだったわね。ビル、こちらがニーナ。ニーナ、私の婚約者のビルフレッドよ」

この男が。

ビルフレッドが胸に手を当て敬礼し、「ビルフレッド・ヘザー・レイだ。ニーナ殿のことは、かねてより姫から聞いている」と挨拶をした。

ニーナはぎこちなく会釈しながらも、マジマジと彼を見つめてしまった。

……なるほど。レナスの好みがアキのような男ならば、見事に正反対のタイプだ。

でも、と思う。ビルフレッドは、庶民だからと言ってニーナを蔑むようなことはしなかった。口調はぶっきらぼうだったけれど見下しているわけでは無かったし、単に武骨なだけだろう。先ほど気づかってくれた時に見せた優しさを考えると、悪い男では無さそうだった。

「そう言えばニーナ、どうしてここに？」

レナスが振り向いた。いつもだったらニーナが店を手伝っているはずの時間だ、ということに彼女も気づいたのだ。

「ちよつとレナスに会いたくて……」

「私に？」

頷いた瞬間、じわ、と涙が浮かんできた。顔が上げられない。

レナスはニーナの気持ちを瞬時に察したようだった。

きびきびとビルフレッドの馬車にニーナを乗せ、「女同士の大切な話なのよ」と言って御者台に彼を座らせた。そして学園の図書室に向かうように命じる。あそこならば滅多に人が来ない。

ビルフレッドもレナスの意図が分かったのか、無言のままその指示に従った。

図書室に到着すると、レナスはニーナの肩を抱いて中に入る。入り口の見張りはビルフレッドに頼んだ。

無人の室内では知識の水晶玉が足元近くにまで降りて来ていたが、二人が足を踏み入れた瞬間にそれらは慌てて天井へと舞い上がった。色とりどりの水晶玉が上昇していく様子はとても幻想的で、一瞬だけニーナの心も浮き立つ。

レナスが扉を閉めて中央に戻って来る頃には、大分気持ちの方も落ち着いていた。声を震わせることもなく、淡々と気持ちを口にすることが出来た。

以前からレンが自分を恋愛対象として見ていないことは知っていたが、それでもニーナは希望を捨てきれなかった。諦めるよう自分に言い聞かせながらも、どこかでわずかな可能性に期待していたのだ。先ほどまで。

「もういい加減に諦めないとね」と寂しげに笑ったニーナが、顔をしかめて言葉を続けた。

「ただ、最近の自分が許せなくて。レンのことが好きはずなのに、アキに抱きしめられると離れたくなくなって、ずっとそうしていたくて……最低だよな」

レナスは黙って聞いていたが、ニーナの自虐的な台詞に思わず「貴女、自分に厳しすぎるのよ」と口を挟んだ。

きよとんとした顔を向けるニーナに、苛々とまくしたてるレナス。「ニーナ、貴女ねえ、他人に甘くて自分に厳しいのよ。もしも私が

アキ教授のことを心の底から好きだとしてよ？ その想いが報われないからって、諦めて他の男と付き合ったら、貴女、私を責める？」

「……責めない」

「そうでしょう？」

レナスが言うと、まだ納得いかない様子のニーナが声を上げた。

「でも私はレンのこと完全に諦めていたわけじゃないし……アキのこと好きかどうか分からないのに……」

「半分諦めてたんでしよう？ それに誰だってね、自分の恋が報われない時は、ついつい他の誰かにすがりつきたくなるものなのよ」

レナスの言葉に、ニーナは目を見開いた。

その様子にため息をつくレナス。

これが、誰か他の人間の話であればニーナは寛容に受け入れただろう。だが、常に理性的であろうとするあまり彼女は、自身がそれに相応しくない振る舞いをするのが許せないのだ。

全てを理性で制御できるほど、人間の感情は単純なものでは無いのに。

今も冷静さを装ってはいるが、ニーナが思っている以上に彼女の心は失恋に傷ついているはずだった。

変な男がそこにつけ込んだりしないよう、アキに言わなければ。

この娘を守ると言ったのだから、その責任は果たしてもらおう。

放心状態で立ちすくんでいる彼女を見て、レナスは固く心に決めたのだった。

6、黒幕判明

硬いノックの音が響く。

「姫。取り込み中の所すまないが、アキ教授が見えている。話があるそうだ」

聞こえたビルフレッドの声に顔を見合わせるレナスとニーナ。

一呼吸置いた後「どうぞ」と答えると、男たちが入ってきた。

先に聞かされていたのか、アキはニーナが居ることに驚きはしなかったが、入り口で足を止めると二人をじっと見つめてきた。

「……何をやってたんだ」

「女同士の秘密ですわ」

言いよどむニーナに代わり、レナスがきっぱりと答えた。

アキはその言葉に返事も追及もせず、ただ無言でニーナを見つめ続ける。

ニーナは彼の目を直視することが出来ず、たまらなくなつて視線を伏せた。

やがてアキは彼女から視線を外すと、部屋の中央に進み出た。

「さつき、薬物中毒で倒れた生徒たちの尋問をしてきたんだがな。」

ターマの粉末を売ってくれたのはコーク・ランカードだと証言した「息を呑むレナスとビルフレッド。」

一方、薬物事件のことを知らないニーナはきょとんとしている。

それに気づいたビルフレッドが、慌ててアキに近寄った。

「アキ教授、調査中の事件について一般人に情報を漏らすのは……」

「ニーナなら大丈夫だ」

くしゃり、とアキの手がニーナの黒髪をかき混ぜた。彼女の身体がピクリと反応する。

「しかし……」

「^{レナス}婚約者の親友を、信じないのか？」

グツと言葉に詰まるビルフレッドを、レナスが冷ややかな目で睨

みつける。

アキはニーナに身体を寄せると、薬物事件について手短かに説明してやった。

「それでレナス聞きたいことがある。コーク・ランカードを知っているか？ 貴族クラスの生徒らしいのだが」

アキに話しかけられ、はっと視線を戻すレナス。

「え、ええ。確か家が貿易商だったはずです」

なるほどと頷くアキとは対照的に、ビルフレッドが声を上げた。

「貿易商？ ではランカード商会のことか？」

ニーナも驚いてレナスを見つめた。ランカード商会と言えば老舗中の老舗で、知らない者は居ない。

「恐らく、そのランカード商会が裏で糸を引いているに違いない。

一介の学生ふぜいがターマの粉末を手に入れることなど不可能だからな」

「でもアキ教授、私は以前、商会の代表者であるローリア氏にお会いしましたけれど、かなり厳しくて実直な方でしたわ。不正などするような人には、とても……」

レナスが困惑気味に口を開くと、半ば呆然としていたビルフレッドがキュツと顔を引き締めた。

「あの会社は最近、代表者が変わったのだ。ローリア氏が亡くなり、今は甥のランクル氏が経営している」

さすが街を巡回するのが仕事の正剣隊だけあって、ビルフレッドは市勢にも通じているようだ。

レナスが納得いったという顔で頷いた。

「そうでしたのね。ランクル・ランカードはコーク・ランカードの父親ですわ。黒幕はランクル氏で間違いありません」

「でも中毒者の証言じゃあ、証拠能力が低いんでしょ？」

ニーナが疑問を口にする、はっと顔を上げたビルフレッドの表情が悔しそうに歪んだ。

「……残念ながら」

その顔を見つめながら、アキが淡々と語った。

「倒れた生徒のほとんどが、魔法技能格闘大会の出場者だった。薬の力を借りて良い成績を出したいと思っただけらしい」

「バカね」

レナスの容赦ない一言が吐き捨てられる。

けれどニーナは知っていた。軍隊への入隊を切望している生徒が、どれほど居るかを。食いつばぐれることの無い職業……それを求める生徒たちの気持ちは、庶民クラスに居る彼女には痛いほど分かる。いや、共感はおそらく出来なくても、責めることは出来なかった。

「姫。その一言で切り捨ててはいけない。彼らには、そこまでの理由があつたのかもしれないのだ」

ビルフレッドが静かに言った。その声の厳しさに、驚いて顔を上げるニーナ。

一方、レナスの方はバツが悪そうに視線を逸らしていた。

そうか……と思いが当たった。ビルフレッドが所属する正剣隊には、庶民階級出身の隊員が多く所属している。彼らと共に働いていれば、ちょっとした雑談や休憩の合間に、庶民たちの生活苦について耳にすることもあるに違いない。それを階級制度では当然のこととして受け入れるのでは無く、彼らの立場を尊重しようとする。そういうタイプの男なのだ。ビルフレッドは。

「ところで、そのコーク・ランカードだが。ここしばらく学園に来ていない」

アキの声に、全員が注目する。

「コークの担任教授が、父親　ランクル・ランカードにも連絡を入れていたのだが、家業の手伝いが忙しく、自宅にも帰ってきていないの一点張りらしい」

ビルフレッドが呻いた。

ランカード商会は巨大な貿易商であり、店舗や倉庫、ランクル氏の自宅など、保有する土地建物は多い。その全てに張り込んでコークの居場所を突き止めなければいけないと考えると、気が遠くなり

そうだった。

おまけに警護の人間も相当いるだろう。彼らに気づかれれば、コークが逃亡したり証拠を隠滅させられる危険もある。

「ねえ、格闘大会の出場者ならコークに接触できるのでは無いかしら」

レナスが思いついたように声を上げた。

「私が出場するって言ったら、向こうから近づいて来るんじゃない？ 麻薬を売りつけるために」

「姫！」

ビルフレッドが声を上げた。しかし彼が言葉を続けるよりも先に、アキの方があっさりと「無理だな」と切り捨てた。

「なぜですの」

頬を膨らませて言うレナスを見下ろす金色の瞳。

「お前の実力なら、麻薬は必要ないだろう。コークだってそのことは知っている」

「そりゃそうだ」

ニーナにまで頷かれ、レナスは膨れたまま黙り込んだ。隣でビルフレッドが安堵したような顔をしている。

「じゃあ、私が出場すればどうか」とニーナが言うと、「それも無理だな」とアキによって却下された。

「お前の実力じゃ、麻薬を使っても無理だ。エントリーすら出来ないだろう」

「……確かに。我ながら情けないとは思いますが、ニーナに反論の余地はない。」

「それにお前、今度は選手の応援のために踊るからな」

「はっ？ なにそれ」

「ジン教授が教授会で強引に決めた」

「……」

花祭りの舞台を見て以来、ジン教授のニーナに対する思い入れはエスカレートする一方だった。

全面的に彼女を応援することに決めたらしく、なんと「ダンス部」なるものを作り、ちゃっかり顧問に納まってしまったのである。

今の所、部員は二ーナー一人。これも本人が知らないうちに登録されていたのだ。しかも彼女は特別部員扱いということで、部費が免除されていた。

「やるわね、ジン教授。そのうち後援会まで作りそうよ」

「……やめて。頭痛い」

大真面目な顔で言うレナスの前で、二ーナがこめかみを押さえた。「でも、何かコークを捕まえる良い手は無いかしらね」

レナスが少し弱気な表情を見せると、ビルフレッドが彼女の肩に手を置いた。

「それは俺の仕事だ、姫。だから姫も二ーナも……自分が囿になるような危ない真似はしないで欲しい。もっと自分を大切にしてくれ」
ビルフレッドを見上げたレナスの瞳が、少しだけ不安そうな表情いろを浮かべる。

頷き返す彼の目は、見ている方が赤面するほど愛情に満ち溢れていた。

「……なんだ。レナスが憂鬱そうな顔してるから、てっきり婚約が嫌なのかと思ってた」

「ああ。照れ隠しと……あと、自分でもビルに惚れてるってことを認めていないだけだ」

意外そうな顔で二ーナが呟くと、苦虫を噛み潰したような顔のアキがそれに答えた。

「大きなお世話だ、全く」

不思議そうな顔をする二ーナに「何でもない」と言いながら、アキはビルフレッドを睨みつけた。

俺が守る限り、二ーナがどんな危険な目に合おうと心配ない。お前はレナスの心配だけしてる。

アキの毒をはらんだ視線は、二人の世界に入り込んでいる男には届かない。

しばらくして我に返ったビルフレッドは、アキの協力感謝する
とともに、全員に暇を請い足早に出で行った。

7、泉で出会った人

澄みきつた空を見上げながら、ニーナは幸せそうなため息をついた。

森の奥にあるせいか滅多に人の来ない泉は、学園の校庭に存在する水場の中でも、特にお気に入りの場所だ。

ニーナは一糸まとわぬ姿で、顔だけを水面に出して漂いながら、鮮やかな緑の木々と真つ青な空と木漏れ日の美しさを、うっとりと思つめていた。こうしていると身体中の毒素が抜けていくように思える。

ダンスの練習で火照った身体に、ひんやりとした泉の水が心地良い。踊って汗をかいた後に、海水だったり温泉だったりする他の水場には行きたくない。淡水で、深く、静謐せいひつなこの泉は、正に水浴びにぴったりの場所だった。

「学園内で裸体をさらすとは、大胆だな」

岸に上がり木にかけてあったタオルをとったニーナは、背後から聞こえた声にびっくりして振り返った。

(……アキ?)

なぜそう思ったのかは分からない。もしかしたら、その男がアキにそっくりの銀髪だったからかもしれない。

人が近づいて来る気配など無かったはずなのに、忽然と現れた謎の男。

色こそアキに似ていたが、その髪は腰に届くまで長く、ゆるやかに波打っていた。肌は褐色でアキよりも背は低く、歳も若そうに見える。女性とも男性ともとれる中性的な顔立ち。ただその目つきは……良く似ている。初めて会った時に見せた、アキのあの探るような目に。

かろうじて小さなタオルで身体の前面だけを隠しているニーナの姿を前に、全く動じた様子が無い。

羞恥に頬を染めるニーナを見ながら、「水浴びする時は視界を遮断させる魔法ぐらい使ったらどうだ」と男が言った。

「……そんな魔法、使えません」

「使えない？」

驚いた声を上げる男の前で、ニーナは気まづげに下を向いた。

視界を遮断させる魔法は初歩的な光魔法であり、十五歳にもなる魔法使いが使えないなど言うことはあり得ないのだ。普通であれば。

水浴びをする姿を、他の誰にも見られないようにする。そのための魔法はいくつもある。だがニーナは、どれも使うことが出来なかった。

「魔力が低くて……」

消え入るような声で呟くニーナ。

その後が続いた長い沈黙は、彼女の胸に不安を呼び起こした。恐る恐る顔を上げてみると、驚くほど鋭い視線に射^{しやく}竦められて息を呑む。

なぜ自分が、この男から怒りを向けられなければならないのか。

敵意ある視線に直面したニーナは、混乱した頭で思った。

「魔力が低い？」

何の感情も込められていない低い呟き。それがかえって言い知れない恐怖をニーナに与える。肌が粟立っているのは寒さのせいではないだろう。

彼女の顔から目を離さぬまま、男が一步前に出る。

ニーナは胸元できつくタオルを押さえながら、思わず後ずさりをした。それに合わせて男もゆっくりと前進する。

「……うっ！」

身体に走った激痛に、ニーナが呻いた。どうやら背後にあった木の、とがった部分にぶつかってしまったらしい。

追い詰められた。思わず身震いしたニーナの身体から落ちた水滴が、地面に黒い染みを作った。なす術^{すべ}もなく、男が自分に近づい

て来るのを恐怖の面持ちで見つめる。

「怪我をしたのか」

ニーナの目と鼻の先まで近づいた男が、片手を彼女の肩に置くと、その冷たい手をゆっくりと負傷した部分に滑らせた。

指先が傷口に触れ、痛みでニーナの身体が弓なりに反り返る。すかさず男は反対側の手を彼女の腰に回し、ぐいと自分の方へ引き寄せた。

「……ひっ」

驚きの声を上げるよりも、傷口から広がる痛みには悲鳴が上がる。

「木の破片が刺さってるな……抜くから噛んでろ」

何を、とは聞けなかった。突然襲ってきた激しい痛みには我を忘れ、とっさに目の前にあつた男の肩に歯を立てる。瞳をきつく閉じ、必死で激痛に耐えながら、ひたすら時間が過ぎるのを待った。

「終わりだ。だが……」

涙の滲む目を開けてみれば、無表情な男の顔がそこにあつた。

「治癒の魔法をかけている。まだ待て。このままだと傷跡が残る」

ニーナが顔を赤らめながら目を伏せる。その時、男の白い服にポツンと小さな赤い染みがあるのに気がついた。先ほど彼女が歯を立てた場所だ。

「あ、あのっ……」

自分がとんでもないことをしたことに気づいたニーナは、半ばパニックに陥りながら男の顔を仰ぎ見た。

「ごめんなさい、私、噛んだせいで、あの」

「動くな」

必死になって謝るニーナの顔も見ずに、男は目を半分閉じて魔法に集中する。

ニーナは困った表情で彼を見上げていたが、やがてため息とともに顔を伏せた。

そっと指先で染みの部分に触れ、治癒の魔法をかける。男は拒絶しなかった。

傷が小さかったのでニーナの魔法はすぐに終わった。しかし男の魔法は終わらない。

思っていたより傷が大きかったのと……自分の身体に魔法が効きにくいせいだろうとニーナは思った。

幼い頃から自分が魔法にかかりにくいことは知っていた。けれど、それが普通なのだと思っていた。世の中の何人かは自分と同じように魔法が効きにくいのだろうと。

それが違うと分かったのは、この学園に入学してからだ。だがそこで「なぜ自分だけ？」と思うようなニーナでは無い。理由を追究しようとも思わない。ただ、それを事実として受け入れただけだった。

ダンサーや娼婦として生きていくには傷跡が無い方が良い。男に對して申し訳なく思いながらも、ニーナは大人しくその身を預けていた。

傷口からじんわりとした熱が広がる。乾いた肌をそよ風が柔らかく撫で、心地良い。

ようやく聞こえた「終わったぞ」という声に、うとうととしていたニーナはハッと気がついた。

顔を上げてみれば、すでに男は少し離れた所に立って彼女を見つめている。先ほど感じた敵意は勘違いだったのかと思うほど、その顔からは何の感情も読み取れなかった。

「あ……ありがとうございます」

「あまり無防備に水浴びしない方が良い」

「でも、ここは滅多に人が来ないんです」

言い訳めいた口調でニーナが言うと、彼は周囲を見渡して「確かにな」と認めた。けれどその眉が、一瞬だけ潜められる。

「……………いや、誰かここに向かっているようだぞ」

「え？」

「早く着替えた方が良さそう」

驚くニーナに忠告すると、男は背を向けてその場を立ち去ろうと

した。

「待つて！……あの、貴方の名前は？」

「ジェイレンティスキ」

振り返ることも無く、男の姿は木立の中に消えた。

ニーナが着替えていると、茂みの揺れる音が聞こえてきた。先ほどジェイレンティスキが言っていた通り、誰かがこちらに向かって歩いて来ているのだろう。

着替えが中途半端になっており、まだ肌の大部分が露出している状態のニーナは木立の中に入って隠れることにした。

しばらくして森の中から現れたのは、一人の少女だった。

彼女は重い足取りでゆっくりと泉の縁まで近づくと、その場に立ちすくんだ。青ざめた顔で、じつと水面を見つめている。

悲壮な表情を浮かべた、思いつめた顔。

着替えをしながら様子を伺っていたニーナは、もしかや少女が自殺するつもりではないかと思い、慌てて彼女の近くに駆け寄った。

「ちよつと待つた！」

少女は弾かれたように振り返ると、目を丸くした。

「ニーナさん？」

ぴた、とニーナの足が止まる。

「……どこかで会ったっけ？」

ニーナが聞くと、少女は一瞬だけ愕然とした表情を浮かべてから、憂鬱そうな声で答えた。

「……隣のクラスのシャディです」

少女 シャディの制服に目をやれば、確かに庶民クラスのエンブレムが刺繍されていた。

そう言えば何となく顔に見覚えはあるが、同じクラスの学友たちであっても、名前ぐらいしか覚えていないニーナである。隣のクラスの生徒の名前まで覚えてはいなかった。

「ごめん」

素直に謝ると、シャディは「……別に良いです」とため息をついて目を逸らした。

「なんで自殺しようとしたの？」

ニーナは聞いてみた。途端に、貝のように固く口を閉ざしてしまふシャディ。

この反応は、やはり入水自殺するつもりだったのだとニーナは確信した。しかし本人が言いたがらないのに、深く理由を追及するもためられる。悩みを打ち明けてもらったとしても、ニーナに解決できないような内容だったら、どうしようもできないのだ。

「えーと、水死体って見た目がかなり悪くなるよ。ガスが溜まって、ぶよぶよに膨らんで……」

詳しい描写を始めたニーナを、シャディがぎよっとした顔で振り返る。

「身元の判別すら出来ないようになるんだよね。家族が見てもシャディさんか分からないって、悲しいじゃない？」

家族という単語を聞いた瞬間、シャディの身体はビクツと揺れた。大きく見開かれた目から、ボロボロと涙が零れ落ちる。

彼女はその場にしゃがみこむと、激しく嗚咽を上げながら泣き始めた。

予期せぬ反応に戸惑うニーナだったが、無言で彼女の隣にしゃがみこむとシャディの背中をさすってやる。あえて視線は泉の方へと逸らしていた。

「……ありがとう」

しばらくして少し落ち着いたシャディが、下を向いたままぐもった声で呟いた。

ニーナはさすっていた手の動きは止めたものの、彼女の背中から手を離そうとはしない。

だが次の瞬間、シャディの口から飛び出した人物の名に、驚いて彼女を振り返った。

「ニーナさん……コーク・ランカードって知ってる？」

8、もう一つの事件（失踪）

深夜、仕事を終えたニーナが自室に戻ると、アキが窮屈そうに椅子に座って待っていた。

「待たせたかな？」

「いや、ついさっき来たところだ。しかしお前の方から俺を呼び出すとは珍しいな」

アキが手を上げると、彼の研究室にニーナが残した書置きが握られていた。

「急いで話したいことがあって」

言いながらニーナは、持ってきた盆をテーブルに置いた。黒い物体が皿の上に乗せられている。

「ブラック・マツシユルームか」

覗き込んだアキが声を上げた。ブラック・マツシユルームは閻魔界と人間界の狭間に生えるキノコで、人間界では麻酔の材料として使われている。一方、閻魔世界の住人にとっては非常に慣れ親しんだ食材であった。

ニーナは戸棚からワインを取り出すと、グラスに注いでアキの前に置いてやった。そして自分のために紅茶を淹れ始める。

その様子をじっと見つめるアキ。

以前ニーナの部屋に来た時は、紅茶しか置いて無かったはずだ。

彼女は酒を飲まないし、このワインはやはり自分のために用意しておいたものだろう。ブラック・マツシユルームにしても、アキの口に合うものを作ろうとしたニーナの心遣いを感じられる。

ようやく使い魔として主人に仕える心構えが出来てきたらしいな。アキは満足げな微笑みを浮かべた。

彼の正面に座ったニーナは、なぜか上機嫌な様子のアキを見て首を傾げつつも、昼間シャデイに会った経緯いきわづらひを話し始めた。

「シャデイには、リードというお兄さんが居るんだって」

二人は幼い時に両親に捨てられ、互いに力を合わせて生きてきたらしい。特にシャデイが仕立て屋で住み込みの仕事を見つけるまで、リードが二人分の生活費を稼ぎ、親代わりとして彼女を育ててきたと言う。

その後リードも住み込みの仕事を見つけたため、兄妹が顔を合わせるのは学園に居る間のみになった。彼らは毎日、相手が元気でやっているかどうか確認し合っていたそうだ。

それがしばらく前から、シャデイはリードに会うことが出来なくなってしまうた。

「学園に登校してこなくなっただんだけ。リードの仕事先にも行ってみたけど、ある日突然居なくなっただんだけしか言われなくて。迷惑そうに追い返されたそうよ」

兄の身に何かあったに違いない。あの責任感の強い兄が、無断で仕事を放りだすような真似をするはずない。まして、自分に何も言わずに消えるなど。

シャデイには心当たりがあった。リードが失踪する前に、二人で交わした会話。

「リードは、仕事先で出会った女性と愛し合うようになったんだけ」

しかしその女は雇い主の娘で、決して許される恋では無かった。だから二人とも、周囲に悟られないよう自分たちの想いを押し殺し、相手への無関心を装って日々を過ごしていた。

そしてある日、変化が訪れた。雇い主が急死したのだ。彼は事業を営んでいたのだが、それを引き継いだ人間がリードの新しい雇い主となった。

「待て。それはつまり……」

話が見えてきたアキに、ニーナが頷いた。

「リードはランカード商会で働いていたの」

ランクル氏が新代表となって間もなく、ローリア氏の娘は屋敷から姿を消した。

彼女が自ら望んで去って行ったというランクル氏の説明を、リードは信じなかった。彼はランクル氏に詰め寄り　解雇を申し渡されると、屋敷から叩き出されたのだ。

それからのリードは、必死で恋人を探し回った。失踪する直前、久しぶりに学園にやって来た兄を見たシャディは、彼のあまりの憔悴ぶりに驚き、心配になったと言う。

リードは妹に向かって、コーク・ランカードなら何かを知っているかもしれない、これから彼に会いに行つてくると告げたそうだ。

それが、シャディがリードを見た最後になった。

「シャディは兄が死んだものと思ひ込み、自殺しようとしたってわけか？」

「それが……」

ニーナが目を逸らして苦い顔をした。言にくいことを口に出そうとしている顔だ。

察しの良いアキは、すぐにピンと来た。

「兄への想いを逆手に取られ、コークに弄ばれたか」

ニーナは無言で頷いた。

コークに呼び出されたシャディは凌辱され、揚句リードの情報も何一つ得ることは出来なかった。

自暴自棄になった彼女は、兄がどこかで生きているという希望も捨て、死んでしまおうと思ったのだ。

泉のほとりで、ニーナは彼女を諭した。

まだリードが死んだと決まったわけでは無い。コーク・ランカードのような下らない男のために死ぬことを考えるのではなく、愛する兄のために生きようと考えると。

その言葉だけでシャディの受けた心の傷が消えたわけでは無かったが、彼女は不安定な精神状態でありながらも自殺だけは思いとどまってくれた。

ニーナはシャディを仕立て屋まで送るついでに、女将に彼女の世話を頼んでおいた。幸いにも女将はとても良い人で、詳しい理由を

聞くこともなく、自分に任せると胸を張って答えてくれた。

「コーク・ランカードの居場所と、リードの居場所。この二つが問題ね」

「もしかしたらリードは、ランカード商会にとって都合の悪いことを知ってしまったかもしれないな。そうすると最悪、消されている可能性もあるが……」

アキの言葉にニーナが悲しげな顔で頷いた。それは彼女も考えていたことだ。そうであって欲しくない、と願っているのだが。

「しかし、今の話を聞くとローリア・ランカードには娘が居たんだな？ なぜその娘が事業を継がなかったんだらうな」

ニーナは「分からない。でもそれは」と言つと部屋の入り口を振り返った。

「本人に、聞いてみましょうか」

娼婦たちの間で、ざわめきが広がった。柔和な笑みを浮かべたまのミレイユが、きつぱりとした声でアキに言う。

「お客様。申し訳ございませんが、それは出来ません」

「それは困ったな」

ちつとも困った様子に見えないアキが言った。

自分が軽んじられていると思つたのか、ミレイユの表情が強張り、声の調子も先ほどより厳しくなった。

「アキ様はすでに、デイジーを馴染みとしております。エミレアを指名することは出来ません。ましてあの娘は、まだ見習い期間中です」

「だがデイジーは今夜、月の障りで客が取れないのだろうか？ そういう場合は他の娼婦を指名することが出来たはずだ。見習いであるうと、娼婦には変わりない」

アキとミレイユのやり取りを見ていた数人の娼婦が、嫉妬の視線をエミレアに向ける。

彼女たちはいつも、美形のアキの相手を務めるデイジーを羨まし

く思っていた。あわよくば自分が代わりに相手をしたかと思っ
たのに、あるうことか見習いの小娘が指名されたのだ。プロとして
のプライドも傷ついていることだろう。

お互いに一歩も引かない構えのアキとミレイユだったが、これは
ミレイユの方が悪かった。

確かに馴染みの娼婦が客を取れない時は、他の娼婦を指名しても
良いことになっていたし、見習いと言えど客が望めば仕事をさせる
のが娼館の慣わしだったからだ。

しかしミレイユは迷っていた。見習いに客を取らせることは、質
の低いサービスを提供することになり、客を落胆させかねない。そ
れはウィッチグラスの名誉にかかわる問題だった。

ちなみに都合よくディジーに月の障りが訪れたのは、アキの魔法
のせいである。

「……私でよろしければ、お相手をさせていただきます」

「エミレア?!」

前に進み出たエミレアに対し、声を上げたのは部屋の片隅からア
キを睨みつけていたレンだった。

「ダメだ、エミレア。君は……それにこいつは……」

「レン。貴方が出る幕ではありません」

ミレイユが強い口調でレンの言葉を遮った。

これは娼館の運営に関する問題だ。オーナーであるレイチエルを
除けば、全てはミレイユの裁量に委ねられなければならない。

「ああ、実はレンにも来てもらいたいんだがな」

足音荒くアキに近寄って来ていたレンが、動きを止めた。ミレイ
ユも驚きを隠せなかったし、エミレアでさえ呆気にとられていた。

「ふざけるな！ 俺はそんな趣味に付き合う気は……」

「お前も交えて話をしたい。ニーナも同席する」

アキに小声で囁かれ、完全に虚を突かれたレンは黙り込んだ。

にこやかな微笑みを浮かべたアキが、ミレイユを振り返る。

「どうやら承諾を得られたようだ。レンが居ない間は、俺の魔法で

店全体を覆うから警備には問題ないだろう」

有無を言わさぬ口調だった。

「……それがお客様の望みであれば、全身全霊で^{あつ}応えるのが主の務め。アキ様、どうぞごゆっくりお寛ぎ下さい」

腹を決めたミレイユは、優雅に一礼すると身体をどけて道を譲る。

アキとレンは両側からエミレアの手を取ると、階上へと足を進めたのだった。

9、エミレアの告白

エミレアが入ってくると、ニーナは彼女の手を取り、いくつもクッションを重ねて座り心地を良くした椅子に座らせた。

レンは無言のままエミレアの近くの椅子に腰を下ろす。客であるアキは長椅子にゆったりと腰かけ、ニーナを自分の側に座らせた。その動きにレンはピクリと眉を動かしたが、何も言わなかった。一方エミレアの方は、レンに加えてニーナまで同席していることに戸惑っている。

「それで？ 何の用だ」

腕組みをしたレンが不機嫌な声で言った。

「まあそう嘸みつくな。 エミレア」

アキの声に、不安そうな顔をしたエミレアが顔を上げた。

「お前はローリア・ランカードの娘だな？」

エミレアの顔がさっと蒼褪める。彼女は視線を逸らすと、苦悩するような顔で「……ええ」と認めた。

「なぜローリア氏が亡くなった時、後を継がなかったんだ？」

エミレアが唇を嚙んだ。隣で見ていたレンが「一体なんのと腰を浮かせかけたが、ニーナが無言で首を振るのを見て、また元の位置に戻った。」

「なぜお前が今この店に居るのかは分からないが、少なくともそのせいで一人の若者が行方不明になっている。うちの学園の生徒で、リードという名だ」

「リードが?!」

皆の見つめる中、エミレアの顔はみるみる蒼白になり 意識を失う寸前でレンの力強い腕に抱きかかえられた。

ニーナが急いでカップを差し出す。中に入っていたのは、人肌程度に温められた白湯だった。

レンはチラリとニーナを見上げた後、それを受け取りエミレアの

口元に差し出した。

今にも崩れ落ちんばかりになっていた彼女は、大人しくそれに口をつける。

「あまりショックを与えるな。エミレアは……」

「妊娠しているんだろう」

睨みつけてくるレンの言葉を遮って、アキが淡々と言った。

ニーナも無言で佇んでいる。彼女も先ほどアキから教えてもらったばかりだった。だからこそ、母体に負担とならないよう白湯を用意していたのだ。

初めてエミレアを見た時、アキは彼女の身体に二つの気配が重なっているのに気づいていた。

一つは彼女のもの。そしてもう一つは、恐らくまだ、生み出されてから三か月も経っていないであろう弱々しい命の気配。だがニーナの話によれば、彼女はウィッチグラスに来てから一か月しか経っていない上に、見習いということと客はとらされていないかつたらしい。つまり。

「リードの子供、だな」

アキの言葉に瞳を閉じたエミレアが頷いた。

「リードは……あの人は無事なのでしょうか……？」

弱々しい声でエミレアが尋ねると、アキは「分からない」と言った。

「だが、それを確かめるためにもお前の力が必要なのだ。協力してもらえるな」

エミレアは再び頷くと、レンに支えられながら椅子に座り直した。

「……私は確かに、ローリア・ランカードの娘でした……。ただ、血の繋がりは無かったのです。ランカード夫妻は、長く子宝に恵まれませんでした。結婚十二年目にして、ようやく念願の子供が出来たものの、お母様は……ランカード夫人は流産してしまわれたのです。そのショックで夫人は精神を病んでしまい、ローリア氏は妻のために孤児院から女の子を引き取りました。それが私です」

はらはらと涙を流しながら語られる話に、全員が静かに聞き入っていた。

「養父母は私に愛情を注いでくれました。血の繋がりは無くても、たとえお母様が私のことを死んだはずの娘だと思いついていても……幸せだったのです。お母様が亡くなった後、お父様は貿易商の仕事も教えてくれました。私に後を継がせるつもりだったのです。こんな、孤児であった私に……」

エミレアが言葉を詰まらせると、レンが優しくその手を握りしめた。

「……お父様が亡くなった後、ランクルがやって来て葬儀の準備を手伝ってくれました。私も彼の親切をありがたく思い、すっかり信用してしまっただけです。けれど……」

きつと顔を上げた彼女の目には、怒りの炎が燃えていた。

「ランクルは密かに、お父様の資産のほとんどを自分の名義に変えてしまっていたのです。私が気づいた時にはもう、会社は彼に乗っ取られておりました。おまけにランクルは私がお父様の実子では無いことを理由に、後を継ぐ資格は無いと言い放ち、私を娼館に……この店に売り飛ばしたのです。妊娠が分かったのはその後でした……」

エミレアはハンカチに顔を埋め、むせび泣いた。

ウィッチグラスに来てから彼女は、気丈に振る舞っていた。しかし本当は胸中に不安を抱え、孤独で寂しい思いに押しつぶされそうになっていたのだ。

今、枷が外れたように泣きじゃくるエミレアを同情の目で見ながら、ニーナは遠慮がちに尋ねてみた。

「どうしてランクルの言いなりになったの？ ローリア氏と血の繋がりは無くても、貴女に味方してくれる従業員も居たんじゃない？」

「しか……仕方……な、かったのです……」

しゃくり上げながら、ますます激しく泣くエミレア。

「言うことを聞かなければ、リードの身に危険が及ぶと言われ……」

それなのに……それなのに、リードは今……ああっ！！」

ついにエミレアは両手で顔を覆うと、声を上げて泣き出した。

レンもニーナもただ彼女を見つめるしか出来ない中で、つとアキが立ち上がりエミレアに近寄った。

彼はそつと彼女の頭に指先を乗せ、何事かを呟いた。

唐突にエミレアの泣き声が止まる。

「アキ？ 一体何を？」

ニーナが驚いて声を上げると、レンが「お前、この悪魔を名前で呼ぶほど親しいのか！」と全く関係のない部分に食いついた。

今はそんなこと言ってる場合じゃない、と一喝するとニーナはアキへ向き直った。

「一時的に気鬱きうつを払ってやったただけだ。もう数秒もすれば意識が戻るだろう」

その言葉通り、虚ろだったエミレアの瞳に徐々に光が戻って来ていた。さっきまでの絶望に沈んだ状態とは違い、その目はしっかりとした意志を宿している。

「少しは落ち着いたか？」

「……はい。お見苦しいところをお見せいたしました」

エミレアがゆっくりと頭を下げる。

アキは再び長椅子に戻ると、ランカード商会が違法薬物を仕入れ、コークを使って売りさばいているらしいことをざつと説明してやった。

取り乱すこともなくアキの話聞いていたエミレアだったが、徐々に険しい顔つきに変わり、頬は怒りで紅潮していった。

「何と言う恥知らずな……何と言う……」

身を震わせながら、ぎゅっと握りしめた両手を見つめて繰り返す。「エミレア。コークが身を隠していそうな場所に心当たりは無いか？ あるいはリードを監禁していると思われる場所を」

答えるエミレアの声は、怒りに震えていた。

「ええ、ございます。父が亡くなる少し前に、郊外に別荘を買った

のです。土地神の守護を請うため、土魔法の巫女を呼んで視てもらいました。けれど巫女に、その場所は闇世界との隔たりが非常に薄い土地で、ついている神の性質も良くないと言われ、そのままに……。いずれ取り壊すつもりだったのですが……」

その前にローリア氏が亡くなってしまい、すっかり忘れ去られていたその場所に、ランクルが目をつけたと言うわけだ。闇世界と密接した場所であれば、悪魔も麻薬を持ち込みやすかっただろう。

アキは大きく頷くと、エミレアから詳しい場所を聞き出した。そして立ち上がると、レンとニーナを見下ろして口を開く。

「俺がエミレアを部屋まで送るから、お前ら二人はここで話し合え」

「えっ……」

「おい、なんで……」

「黙れ。レン、お前が終わらせてやらない限り、ニーナはいつまでも僅かな希望に縋り続けるんだ」

ポカンとしてアキを見上げるレンと、顔を真っ赤にして俯くニーナ。

「逃げるな、ニーナ。お前は面と向かって拒絶されるのが恐くて、一人でうじうじ考えた挙句に自分の出した結論に振り回されてるんだ。それで前に進めるはずが無いだろう」

恥ずかしさに耐えきれなくなったニーナがアキを睨みつけると、予想に反して、アキは驚くほど真剣な眼差しを自分に注いでいた。

お前がどんなに傷ついても、俺が支えてやる。

伝わってくる想いに、ニーナの頬にじんわりと血が上り、心臓は早鐘を打った。

アキがエミレアの肩に手を回し、じゃあなと呟くと、二人の姿は空中に溶けるように消え去った。

10、男と女から兄と妹へ

ぎこちない沈黙がその場を支配する。

アキとエミレアが消えた後、何となくお互いに顔を合わすことが出来なくて、ニーナもレンも黙り込んだまま身動きが取れずにいた。

「あー……ニーナ」

先に沈黙を破ったのは、レンだった。

「レイチエルに聞いたんだが……俺はどうやら……その、お前を傷つけていたらしい。悪かった」

その言葉にニーナの顔が、ふっと笑み崩れた。泣き笑いのような顔を上げて、困惑しているレンの顔を見つめる。

多分レンは、気づいていない。ニーナが彼を好きだったことに、なぜレンが彼女を傷つけていたのか、その理由を。

でも謝ってくれた。理由も聞かずに、謝ってくれた。

いかにもレンらしい。そして、そんなレンが大好きだったのだ。

「レン。私のことが好きだったんだよ」

まだ胸は痛む。だけど口に出してしまった今は、どこか清々しくも感じていた。

「……そうか」

それだけ言うとレンは、口を噤^くんで黙り込んだ。

彼が躊躇っている様子が辛そうで、ニーナは慌てて自分から声をかけた。

「いいの。レンが私のこと、そういう対象に見れないこと知ってるから」

「………すまない」

長い沈黙と、短い謝罪の言葉。

ニーナは目を閉じてその言葉を噛みしめる。彼女は自分の心の中で、レンへの想いに終止符を打った。

「レン、リディアアって誰？」

顔を上げたレンと、静かに見つめ合う。

言いたくなければ聞かない、とニーナが言うと、彼は「いや」と首を振った。

「俺の恋人だった。俺は彼女を幸せにすることも、守りきることも出来なかった。……リディアは俺の目の前で、死んだ」

「エミレアに似てるの？」

「ああ。髪と目の色は違うが、そっくりだ」

だからレンはエミレアを守ろうとしたのだらう。自分が守れなかった恋人の姿を重ね合わせて。

「エミレアのことを愛しているとか、そういうわけじゃないんだ」「知ってる」

レンがエミレアに執着する理由は分からなくとも、ずっと彼のことを見つめてきたニーナは、それが恋慕の情では無いことを見抜いていた。

彼の想いはもうずっと前から　レイチエルに捧げられているのだから。

今なら分かる。リディアへの贖罪。それがエミレアにこだわったレンの理由だったのだ。

でも、と思う。レイチエルは、彼がエミレアに惹かれていると思っっている。

レイチエルもレンも、互いに相手を想っているのに気づいていない。二人とも自分の気持ちを胸に秘め、口に出すことすら諦めている様子だった。

もしかしたら想いを打ち明けることを躊躇う理由が、それぞれにあるのかもしれない。

「大人でも不器用な恋愛をするんだね……」

ニーナの呟きを拾えなかったレンが「ん？」と聞き返して来たが、彼女は曖昧に笑って誤魔化した。

「それよりもニーナ。お前、あの悪魔と……」

レンが口ごもる。聞きたい気持ちと聞きたくない気持ちのせめぎ

合いが、直接的な表現を使うことを躊躇わせるのだろう。

「そういう関係じゃ、ないよ」

はっと顔を上げたアキが、安堵の表情を浮かべた。

嘘では無い。彼が心配するような関係は無いのだから。まして恋人同士でも無い。

ただ 使い魔と主人の関係、と言ったらレンは激昂しそうな気がした。

「でもね。アキは……独断的で専横的で強引だけど……私のことは守ってくれると思う」

使い魔に対し主人は、その身を保護する義務があるとアキは言っていた。彼は自分が口にした約束を破るような男じゃない。短い付き合いの中で、ニーナのアキに対する予感はず信に変わっていた。

「……そうか」

レンはじつとニーナを見つめた。

子供が一人立ちする時の親の気持ちとは、こういうものなのだろうか。自分の腕の中で泣いていた赤ん坊が、自分が守ってやらねばと思っていた少女が、いつの間にか芯の強さを感じさせる女性に成長していた。

嬉しさと寂しさを感じながら、レンは立ち上がるとニーナと自分のために紅茶を淹れた。

今夜は久しぶりに、じっくり二人で話し合おう。昔、一緒になつて夜更かしをしていた頃のように……。

「ひっ……… ああああ………っ！」

腰を抜かして座り込んだ男が、恐怖に目を見開いたまま後ずさるうとした。力の入らない手と足は、何度も床を掴み損ねて空しく滑る。逃れようとする気持ちばかりが空回りしていた。

室内には濃厚な異臭が漂い、天井から床に至るまで血と体液にまみれた肉片が付着している。よく見るとそれらは放射線状に飛び散っており、その中心部では、寒気すら覚える美貌の持ち主が、銀色

の髪の一筋をも乱すことなく静かに佇んでいた。

「ひっ！」

アキが足を踏み出すと、床の上の男は息を飲み込んだ。男の股間にじわじわと黒い染みが広がって行く。

しかしアキは、まるでそこに誰も存在していないかのように男の脇を通り過ぎると、テーブルへと近づいた。

荒削りな木のテーブルは、かなりの大きさがあった。その上に散乱する、秤、薬匙、薬瓶、色とりどりの薄紙の上に乗せられた粉末……。

アキはペロリと指先を舐めると、それぞれの粉末に触れて口に運んだ。吟味するように金色の瞳が細められる。

やがて全ての粉末の味見を終えると、アキは「ふん」と鼻を鳴らした。

「人間相手には濃度が高すぎるな。末端価格をいくらにして売ってたんだ？」

床の上の男　　コーク・ランカードは唾を飲み込み、アキの顔を見上げるばかりだったが、「命が惜しければさっさと答えろ」と言われ身体をビクリと震わせた。

「は……八万ソブニー」

震える声で告げられた金額に、アキは忌々しそうに舌打ちをした。「物の価値を知らん馬鹿が。十五万ソブニーでもまだ安いぐらいだ」それを聞いたコークの瞳に、驚きと怒りの表情が浮かぶ。実際はもつと稼げたはずと知って悔しがつているのが手に取るように分かった。

アキはゆっくりと辺りを見回した。室内には彼の魔法によって破壊された肉体の破片が冗談のように転がっていたが、よくよく見てみればその中には、異形の形をしたものが少なくなかった。

「下級悪魔だな。……全員殺さずにおいた方が良かったか？」

独り言のように呟いたアキの言葉に、コークの顔が再び恐怖に引きつった。それに気づいたアキがチラリと彼を一瞥する。

「ああ。お前は殺さない。生かしたまま正剣隊に引き渡さなけりやならんからな」

正剣隊と聞いたコークは僅かに身じろぎしたが、殺されないことに対する安堵の方が大きかったようだ。

ホツと表情を緩めたコークに対し、アキは冷たく言い放った。

「だがな。骨の一、二本は諦める」

その言葉の意味を理解するよりも早く、肩を蹴られたコークは関節の上から全体重をかけて踏みつけられ、悲鳴を上げた。

眉一つ動かさずに圧力をかけ続けるアキ。やがて彼の足の下で鈍い音が響き、悲痛さを増したコークの悲鳴が、一際大きく響き渡った。

「運が良いな。骨折じゃなくて脱臼で済んだようだ」

「な……なんで……」

脂汗を浮かべたコークが、苦痛に顔を歪めながら疑問を口にした。「お前のやったことのせいで、俺の使い魔が心を痛めた。その詫びを入れてもらっただけだ」

理不尽な理由であった。だがコークは目の前の男に対する恐怖が大きすぎて、痛みに涙を浮かべながら床に転がることしかできなかった。

「それで、闇世界の誰からターマの粉末をもらってたんだけ？」

「……魔王ヴォルトス」

「聞いたことが無い。どうせ偽名だろうな。調合の仕方はそいつに教わったのか？」

コークは黙って頷いた。そして苦しそうな息の下から、濃度を下げるとの混ぜ物の割合も、末端価格も全て教わった通りにしていたと告げた。魔王ヴォルトスは無料タダでターマをくれて、調合のための人員も、自分の部下だという下級悪魔を使わせてくれたという。

「おかしいと思わなかったのか？ 無償で高価な麻薬をもらうなんて」

「……親父との契約でそうなってるって言われて……親父からもヴ

オルトスの言う通りにしろって指示があったから……」

コークの言葉にしばらく考え込んでいたアキだったが、やがて姿勢を正して窓の外を見つめた。

「とにかく、お前をここから連れて行く。……あと地下室に監禁されている男もな」

驚いたコークが瞬きをする間もなく、小屋の中に突風が吹き荒れる。

そして風が治まった時には、男たちの姿も、争いの痕跡も綺麗に消え去っていた。

11、ビルフレッドとレナス

朝靄の向こうから大聖堂の鐘の音が鳴り響く。数は七つ。

ビルフレッドは汗を拭くと、身体に張りついたシャツを脱ぎ始めた。

「おはようございます、ビル坊ちゃん」

作業小屋から出てきた園丁はそんな彼を見て、皺の刻まれた顔に微笑みを浮かべて挨拶した。

貴族でありながらレイ家の現当主と奥方は、格式ばったことを嫌う型破りな性格だった。おかげでビルフレッドたち一家と使用人たちとの関係は、一般的な貴族の邸に比べると非常に気さくだと言える。

しかしそんな中においてもビルフレッドのことを「坊ちゃん」と呼ぶのはこの園丁ぐらいなものだろう。

「ああ、おはよう。スレイヴ」

父親がまだ次期当主であった頃から、この老人は庭師として仕えてきた。彼のレイ家に対する忠誠心と愛情は並々ならぬほど強く、白髪も混じり腰も曲がった今になってもそれは変わらない。幼い兄弟たちを愛し、時には厳しく接してきたこの園丁にとって、ビルフレッドはいつまで経っても「坊ちゃん」であった。

「相変わらず鍛錬に精が出ますな」

「いざと言う時に身体が鈍っていたのでは話にならんからな」

ビルフレッドの上下する裸の胸に、汗が光る。彼は日課となっているトレーニングを終えたばかりだった。

ビルフレッドはスレイヴの肩に担がれた鋤を見て、何かを思い出したように声を上げた。

「ああそうだ。これから水やりに行くんだろう？ ついでに花を何本か用意してくれないか」

「花ですか？ いつもお屋敷に飾る分は用意してありますが……」

訝しげに眉を寄せたスレイヴの顔を見て、どこか照れたような笑みを浮かべたビルフレッドが答えた。

「いや。今日は我が姫に会いに行くのだ。手土産にと思ってな」

「さようでございましたか。では客間用の花と一緒に多めに用意いたしました。しかしビル坊ちゃん。坊ちゃんご自身が選ばれた花の方が、女性は喜ばれると思いますよ」

「そういうものか？ ……分かった。俺も一緒に行くから、選ぶのを手伝ってくれ」

この素直さがビルフレッドの長所であろう。しかも彼は自分が女心に詳しくないことを承知しており、他人に教えを請うのを、たとえ相手が使用人であろうと、躊躇しない。

スレイヴはそんなビルフレッドの性質を誇りに思いながらも、密かに不安を感じていた。

どうやら彼は婚約者に対し、一途な想いを抱いている。だが貴族の女たちと言えば……レイ家の奥方はともかく……夫に対する貞操などは形だけのものが多く、愛人を作って遊び歩いているのが普通である。そんな女と大事な坊ちゃんが結婚するなど、許し難いことであった。

あの旦那様と奥様がそんな相手を選ぶわけない、とは思うのだが、上流階級の婚姻というのは自由にならないのが普通だと言われている。

もしビルフレッドの相手が典型的な貴族女性と同じタイプの女であれば……スレイヴは自分の命に替えても、結婚を阻止するつもりだった。

黙り込んだままゆっくりと歩く園丁の険しい表情を伺いながら、何か気にかかっていることがあるのだろうか。ビルフレッドは考えを巡らせていた。そして突然、あることに気がつきハツとしたのである。

自分が婚約したことを彼に伝えはしたが、未だレナスに会わせていなかった、と。

本来であれば婚約者を使用人に紹介するような貴族は居ないし、紹介する必要も無い。しかしビルフレッドにとってそんなことは、あり得ない話だった。幼い頃から世話をしてくれた恩人に対し、あまりにも失礼な話では無いか！

「あー……スレイヴ」

声をかけられたスレイヴの足が止まり、彼はゆっくりとビルフレッドを振り返った。

「その、な。つまり……」

大切なことを忘れていた己が恥ずかしく、歯切れの悪い言葉しか出てこない。スレイヴはジッと自分の顔を見つめて次の言葉を待っている。

思い切って口を開こうとしたビルフレッドだったが、次の瞬間、彼は考えるよりも先に魔法式を構築していた。

間一髪、庭に咲いていた草花が絡み合い、ビルフレッドとスレイヴの周囲を隙間なくビッシリと取り囲んだ。

直後、大量の水が空から降ってくる。その量たるや池の水がひっくり返されたかのようなようだ。それでいて衝撃が強すぎないよう、水の落下スピードが加減されている。

やがて水の勢いが落ち、ポタリポタリという滴に変わり、草花越しに朝日が透けて見えるようになる。ビルフレッドは魔法を解いた。
「……………」

スレイヴと二人、無言で庭を見渡す。辺り一面がびっしょりと濡れ、地面はぬかるみと化していた。

「……水やりの手間が省けましたな」

落ち着き払った調子でスレイヴが口にした言葉は、ビルフレッドの耳には届かなかった。

「姫！」

彼は庭の入口に人影を見つけると、大急ぎでそちらに走り寄ったのである。

庭に降り立った妖精。それが少女を見てスレイヴの頭に最初に浮

かんだ言葉だった。

豊かに波打つ水色の髪。透き通るような白い肌。淡い緑色のワンピースは、夏向けの薄い素材で出来ており、フワフワと少女の身体の周りを漂っている。それが妖精のような印象を更に強めていた。少女は胸の前で腕を組み、ビルフレッドを睨みつけている。怒りの表情を浮かべてなお、冴えわたる美貌というものがあるのだと、スレイヴは感心した。

「どうしたのだ、姫。こんな早くから」

ビルフレッドの問いかけに答えるレナスの声は低く、震えていた。

「……貴方が娼婦を身受けしたと聞きましたわ」

その言葉に驚いたのはスレイヴだった。ビル坊ちゃんが娼婦を？だが当のビルフレッドは、笑みを浮かべて「何だ、そのことかと頷いている。

「ああ確かに。姫にも今日、その話をしよう」と……」

「なぜですか！」

レナスが叫び声を上げた瞬間、またしてもビルフレッドの頭上から水が降ってきた。今度は防ぎきれなかったらしく、ビルフレッドはずぶ濡れになる。

「姫、俺は別にやましい気持ちで身受けしたわけでは……」

「そんなことではありません！」

目に涙を浮かべ、きつと睨みつけるレナス。その迫力にビルフレッドが怯む。

「なぜいつも事後報告なんですか。なぜ事前に私に話してくれませんの！ おかげで私はいつも、何も知らないまま貴方が他の女と一緒にに居るところを目撃したり、おせっかいな誰かから話を聞かされなければならぬんですよ……」

次第に弱々しくなっていたレナスの言葉は、最後は涙にかき消された。視線を落とし、じっと地面を見つめるレナスの頬を、涙が幾筋も流れて行く。

「姫……」

困惑、驚愕、そして後悔へとビルフレッドの表情が変わり、彼は思わずレナスへ手を差し伸べた。

けれどレナスはその手を叩き落とす。彼女の目には新たな怒りの炎が燃えていた。

「私、『姫』じゃありませんわ!」

そう言っつてパツと踵を返すと、レナスは走り去った。

後には、レナスに向かって手を伸ばした姿勢のまま、どうしたら良いのか分からないと言うように呆然と佇むビルフレッドが残される。

「ビル坊ちゃん」

いつの間にかビルフレッドの隣にやって来たスレイヴが、そつと声をかけた。

「あ、ああ……すまない」

「謝られる相手が違うようすな」

力なく呟いたビルフレッドを、やんわりと嗜めるスレイヴ。

「あの方が婚約者殿ですか」

「……そうだ。ヨーフ侯爵家のレナス姫だ」

殴られた子供のような顔をしていながらも、レナスのことを語るビルフレッドの口調には、隠しきれない彼女への恋慕が溢れている。スレイヴは頷きながら、愛しの「ビル坊ちゃん」の目を覗き込んだ。

「それで坊ちゃん。レナス様をどのように思われているのですか」

「どう、とは……?」

「夫婦になりたいと思っておられるのですか」

「もちろんだ」

ビルフレッドが背筋を正して即答した。

「この身を挺して、生涯、姫を守る覚悟だ」

「それは騎士の役目であつて、夫の役目ではありませんよ」

スレイヴはあっさりと言い放つと、驚きの表情を浮かべているビルフレッドに背を向けて、生垣の枝を整え始めた。

「坊ちゃん。レナス様は見たところ、非常に美しいお方ですな。そして活発な方だ。あの方を奥方にされて、坊ちゃん、貴方はどうされるのですか？ 誰の目にも触れない屋敷の奥深くに、大切に、大切に、お困いになりますか？ 美しいことだけ見聞きするような環境に、あの方を置かれますか？」

スレイヴの話聞いていたビルフレッドの目が、大きく見開かれていく。

「違う！ 俺はそんな……」

「あの方が侯爵家の姫君だから守りたいと思うのですか？ 民を守るのはビル坊ちゃんのお仕事です。だからなのですか？」

「違う！ 俺は……俺は……レナスを愛している！」

畳みかけるように浴びせられたスレイヴの容赦ない質問に、たまらずビルフレッドが叫んだ。

それを聞いて満足そうに頷くスレイヴ。

「まだ、伝えていないのでしょうか？ 貴方の気持ちを。いつも『姫』と呼んでいて、名前で呼んで差し上げたこともないのでしょう？」

言われたビルフレッドが、はっと息を呑んだ。

「追いかけなさい、ビル坊ちゃん。愛しているのなら。……少なくとも今は、レナス様の方がよっぽど、婚約者に真正面から向き合ううとしていらっしゃいますよ」

スレイヴの言葉に一瞬黙り込んだビルフレッドが、大きく頷くと駆け出した。その顔には先ほどまでとは違い、強い決意が浮かんでいる。

ビルフレッドの背中を見送ったスレイヴが、慈愛に満ちた微笑みを浮かべた。

「どうやら近い将来、この屋敷に『型破りな奥方』がもう一人増えることになりそうだ、と。」

12、アキとニーナ

「……それで？」

「と言うわけで今、レナスとビルフレッドは取り込み中です」

アキがやれやれと言った顔で隣室の方へと顔を向ける。壁の向こうでは今、若いカップルがお互いの想いを確認し合っている所だった。

「まさか睦み合っていないだろうな」

「ビルフレッドは堅そうだからねー。それは無いと思うけど。もしやるなら『店』の部屋を使ってもらって、利用料金を払ってもらわなきゃ」

どこまで本気が分からないような、のほほんとした声でニーナが言った。

不意にその表情が陰り、それより……と彼女は躊躇いながら疑問を口にする。

「リードは……大丈夫かな」

無言で肩をすくめるアキ。

「俺に出来ることはやった。後は本人の意志次第だな」

アキはランカード家の別荘に監禁されていたリードを救出した後、彼をウィッチグラスへと運んでいた。

救出された時、リードは意識朦朧の状態だった。監禁されている間に高純度の麻薬を何度も投与されていたらしい。

アキの魔法によってリードの肉体から麻薬は全て取り除かれた。だが、これからが勝負だとアキは言う。

「禁断症状に耐え抜くこともそうだが……一度、麻薬の味を知ってしまった人間にとって、また薬に手を出そうとする衝動を抑えることの方が難しいからな」

そして一度でも墮ちたことのある人間は、悪魔の絶好のターゲットとなる。彼らの誘惑を退け続ける意志の強さも求められると言う。

「アキは、何とか出来ないの？ 悪魔がリードに近寄れないようにするとか……」

「忘れるな。俺も悪魔だ。闇世界の倫理に違反しているならともかく、同族がリードを誘惑するのを防ぐことは出来ない。最終的に、悪魔の囁きに乗るか乗らないかは人間自身が決めることなんだ」

ニーナは黙り込んだ。アキの言っていることは良く分かる。

この世界では、至る所に悪魔の誘惑が溢れている。けれどそれに乗るか反るかの選択権は、人間に与えられている。悪魔にそれを強要する力は無い。だからこそ、人間がどんな選択をしてどんな行動をとるかについては、その人自身の意志であり責任になるのだ。

エミリアはリードが救出された日からずっと、彼についている。

彼女はリードが社会復帰できるようになるまで、彼を支え続けると強い決意を固めていた。

アキから詳しい話を聞いたビルフレッドは、ならばとエミリアを身受けすることに決めた。

彼女を別宅に引き取り、そこにリードも連れて行く。屋敷は厳重な警備の下に置かれ、彼ら二人は医療的な専門知識を持った使用人たちに、手厚く保護されることになっていた。

しかしビルフレッドがエミリアを迎え入れる準備をしている話、どこからか漏れたらしい。

貴族が気に入った娼婦を身受けすることは珍しい話では無い。ただそれが、これまで浮いた話の無かったビルフレッドで、しかも彼は婚約したばかりだったことから、噂は瞬く間に宮中に広まった。そしてそれがレナスの耳に入ったのである。

今朝、興奮した様子のレナスがやって来てニーナに話をしていると、彼女に負けず劣らず取り乱した様子のビルフレッドが駆けつけて来た。

とりあえず二人とも頭を冷やして話し合え、とニーナは彼らを自分の隣の部屋に押し込んだのである。

「愛情が重いタイプだな、レナスは」

「そうね。面倒くさい女だと思う」

アキの言葉をあつさり肯定するニーナ。何気に酷いことを言っている。

「でも良いんじゃない？ ビルフレッドはそれを可愛いと思えるタイプみたいだし」

ニーナの言葉にアキは顔をしかめた。

リードを引き渡す場面に立ち会おうとしていた彼は、すでに一時間近く待ちぼうけをくらっていた。

退屈そうにしていたアキだったが、向かい合って座っているニーナを見て、ふと思い出す。

「そう言えば、まだ魔力を注入していなかったな」

ニーナは一瞬きよんとしてから、ああ、という顔をした。

無言で彼女を呼び寄せると、大人しくニーナは椅子から立ち上がって近づいてきた。

チラリとドアに視線をやったアキは、レンが邪魔しに来ないよう魔法をかける。

ニーナがレンへの想いを断ち切ったらしいことは分かるが、レンが彼女を妹のように思い、守ってやろうとする気持ちに変化は無いだろう。

ニーナの腕を取り、相変わらず抱き心地の良い柔らかな肢体を抱きしめる。以前のように強張ってもいないし、ぎこちなさも無くなっていた。

満足感を覚えながらニーナの髪をそつと耳にかけてやり、唇を重ね合わせる。僅かに開いた隙間から舌を潜り込ませて、彼女の様子は変わらなかった。アキは今まで出来なかった分を埋め合わせるかのように、深く口づける。

「はっ……んうっ……」

こんなに長いキスを経験したことの無いニーナは、息苦しくなってきた思わず喘いだ。

しかしアキは止める様子が無い。相変わらず彼女の唇を貪り続け

ているし、背中に回った腕はびくともしない

アキの長い舌に翻弄されながら、ニーナは何だか疑問を感じ始めていた。いつもこうして彼のなすがままになってしまう。

もうレンに遠慮することも無いのだし、将来、娼婦になる可能性もゼロでは無いのだから、もっと自分も技術を磨いた方が良いのではないだろうか。

ニーナはおずおずと、アキの背中に手を回してみた。きゅっと力を込めると、アキの身体がピクリと反応する。

先ほどよりも身体が密着し、アキの胸の中にすっぽりと納まる感覚が何となくニーナに安心感を与えた。

そしてアキの舌の動きに集中する。しばらくそうしていた後、ニーナは自分の舌も差し入れてみた。アキの舌の裏側を、そっと前後にくすぐってみる。

突然ニーナはすごい勢いでアキから身体を引きはがされた。目をぱちくりさせて、アキの顔を見つめる。

彼はニーナの肩を両手で掴み、腕をつっぱって彼女の身体を出るだけ離れた位置に押しとどめていた。

その目には「信じられない」という驚きの表情が浮かんでいる。そしてニーナのしている前で、みるみるアキの顔が赤く染まって行った。

「……え？」

意外な展開に、ニーナの口から掠れた呟きが漏れた。

「おまつ……！」

アキが口を開きかけたものの、彼は途中で言葉を切ると、視線を逸らせて片手で口元を抑えた。

ニーナも困惑し、そのまま気まずい沈黙が続く。

扉の向こうから、ノックに続きレナスの声が聞こえた時、ニーナは心底ホツとした。

急いでそちらに向かう。

「ごめんなさいね、待たせてしまって」

部屋に入ってきたレナスの顔は幸せそうで、頬が上気している。ビルフレッドも同じように目を輝かせ、自信に満ちた顔をしていた。ただ、どこか疲れたような顔をしていないだろうか？彼の緩められた襟元に視線をやったニーナは、無言でアキの顔を振り返った。既にいつもの調子を取り戻していたアキの顔を見れば、同じことを考えているのが分かる。

「……………」
考えてみれば、いくらビルフレッドが堅かるうとも……………絶世の美少女、愛しいレナスの威力に勝てるはずが無かったのだ。

「利用料金、とっておいた方が良くないんじゃないか？」

「いや、いい。面倒くさいし、一つ貸しにしとく」

ニーナとアキのやり取りを、不思議そうに聞いているビルフレッドに対し、レナスは真っ赤な顔で反論した。

「さっ……………最後まではしてないわよ！ビルはそういう所、きつちりしてて……………」

「姫?!」

ぎょっとした顔でレナスを見るビルフレッド。

仲良く焦っている二人を見ながらニーナは、「いいよレナス、教えてくれなくても。聞くつもりないし」と手をひらひらと振ってみせた。

実際、彼女にとってはどっちでも良い。どうやら二人とも平和的に問題を解決したようだし、それだけ分かれば十分だ。

何だか不満そうに口を噤んだレナスと、気づかうようにレナスの肩に手を回したビルフレッドが部屋の中央に進み出た。

アキは、先ほどまで彼とニーナが座っていた椅子を二人に指し示し、自分はベッドに腰掛ける。その隣にニーナがちょこんと座った。「……………さて。長く待たされたが……………真面目な話を始めるとしようか」アキが重々しく口を開いた。

13、決着

多くの人々がまだ夢の中を漂い、早い者はそろそろ起き出そうかとする時間帯に、それは行われる。

「剣入けんいりである！ 全員その場を動くな！」

険しい声が早朝の空気をビリリと切り裂く。地面に降りて来ていた鳥たちが、派手な羽音を響かせて一斉に飛び立った。

「け、剣入……」

真つ青になつた門番の姿を意に介さず、揃いの制服に身を包んだ集団が建物の中に踏み込んでいく。その先頭で指揮を執るのはビルフレッドだ。

ランカード商会はその日、正剣隊による手入れ、通称「剣入」を受けることになった。これが行われるのは、有罪が確固たる証拠によつて決定している対象に限る。つまり、ランカード商会が何らかの違法行為を行つていたことが正剣隊の調査により明らかになったのである。

同時にその事實は、騒ぎを聞きつけて家の外に出てきた野次馬たちにも、建物内部の使用人たちにも知れ渡ることになる。

よほどの悪事を働かなければ「剣入」を受けるとは無理。ゆえにこの立ち入り調査を受けた者は、世間から冷たい視線で見られることになる。この日は事実上、ランカード商会の倒産が確定した日となった。

寝耳に水という顔で立ちすくむ使用人たちの前を通り過ぎながら、正剣隊の隊員たちははてきぱきと己の任務をこなしていく。

統制のとれた無駄のない動きを見つめながら、ビルフレッドは焦つていた。部下たちの手によつて、ランカード商会がターマの違法取引を行つていた証拠が続々と集められてくる。だが、肝心のランクル・ランカードの姿が見つからない。

突入から一時間余りが経ち、我慢できずに自らも屋敷の隅から隅

までを探し……ついにビルフレッドは認めざるを得ない結論にたどり着いた。

「……ランクルは、どこへ逃げたのでしょうか？」

きつく眉根を寄せたビルフレッドは、困惑した部下の質問に答えることが出来ず、唇を噛んだ。

「思ったよりも嗅ぎつけられるのが早かったな」

ランクル・ランカードは服についた土埃を払いながら、チラリと後ろを振り返った。

剣人が行われる直前、魔王ヴォルトスの警告によってそのことを知ったランクルは、秘密の抜け穴を使って間一髪、建物外部へと脱出していた。

恐らく既に、商会の保有する倉庫や船はもちろんのこと、ランクルの所有する別荘にも正剣隊の隊員たちが張り込んでいることだろう。

しかし彼には勝算があった。闇世界との隔たりが薄い場所はいくらでもあり、そこに行けば魔王ヴォルトスの力でどうにでもなる。

「ランクル！」

絶叫に近い鋭い声が、背後から突き刺さった。

ゆっくりと振り返ると、そこには二人の少女に両脇から支えられたエミレア・ランカードが立っていた。憎しみと殺気でぎらつく目で、こちらを睨みつけている。

「エミレアじゃないか。元氣そうだな」

「ふざけないで！ 貴方が何をしてきたか知ってるのよ。よくも……よくもランカード商会の名を貶めて……！」

怒りでぶるぶると唇を震わせるエミレアを見て、片方の眉を上げるランクル。

「ランカードの血など流れていないお前に、とやかく言われる筋合いは無いな」

「よくもそんなことを！ お父様の築き上げたものを踏みにじり、

リードにあんな仕打ちをしておいて！」

激昂して今にも飛びかかろうとするエミリアの身体を押しとどめ、左側から彼女を支えていた少女が前に出る。豊かに波打つ水色の髪に、勝気そうな目元をした少女だった。

「お初にお目にかかります、ランクルさん」

「君は？」

「レナス・ヴィオレッタ・ヨーフ。ヨーフ侯爵家の公女にして、正剣隊隊長ビルフレッド・ヘザー・レイの婚約者です」

「……それで？」

「夫の敵は私の敵。ビルフレッドに代わり、私が貴方に正義の刃を振り下ろします」

レナスの足元から冷気が立ち上がり始め、彼女の髪がゆらゆらと宙に漂い始める。そのレナスの手の中に、ニーナがそつと指輪を潜り込ませた。アキから預かった「根源の指輪」だ。

指輪を装着したレナスの魔力が一気に上がり、周囲の空気を塗り替える。その圧倒的な力を目にしたランクル・ランカードの顔に緊張が走った。

「覚悟！」

突き出したレナスの両腕から、圧縮された水の塊がいくつも飛んでいく。温度と質量を絶妙なバランスで調整されたそれは、風魔法による加速も加わり、かなりの硬度を持つ。そんなものを連続で繰り出されれば、受ける人間のダメージは計り知れない。

「ぐはっ！ あああああっ！」

両腕で顔を庇い、痛々しい悲鳴を上げるランクル。その様子を、青白い顔色をしながらも毅然とした様子でエミリアは見つめている。ニーナはチラリとレナスの顔を見上げた。魔法に長けたレナスのことだから、ちゃんと手加減しているとは思っただが……ここに来る前に「くれぐれもランクルを殺すな」と念押ししたニーナに対して「生きてれば良いんでしょ」とレナスは言い放ったのだ。

彼女はランクルに対してひどく腹を立てていた。違法薬物を取引

していたことよりも、エミリアとリードにした仕打ちの方に。愛し合う二人を残酷な方法で引き裂いたそのやり方は、恋する女のレナスにとつては到底許し難いことだったのである。

加えて、ランクルを捕まえることでビルフレッドの仕事を手伝える、という事実が彼女を燃え上がらせた。「妻としての義務」と恍惚とした表情で言うレナスはどう見ても「未来の妻」という立場に酔っている。

この二つの感情が入り混じっている彼女が暴走することは、十分にあり得る話だったのである。

いざとなつたら力づくで止めないと、とこつそり決意を固めていたニーナだったが、ふとランクルの様子が変化していることに気がついた。

いつの間にか、彼の悲鳴が止んでいる。

ざわり、と悪寒を感じたニーナが本能的に危険を察知する。咄嗟に「レナス！」と叫ぶと、その声を聞いたレナスが反射的に防御魔法を展開した。

直後に響き渡る爆音。

「きゃあああああつっ！」

レナスの強固な防御魔法に遮られてなお、圧倒的な勢いを持つ爆風が少女たちに襲いかかる。ニーナはバランスを崩したエミリアに飛びつくと、自分の身体を下にして地面に倒れ込んだ。

「ニーナ?!」

「あつっ……だ、大丈夫」

お腹の子供だけは守らねばならない。どうしてもついでいくな言つて譲らないエミリアの同行を認めた時から、ニーナとレナスは肝に命じていた。

気絶したエミリアの身体をしっかりと抱きしめながら、ニーナは首だけで周囲を見渡す。よほどの威力のある爆発だったのだろう。レナスの防御魔法の届く範囲以外は全て、地面の形が変わるほど深く抉^{えく}られていた。

「すご……そつちは大丈夫？」

「奥歯が欠けたわ」

先ほどの爆発は、レナスでさえ歯を喰いしばって耐えなければならぬほどの威力だった。彼女は口からぷつと歯の欠片を吹き出す。なんだか行動がどんどんワイルドになっているような気がするが、これは果たして自分の影響だろうか、と緊迫した状況下であるにも関わらずニーナは考えてしまう。

「……死ななかつたか。やはりココではこれが限度のようだな」

嘲るようなランクルの声に振り返ったレナスとニーナは、思わず息を呑んだ。

「何よあれ！」

レナスが悲鳴を上げる。ランクルの額は右半分が異様なほどに膨らみ、そこに別の顔が浮かび上がっていた。そのグロテスクな様子にニーナは声も出ない。

二人の見つめる前で、ランクルは口を半分だけ吊り上げて笑った。

「人間にしては魔力が大きいようだが、その程度では僕は倒せん。

この魔王ヴォルトス様にはな」

「貴方が……魔王ヴォルトス？」

ニーナが疑問を口にする、ランクルが声を上げて笑った。

「その通り。僕はターマを手に入れるために、闇世界から魔王リステルを召喚した。だが奴にとっては、ターマの横流しなど僕を引っかけするための餌に過ぎなかった。リステルの本当の狙いは、僕の身体を乗っ取ることだったのだ」

「じゃあ、それが魔王リステル？」

レナスが震える指で、ランクルの額に浮かび上がった顔を指差した。奇妙に青白いその顔は無表情で、どことも知れぬ方向を虚ろな目で見つめている。

「その通り。奴は人間の……僕の意志の力を見くびっていたのだろ。リステルは僕の身体を乗っ取るつもりが、逆にねじ伏せられて同化させられた。おかげで奴の知識も魔力も僕のものになり、僕は

新たに魔王ヴォルトスとなったのだ」

ランクルの齒の間から、くくく……と心底おかしそうな声がかかる。

「分かるか？ 今の僕は通常の間人以上の魔力を持っている上に、闇世界との隔たりが薄い地に行けばほぼ無敵となる。おまけに魔王となった今、闇世界とも自由に行き来できるのだ」

その口調にピンと来たニーナが声を上げる。

「この騒動が治まるまで、闇世界で身を潜めるつもりね」

「その通り。百年後か二百年後か……人間どもが僕のことを忘れたころ、再び現れてこの世に腐敗をもたらそう。そして金を儲けさせてもらう」

ニーナがランクルを睨みつける。恐らく悪魔にとりつかれる前のランクルは、金と権力を欲する俗人だったのだろう。それが悪魔と同化してしまったおかげで、人間界に悪と混乱をもたらすという悪魔の本質まで身につけてしまったのだ。

以前、アキが言っていた。根源の指輪を手にしたレナスの力には、上級悪魔ですら敵わないかもしれない。言い換えれば上級悪魔以上の悪魔、たとえば魔王相手では負けると言うことだ。おまけにレナスは今、ニーナとエミリアのことも守らなければならない。

この場所は闇世界との隔たりが薄い土地では無いが、それでもさつきと同じぐらいの攻撃を受ければレナスと言えど無事では済まされないだろう。形勢は圧倒的に不利だった。

ランクルもそれは十分、承知している。彼はひとしきり笑った後、残酷な笑顔を浮かべて少女たちを見据えた。

「それでは、そろそろ行かせてもらおうか」

「残念ながらそれは無理だな」

いつの間にかランクルの背後に出現したアキが、冷静な声で言った。彼の姿を認めたレナスとニーナが、ほっとした笑みを浮かべる。けれどランクルの方も、魔王としての余裕なのか全く動じた様子も無く、穏やかに口を開いた。

「ほお。儂に気づかれずに背後をとるとは、大したものだ。闇世界の者だろう？ 名前は？」

「聞いてどうする」

「貴様が上級悪魔なら、儂が闇世界に戻ってから部下に取り立ててやるうと思つてな。もし魔王の一人であれば、貴様を殺した後で議会に報告しなければならんし」

ランクルの言葉を聞きながら、ニーナは首を傾げた。闇世界の階級制度というのは一体どういう仕組みになっているのだろうか。

アキは表情一つ崩さずに、ランクルの質問に答える。

「議会には俺が報告しておいてやるう、魔王ヴォルトスよ。……俺の名前はアキレティウスだ」

少女たちの目の前で、ランクルの顔色がはつきりと分かるほどに青くなつた。

彼は振り返りざまに魔法を放つたが、アキの放つた魔法がそれを叩き落とし、なおかつランクルの身体に突き刺さる。ランクルの額から切り取られた魔王リステルの顔が、びちゃりと音を立てて地面に貼りついた。

「た…… 太閤自身が……なぜ……」

絞り出すような声で、初めてリステルが口を開いた。そしてそれが彼の最後の言葉となつた。

「がっ……あっ……！」

一際大きな叫び声を上げると、リステルの顔は蒸気となって霧散する。後には力を失つたランクルの身体だけが地面に残された。

14、波乱の予感

ニーナは椅子に座って手足を伸ばしながら、コップを取り上げた。からからに乾いた喉を通り過ぎて行くのは生暖かいレモン水だ。

その隣ではアキが「この炎天下に、よくそんなものを飲めるな」と言った顔で彼女を見つめている。

だがニーナは普段から冷たい飲み物を好まない。身体が冷えると筋肉の柔軟性が損なわれる。それが怪我につながる危険もある。だからこそ、今日のようにいくつもの舞台をこなさねばならない日ほど冷たい飲料は避けるのだ。

むきだしのニーナの肩が、日に焼けて少し赤くなっているのを見下ろしてから、アキはジロリと周囲を睨みつけた。二人の座るテーブルを遠巻きにしながら、数人の男子生徒がニーナに熱っぽい視線をちらちらと送ってきている。それを牽制するための一瞥だった。

学園の校庭に作られた特設会場は、熱狂した観客に取り囲まれてその姿を隠している。しかしその上では今、レナスが完膚なきまで対戦相手を叩きのめしているはずだ。

「あの分なら上位入賞は間違いないでしょうねえ……」

「そもそも何で急に出場することにしたんだ？」

ランクル・ランカードが逮捕され、薬物事件が治まってから数日後。レナスが突然「魔法技術格闘大会」に出場すると宣言したのだ。「ビルフレッドと一緒に働きたいから、正剣隊に入るんだって」

「女は入隊できないんじゃないか？」

「あれだけの實力を見せつけられたら、王宮関係者も認めざるを得ないんじゃないかな。レイチエルの話だと、女性部隊を作らせるために宮中で駆け回ってるそうだし」

「……唄い手になる夢はどうなったんだ？」

「唄い手兼軍人、っていう初めての存在になるって張り切ってたけど」

「……………」
呆れたようにため息をついたアキとは対照的に、ニーナはレナスらしいと感心していた。

今回の逮捕劇を通してレナスは、ビルフレッドがいつ命の危険に晒されてもおかしくない職務についていることが身に染みたらしい。実際には今回、ビルフレッドはかすり傷一つ負わず、危ない目に遭ったのはレナスの方だったのだが。

「ビルの身を心配しながら帰りを待っているぐらいなら、一緒に戦うわ」と言い切ったレナスは、正剣隊への入隊を決意した。それでいて昔からの夢も諦めない。どんな困難にもめげずに、自分のやりたいこと全てを叶えるために努力を惜しまない。

恐いもの知らずなせいもあるだろうが、運命を切り開こうとしていくレナスの強さをニーナは羨ましいと思った。

ややあつて、再びアキが口を開く。

「ビルフレッドはそれで良いのか？」

レナスが内緒で剣入りにしてきたこと、そしてランクルと対決したことを知ったビルフレッドは激怒した。さんざんレナスに対して「無茶なことをした」だの「こんな危険なことをして」だのと叱りつけた拳句、泣きながら彼女を強く抱きしめたのである。

普段の彼からはとても考えられない、ビルフレッドの感情に任せた行動を目の当たりにし、正剣隊の隊員たちは顎が外れるほどの衝撃を受けた。

「うん。もうレナスの性格は分かったみたいだし」

ニーナが笑顔を浮かべる。

婚約が決まったばかりの頃に比べると、レナスとビルフレッドの間に流れる空気は随分と変わってきた。恐らく二人でじっくりと話し合った上で、ビルフレッドはレナスの決意を受け止めたのだ。ならば部外者がとやかく言う筋合いは無い。

「あ、そろそろ行かなきゃ」

ニーナは立ち上がると、テーブルと屋台の間を抜けて舞台へと向

かった。既に気持ちは次の踊りに集中しているらしく、ピンと背筋が伸び、何とも言えない雰囲気を醸し出している。

アキは複雑な顔つきでその姿を見送った。舞台用に作られた薄絹の衣装は、年齢の割に大人びたニーナの身体のラインをくつきりと浮き出させている。それに加えて、踊りのことを考えている時のニーナは匂い立つような色気を放つ。

彼女が通り過ぎる度に生徒たちの視線がニーナの後姿を追いかける様子を見て、アキは衣装を用意したジン教授を吊し上げたくなかった。

「お邪魔してもよろしいでしょうか」

背後から聞こえた声にアキが振り返ると、腰まで伸ばした銀髪の青年が立っていた。もしニーナがこの場に居れば驚いたに違いない。それは彼女が泉で出会った、ジェイレんティスキと名乗った男だった。

「来ていたのか、ジェイ」

アキが手振りで座るように示すと、ジェイレんティスキ ジェイは先ほどまでニーナが座っていた椅子に腰かけた。

生徒たちは全員ニーナの舞台に注目していて、誰も二人に注意を払わない。

「魔王リステルの計画に加担した上級悪魔含め、数十名の関係者の処刑が完了いたしました」

「ご苦労だったな」

「とんでもありません。今回のことは全て、私の未熟さが招いたこと。ご迷惑をおかけしてしまつたことを申し訳なく思っております」
テーブルにつきそうなほど深く、ジェイが頭を下げる。

実は、闇世界におけるターマの管理は彼が一手に担っていたのである。ビルフレッドから薬物事件の話聞いたアキは、何者かがジェイの保管庫からターマを盗み出して人間界に密輸していることを知った。

アキからそのことを教えられたジェイは、闇世界側から調査を開

始した。しかし彼が事件を解決する前に、アキの手によって事件は終わってしまったのである。

ジェイにとつては事件そのものよりも、アキの手を煩わせてしまったという事実の方が問題だった。それだけは何としても避けたかったのだが……。

唇を噛んで頂垂れているジェイに、アキが顔を上げるよう声をかける。

「窃盗事件なんかは闇世界じゃ日常茶飯事だろう。いちいち気に病んでたらキリが無い。それよりも……厄介なことになったな」

ジェイの表情が固くなつた。

魔王の一人が人間の身体を乗っ取るうとした。それは闇世界と光世界の倫理規定に反する行為だ。おまけにターマの密輸まで絡んでいるとなれば、ジェイに対する光世界の追及はさぞかし厳しいものとなるだろう。ジェイ自身が裏で糸を引いていたという疑惑が持ち上がることは、もはや避けられない。

「……ダツキの仕業、なんだろうな」

アキの言葉に、ジェイの身体が僅かに身じろぎした。

あの女のことだから証拠は何一つ残していないだろう。アキの手によって幽閉されてからかなりの年数が経っているというのに、いまだにジェイの失脚を狙う女狐。

彼女にとつて誤算だったのは、魔王リステルが人間と同化してしまったことだった。光世界も交えた裁判では証人としてランクルも召喚される。彼の証言があれば、ジェイはターマの保管に関する失態は責められても、事件の関与についての身の潔白は証明されるはずだ。

しかしそれはそれで、新たな問題を闇と光の両世界に投げかける。なぜならダツキのみならず全ての悪魔と善魔が、人間の力を見くびっていたからだ。人間が意志の力で魔王と同化できるなどと、誰が考えただろう。仮にそんな説を持ち出されても笑い飛ばされるのがオチだったに違いない。少し前までは。

この事件が明るみに出れば、両世界は騒然となることだろう。そして早急に人間に対する認識を改めねばなくなる。恐らく調査のためという名目で、悪魔も善魔も積極的に人間界に出てくることになる。彼らがアキの存在に気づいた時、何の関与もしてこなければ問題ない。だがもし、ちよっかいを出してくるとなると……

「面倒だな」

心底嫌そうな顔で呟くアキに対し、ジェイが「そろそろ闇世界に戻らてはいかがですか？」と気づかうように尋ねた。

闇世界と人間界では時間の流れが違う。アキが人間界で過ごした時間など闇世界側から見ればほんの一瞬にも満たない長さなのだが、それでも今までにない長い間アキが不在になっていることが、ジェイの不安をかきたてた。

「……まだ戻るつもりは無い」

そう答えたアキの視線の先では、観客の注目を一身に浴びてニーナが踊っていた。

その眼差しがジェイの心の中を冷やしていく。彼女がアキの使い魔だということは、アキ自身から聞いて知っていた。

盗まれた指輪を追ってアキが闇世界を出て行ったときは、すぐに戻って来るだろうと思っていた。けれど彼は指輪を取り戻した後、そのまま人間界に居座ってしまったのだ。

新しい使い魔が出来て、まだ目を離せない。

それがアキからジェイに語られた理由だった。

アキの心をそこまで掴んだのは、一体どんな使い魔なのか。嫉妬と好奇心に駆られたジェイは密かに調査を開始した。そしてそれが、何の変哲もない人間の少女であることを知ったのである。

彼女のことを調べれば調べるほどジェイは混乱した。ニーナと呼ばれている少女は、どこから見ても平凡極まりない、ただの人間だった。

ある日、どうしても我慢できなくなったジェイは密かにニーナに会いに行った。そして泉の側で彼女に治癒魔法をかけようとした時、

気づいたのである。彼女の中に眠る女神の存在を。

ジェイがそのことに気づいたのは、彼自身が半分だけ神の血を引いていたからに他ならない。魔法が効かないと分かった瞬間、彼は自分の神力しんりょくを使い、ニーナ自身の治癒力を上げてやった。

魔法が傷を外側から縫い合わせる方法だとすれば、神力は傷ついた肉体を内側から再生させる方法である。思った通り、ニーナの身体は神力をすんなりと受け入れた。

世にも珍しい、女神の生まれ変わり。それがアキの関心を惹く人間の正体だった。

だが、そんな者をジェイは認めるわけにいかなかった。魔力が低く、ごく初歩的な光魔法すら使うことが出来ない。おまけに女神の生まれ変わりと云っても、美と舞踏の神ムーサテリユーズだ。踊っている時しかその真価は発揮されず、戦闘においては何の役にも立たない力。容姿も平凡で、敬愛するアキの側に仕える者としては、とても相応しいとは思えなかった。

しかめ面でニーナを眺めながら、ふつふつと怒りをたぎらせていたジェイは、アキに話しかけられていることに気づくと慌てて意識を引き戻した。

「とりあえずダツキの監視は増やしておくが……俺が事件に介入したことは、あまり知られたくない。できるだけ隠しておいてくれ。後始末は任せた」

面倒くさいことは避けたいという自分本位な要求だったが、ジェイにとつてアキの頼みを聞くのは至極しごく当然の話であつたため、素直に頷いた。

アキはそれだけ確認すると「じゃあな」と舞台へ足を向けた。踊り終えたニーナを捕まえるためである。

内心はどうあれ、アキの歩く姿は悠然としている。ジェイが「王者の貫録」と見とれるほどに堂々とした立ち居振る舞いに加えて、あの涼し気な美貌。

完璧なその姿にこっそりため息をついた後、ジェイの意識はアキ

の傍らに寄り添う少女へと向かう。 平凡で、無能で、役立たずのくせにアキの使い魔という立場を手に入れた少女。

「……私は認めませんよ、義兄上^{おにいさん}」

毒をはらんだ咳き一つを残して、ジエイの姿は揺らめき、消えた。それはあたかも、夏の日差しが見せた塵気楼のような消え方だった。

1、それぞれの恋（ミレイユ）（前書き）

東の間の平和に語られる、過去のお話し（外伝）

1、それぞれの恋（ミレイユ）

春の次にやってくる霧の季節はベタつく湿気に悩まされるが、夏が始まってしまふと嘘のように空気は乾燥する。照りつく日差しは暑いけれど、木陰に入れば涼しい。

ウィッチグラスの庭にある大木の下では、ささやかなお茶会が行われていた。

「美味しいわ、このケーキ」

「イエローベリーがいっぱい採れたから、ちよつと入れてみたの」

ニーナが焼いたケーキに幸せそうな微笑みを浮かべるレナス。その隣ではビルフレッドがせつせと菓子を頬張っている。彼が意外と甘いもの好きだということが、最近になって分かってきた。

一方、甘いものの苦手なアキの前にはリキュールの風味が強いケーキが置かれている。これも我が儘な主人のためにニーナがわざわざ作ったものだ。

「本当に美味しいわ。後で作り方を教えてくれない？」

レナスの一言にビルフレッドの動きが止まる。ティーポットを持ち上げたニーナも、困ったという表情を浮かべて視線を逸らせた。

近頃のレナスは花嫁修業のつもりなのか、家事をやりたいがる。ビルフレッドと結婚したとしても彼女が家事をやる必要は無いのだが、「ビルフレッドのために自分が何かしてあげたい」という欲求に駆られているようだ。

ところが残念なことに、レナスには料理の才能が無かったらしい。ニーナは魔力が弱いために、料理中は魔法に頼らずに全ての工程を手作業で行う。それに比べればレナスは魔法を駆使して効率的に料理できるはずなのに、出来上がるものは……一口食べれば後は二度と見たくない、というものが多かったのである。

「……適当に作ったから、忘れちゃった」

ニーナが言葉を濁すと「それは残念だわ」とレナスはがっかりし

た様子だったが、諦めてくれたらしい。

ビルフレッドは相変わらざるの無表情だったが、その目の奥で安堵の光が浮かんでいるのをニーナは見逃さなかった。

これまでに何度もレナスの「お手製」を食べさせられている彼は、愛しい娘が自分のために作ってくれた料理を残すことなど出来ず、何度も苦行に耐えてきたのだ。

レナスの気持ちは嬉しいが、正直いつまた「お手製」を持ってこられるかと身構えていたビルフレッドは、目の前で新たな試練が消え去ったことにホッとしていた。

薬物事件以来、特に大きな事件も無く王都では平和な日々が続いているらしい。

ビルフレッドはレナスと共に足しげくウィッチグラスに現れるようになった。もちろん客としてではなく、ニーナの友人としてである。

だが未婚の男女が頻繁に娼館に出入りしているなど、あまり聞かぬの良いい話では無い。レナスとビルフレッド　今ではニーナも「ビル」と呼べるようになった　は気にしないと云っていたが、彼らに会うのを営業時間外に限定したのは、ニーナなりの配慮であった。

こんな風に戸外で四人で会う分には、誰もいかがわしいことをしているとは思わないだろう。

放っておけばレナスとビルは二人の世界に入り込んでしまう。一人でその甘すぎる空気に立ち向かう気力の無かったニーナは、店で寝ていたアキを起こして巻き込むことにした。

最近のアキは日を置かずに、ほぼ毎日のようにウィッチグラスを訪れては泊まって行く。しかもデイジーを抱くわけでもなく、単に食事をして寝るだけのために。

全く意図の分からない行動だったが、アキは金払いの良い上客だったので、店側としては何の問題も無かった。レンは相変わらず苦い顔をしているけれど、アキが通ってくることを渋々ながら黙認し

ている。

そして週に一度、全員が寝静まった頃を見計らってニーナはアキの部屋を訪れる。魔力を注入してもらおうという名目で。

なぜ彼が学園で魔力を注入しなくなったのか、ニーナには分からない。アキは一言「見つかる可能性が高くなった」と言っただけだったから。そして彼女も、それ以上の理由は聞かなかったから。例のごとくあっさりと、ニーナは「そうなんだ」の一言で現状を受け入れた。

昨夜、魔力を注入された時のことを思い出したニーナの鼓動が、早くなった。

最近のアキはニーナを寝台に横たえようと、まず至近距離から顔をじっと見つめてくる。その眼差しに見つめられると、ニーナの身体は不思議な感覚に支配される。指一本動かせない状態のまま、目を逸らすことも出来ずに、彼の次の動きを待つのである。

やがてゆっくりとアキの顔が近づいてきて、二人の唇が重なる。じっくりと味わうかのように、アキの舌がニーナの口腔内を蠢く。すっかりその動きに慣れたニーナも、少しだけ彼の舌を吸ってみたい、舌先でくすぐってみたりする。その間中、彼女の胸は痛いほどに高鳴り続けるのだ。

キスしながら、アキの手が優しくニーナの身体を撫でていることもある。その感覚は嫌じゃない。段々とニーナの身体から力が抜けて、すっかりリラックスした状態になるとアキは身体を離すのである。

「また、一週間後に」

背中を向けたアキにそう言われれば、ニーナは素直に頷いて退室する。けれど身体の奥底から沸き上がる、よく分からない衝動が彼女の身体を火照らせる。繰り返しアキの顔と彼の行為が思い出されて、なかなか寝付くことが出来なかった。

娼婦たちの会話に耳を傾けて育って来たニーナである。これがいわゆる「性欲」と言うもので、自分は焦らされたために「悶々とし

て「いるのだろうと思った。

なるほど。これは……たまったもんじゃない。

今更ながら男性客の言う「生殺し」という言葉の意味を実感し、彼らに深く同情した。しかし客を焦らすのも娼婦のテクニクの一つだ。客のみならず自分の性欲までもコントロールできるようにならなければ、一人前の娼婦にはなれない。

自分もいずれば、逆にアキを「生殺し」にするほどの技術を身につけなければいけないだろう。

昼間つからニーナが、人知れず色っぽいことを考えてると見抜いたわけではないだろうが、レナスがふと漏らした疑問に彼女の意識は引き戻された。

「そう言えば、以前から不思議だったんだけど……ここっでいつ来ても静かよね。営業中に来て、娼婦たちの声が聞こえないわ」

「……そう言えばそうだな」

アキも、今気づいたというように同調した。

ウィッチグラスの建物の内装はきらびやかだが、とりたてて壁が厚くなっているわけでもなく、どこにでもある造りをしている。それなのに睦み合う男女の声が部屋の外に漏れ出すことは無い。

何度か営業時間中にも訪れたことのあるレナスは、それが不思議だった。アキも今まで気にしたことが無かったが、言われてみれば疑問に思う。

「ああ……建物全体にミレイユの風魔法がかかっているから」

そんな二人にニーナはあっさりと種明かしをした。

「風魔法？」

「そう。音って空気の振動で伝わるでしょ？ 部屋の壁に沿って薄く真空状態の空間を作るんだって。真空だと音は伝わらない……ってことらしいよ」

ニーナの言葉にレナスとビルは、そろって絶句した。話を聞いただけでもかなり高度な魔法であることは間違いないかった。

「そ、それって一般公開されてる魔法なの？」

「うっん。元は軍用に開発された魔法らしいから、魔法式は王宮に保管されてるはず」

「なぜそんな魔法が娼館などで……まさか誰かが盗み出して！」
青ざめて立ち上がったビルを「違う違う」と抑えるニーナ。

今にも剣を手に王宮へと駆けつけそうな彼に、とりあえず座るように諭していると、「なぜミレイユがそんな魔法を使えるんだ？」とアキまでが身を乗り出してきた。

彼はミレイユの魔力が高いことを知っていたから、彼女が高度な魔法を使ったと聞いてもさして驚かなかった。しかし、それと一般公開されていない魔法を駆使することとは話が別である。

いくらレイチェルが王宮にコネがあると云っても、一介の娼館ごときに使用を許される魔法ではない。まして軍事目的で開発されたものとなれば、尚更だ。

「その魔法を開発したのがミレイユだからだよ」

ニーナの口から、またしてもあっけらかんと語られた事実を、三人はすぐに理解することが出来なかった。

「開発って……」

「ミレイユ、が？」

「うん、そう。彼女が王宮つき魔術師だった頃にね」

「王宮つき魔術師?!」

「……言ったこと無かったっけ？」

「初耳よ！」

そろって驚愕に目を見開いているレナスとビルを見ながら、ニーナは頬をかいた。アキですら平静を装っているように見えて、結構びっくりしているのが分かる。

「なぜ、それほどの使い手が娼館に？」

呆然とした口調でビルがもつともな疑問を口にする。

チラリと、ニーナが建物の一室を見た。ミレイユの私室になっているその部屋は、開け放した窓から入り込んだ風でカーテンが緩やかに揺れていた。

視線を戻し、話の続きを期待している面々の顔を見回した後、どうしようかとニーナは思索した。

ミレイユが王宮つき魔術師だったことを知っている人間は、ほんの一握りしかいない。ただそれは本人が隠しているからではなく、昔のことを知っている人間が少ないからだ。

彼女が王宮に勤め、どんな魔法を開発したかは全て記録に残っているから、その気になれば調べることは簡単だろう。そこには、ミレイユが王宮を去るきっかけになった事件についても載っているはずだ。

そこまで考えてニーナは、自分が友人たちにミレイユの過去を話しても問題は無いだろうと判断した。

「私も詳しいことは知らないんだけど」と前置きをしておいてから、ニーナは話し始める。

「ミレイユが王宮つき魔術師になったのは、十三歳の時だったんだって」

1、それぞれの恋（ミレイユ）2

城門の前で足を止めた少女は巨大な門柱を見上げて、胸元に抱えていた荷物をギュツと抱きしめた。

内気そうな顔は青ざめ、怯えたように目を見開いている。

今日からここが自分の職場になるのだ。毎日この門をくぐり、一人で中に入って行かなければならない。それは分かっている。

なのに……どうしても足が動かせなかった。覚悟を決めて来たはずなのに。

おずおずと視線を戻せば、橋の向こうで門番が胡散臭そうにこちらを見ているのが目に入った。それだけでもう、泣きそうになってしまう。

「しっかりとしなきゃ……しっかりとしなきゃ……」

少女は震える声で呟くと、ぐつと気合いを入れて足を踏み出した。自分に注がれる門番の視線を感じ、頬に血が上る。なるべく足元を見ながら慎重に歩いていくことにした。

「あつ………！」

橋の三分の一ほど進んだ所で少女のつま先が横木の隙間に挟まり、派手に転倒してしまった。

「うっ……くっ……」

すりむいた掌の痛みよりも、打ち付けた胴体の痛みよりも、恥ずかしさの方が上回っていた。

羞恥に顔が赤く染まる。もう駄目だ。顔を上げて、こちらを見ているであろう門番たちの視線に向き合うなんて、とても出来ない。

やはり自分には無理だったのだ。家に帰って、ここでは働けないと養父様おやじさまに謝ろう。

少女がそう決意した時だった。

「あなた、大丈夫？」

優しい声が降ってきたと思ったら、ふわりと少女の顔は柔らかい

ものに包まれた。

びっくりして見開いた少女の目に映ったのは、見たことがないほど美しい女性だった。

(め、女神……?)

歳は恐らく自分と同じぐらいだろう。けれど抜けるように白い肌ときらめく緑色の瞳を持ち、豪華な金色の髪に縁どられたその顔は、とてもこの世のものとは思えなかった。

自分の頬を両手で包み、至近距離から覗き込んでいた女神は、何かにハッと驚いたような顔をした。そしてすぐに薔薇の花さえ色あせるほどの微笑を浮かべたのである。

「この橋は隙間が多いから気を付けて」

優しく顔の泥をぬぐってくれる女神の手の柔らかさに、少女の心臓は早鐘を打つ。

床に転がったまま呆然と彼女の顔を見つめていると、女神はくすりと笑って優雅に立ち上がり、門番の方へと歩いて行った。

彼女が右手の甲を掲げる。そこには少女が持っているのと同じ、通行証代わりの魔法石が指輪の台座に収められていた。

門番たちが敬礼をして女神を通す。

彼女は通り過ぎる際に、何かを彼らの耳元に囁いた。門番たちの視線が倒れたままの少女に移り、頷く。女神はチラリと後ろを振り返った後、そのまま薄暗い廊下の奥へと消えた。

その姿をじつと見つめていた少女は、近づいてきた門番の手を借りずに自分で立ち上がると、服のほこりを払った。そして女神の消えた方向を見据え、ゆっくりと歩き出す。顔には夢みるような表情が浮かび、その足取りにはもう、迷いは無くなっていた。

彼女は胸元にしまっていた通行証を取り出すと、門番の近くに置かれた登録装置の上にかざし、かほそい声を張り上げた。

「ミレイユ・ハリバートン。王宮つき魔術師『風魔法の部』所属。本日より登城いたします」

「ここが研究室だ」

ミレイユが案内されたのは、王宮の庭園に造られたあずま屋だった。かなりの大きさがあるとはいえ、壁も扉もない造りの建物にミレイユは戸惑いを隠せない。そこは「研究室」という言葉から想像される姿とは、かけ離れた場所だった。

そんな彼女の気持ちを看透かしてか、その場に居た数名の魔術師がバカにしたように笑った。

「風魔法の研究室なんだから、風が出入りできなきゃ意味が無いだろう？」

ミレイユの頬がカツと染まる。

逃げ出したい気分だった。でも、もう後戻りはできない。

「気にするな。誰でもここに来た当初は戸惑うものだ」

ミレイユを案内してきたブリーズ室長が、制服である水色のローブを差し出しながら言った。

「この研究室に君のような優秀な魔術師が入って来てくれたのは喜ばしいことだ。期待しているぞ」

ブリーズがミレイユの肩に手を置いて、微笑んだ。

優しく力強い、人に頼られることに慣れているその笑顔がミレイユを勇気づける。

今朝王宮に足を踏み入れて以来、初めて彼女は笑顔を浮かべた。

はにかみながら「はい」と返事をする。

その後ろで同僚たちが冷ややかな目つきで彼女を見つめていることなど、ミレイユが気づくはずもなかった。

風魔法の研究室の近くには、清水の流れる小川があった。いつも肌を突き刺すほどに冷たい水が流れるそこで、仕事を終えた後に顔

を洗うのがミレイユの日課になった。

そうでなければ真っ赤に泣きはらした顔のまま帰宅しなければいけないからだ。

「ひつく……ぐすつ……」

顔から滴り落ちる水滴に、ミレイユの涙が混じる。鼻を嚙り上げながら彼女は、深い溜息をついた。

ミレイユは孤独だった。ブリーズを除けば、王宮に彼女の味方は誰も居なかったのである。

同僚たちの彼女に対する風当たりはきつかった。

ミレイユは庶民の出で、そもそも王宮つき魔術師になれる立場ではなかった。この職につくためには貴族であることが前提条件で、なおかつ熾烈な競争に勝ち抜かねばならなかったのである。

しかしその慣例を破ってまで登用したいと思うほど、ミレイユの魔法は無視できないレベルにあった。

高い魔力に加えて、彼女は突出した魔法制御力を備えていたのである。

ミレイユが登用されるにあたり、王宮では連日のように重臣たちによる会議が行われた。

一人でも多くの王宮つき魔術師を確保することは、すなわち帝国の軍事力が増すということにつながる。しかしこれまで貴族のみに許されてきた高潔な職業に、平民を加えるということが悪しき前例となってしまうのか。

幾度となく同じような議論が交わされた後、ある貴族にミレイユとの養子縁組をさせ、彼女に形だけでも身分を与えることで決着がついた。

ミレイユ側の希望は聞かれなかった。重臣たちは庶民の意見を聞くことなど考えもしなかったからだ。

もし一言でも彼女が自分の意見を言うチャンスがあれば、そんな地位に就きたくないという本心を訴えただろう。きっと無視されたに違いないけれど。

当然のことながら、異例の登用を受けたミレイユのことを同僚たちが良く思うわけがなかった。

彼女の出生への蔑み、才能への嫉妬、特別待遇に対する憎悪。それらが入り混じった感情を、さらに煽り立てたのがミレイユの容姿だった。

彼女は三つ編みにした艶やかな黒髪を、蟬のように白い顔の両側に垂らしていた。髪と同じ色の長い睫が紫色の瞳を囲み、唇は血のように真っ赤だった。

人見知りで内気なミレイユは、美しく繊細な顔にいつも不安そうな表情を浮かべていた。それがまた周囲の嗜虐心しやくしんを妙にそそつたのである。

人の心は複雑なもので、美しく儂いものに対して必ずしも庇護欲ひごよくをかきたてられるとは限らない。美しいが故に残忍で冷酷な想いを呼び起こされてしまうこともあるのだ。

今日も同僚たちは、後片付けを全てミレイユに押し付けて帰ってしまった。

暗闇の中、一人で片づけをするのは心細い。それでも同僚たちと一緒に居るよりは、一人の方がずっとマシだった。

小川のそばにしゃがみこみながらミレイユは、昼間、同僚のジリアンに言われたことを思い出して再び涙を流していた。彼はひどい言葉で彼女の出生を嘲ってきたのである。

（私だって、来たくてここに来たんじゃない！）

心の中ではぐるぐると同じ想いが渦巻いていた。以前のように穏やかで平和な生活が恋しかった。

あの時、たまたま城下町に来ていた王宮関係者が自分の魔法に目を留めなければ……。王宮に来たことを後悔しない日は無かった。

ブリーズの支えが無かったら、彼女はとつくに壊れてしまったいだらう。彼はミレイユの登用に積極的だった重臣の一人で、心の底から彼女を歓迎していた。

そして……黄金の髪を持つ女神。彼女のことを思い出すだけで、

ミレイユの胸は高鳴った。

あれ以来、あの人の姿を見かけたことは無かったし、誰かに聞くようなことも出来なかったが、同じ通行証を持っていたということ
がミレイユに希望を与えていた。

(もう一度会いたい)

それがミレイユの願いだった。会って、この前は言えなかったお
礼を言いたい。そしてもっと彼女と話をしたい。

女神との再会を切望するミレイユの頬が紅潮し、乱れていた気持
ちが徐々に落ち着いてきた。

彼女は再び小川の水で勢いよく顔を洗い流すと、立ち上がって帰
り支度を始めた。

明日こそは女神に会えるかもしれない。

「仕事は順調だろうな」

ミレイユは驚いて顔を上げた。普段は滅多に口をきかない養父ちちが、
珍しく朝食の席で彼女に尋ねてきたのだ。

「……はい。順調です」

教わったテーブルマナーを思い出し、口の中のものを飲み下して
からミレイユが答える。

同僚にいじめられている、などと言えるわけがなかった。

「順調か？」ではなく「順調だろうな」と養父は言った。

あの研究室で功績を残すこと。それが、自分に与えられた責任で
あり義務なのだ、改めてミレイユは思った。

彼女の養父であるハリバートン伯爵は、元々は実力のある王宮つ
き魔術師であつたらしい。

彼は勤務中に事故で負傷し引退せざるをえなくなったが、魔法の
研究に対する情熱が失われたわけではなかった。いつか国の役に立
つようにと自宅で細々と独自の研究を続けてきたのである。

しかし王宮で研究をしていた頃は何不自由なく物資も設備も使えていたが、個人の屋敷で出来ることには限度がある。彼は思うように実験のできない現実に、もどかしい思いをしていた。

ハリバートン伯爵には妻子が無かった。彼は魔法の研究だけしていれば満足というタイプの人間であったため、そもそも結婚というもの考えたことが無かったのである。

たとえ伯爵家の血筋が途絶えようと、自分が死んだ後のことなどどうでも良いと思っていた。

王宮関係者がミレイユの養子縁組先として彼を選んだのは、古い貴族の家系を絶やさないといい思惑も絡んでいた。

一方、伯爵がその話を受け入れたのも、自分に代わってミレイユが王宮で活躍することと、彼女を通じて自分の研究成果を提出させるためだった。

ミレイユは伯爵のアイデアのいくつかを王宮で実験し、その結果を自宅に持ち帰ると、事細かに養父に報告していた。

「お前に忠告しておこう」

ナプキンで口元をぬぐった伯爵が、まっすぐにミレイユの目を見つめて言った。その真剣な眼差しに、思わず姿勢を正す。

「たとえ同僚と言えど、自分の研究内容を明かすな。作業中も誰かに見られていないか常に警戒しろ。どんなに親しい奴だとしても、完全に信用するな」

思わずミレイユはまじまじと養父の顔を見つめてしまった。疑問に思う気持ちが顔に出ていたのであろう。伯爵は無表情のまま付け加えた。

「隙を見せれば、お前の研究成果は全て盗まれる。……宮中とはそういう場所だ」

ミレイユの脳裏に同僚たちの顔が浮かぶ。彼等が自分を見る時の、冷たく、油断なく光る鋭い目。

胸の内に湧き上がる暗い不安に、彼女は思わず身を震わせた。

1、それぞれの恋（ミレイユ）3

ばたばたと慌ただしい足音が近づいてきたかと思うと、いじゅつしつ癒術室のドアが轟音と共に吹き飛んだ。

「ヒーリス！ ヒーリスは居ないか！」

血相を変えて飛び込んできたブリーズの腕の中には、ぐったりとしたミレイユの姿があった。彼女の左腕は真っ赤に染まり、白い額には脂汗が浮かんでいる。

「ヒーリス様は只今、兵士たちの往診をなさっております」

部屋の中で机に向かっていた少女が、立ち上がりながら言った。

彼女は一目で事の重大さを理解したようだ。パニック状態のブリーズに、ミレイユを寝台に横たえるように指示を出した。

傷口の様子を調べた少女の顔に、険しい表情が浮かぶ。

「一体どこでこんな怪我を……」

「わからない。研究中に突然悲鳴が上がって……私が振り向いた時には、既に出血していたんだ」

ミレイユの腕には鋭利な刃物で切られたような傷が、ぱっくりと口を開いていた。

「私に出来るのは応急処置のみです。貴方はヒーリス様を呼んで来てください。早く！」

少女がブリーズを振り向いて叫ぶ。彼は慌てて頷くと、来た時と同じように全速力で走り去った。

その姿を見送る時間も惜しい。少女は急いで戸棚に近づき、小さな瓶を取り出した。中には黄色い粉末が入っている。

彼女はそれを小皿に出し、ミレイユの側へ駆け寄ると、傷口から溢れる血を皿に受けた。

粉末に触れた瞬間、血液は透明な液体に変わる。一滴の血液から、十倍の量の透明な液体が生み出された。

やがて小皿いっぱいに作られた液体を、少女は慎重にミレイユの

傷口に垂らしていった。液体の触れた場所から、血の泡が盛り上がる。治療を行う少女の額にも、汗が滲んでいた。

全ての液体を傷口にまんべんなく垂らした後、少女は崩れるように椅子に座り込んだ。

ミレイユの怪我はひどいものだった。大きな血管が傷ついたせいで出血が多すぎたし、恐らく神経も切れていたことだろう。

少女は大きいため息をつくとき、汗でミレイユの額に貼りついていく黒髪をそつと払ってやった。

ブリーズが安易に治癒魔法を使わないでいてくれて良かった。これほどの怪我になると、後遺症が残ってしまう可能性が高い。専門の技術を持った癒術師の手に任せるのが一番だ。

(それにしても……)

困惑した顔で、横たわる患者の顔を見つめる。まだまだ幼さの残る顔が苦悶に歪んでいた。

こんな年端もいかない娘が、どうして、なぜこのような大怪我をしなければならぬのか。

その理由が簡単に推測できてしまう自分に、少女はやるせない気持ちになった。

目を覚ましたミレイユは、見知らぬ天井をぼんやりと眺めた。どうしてこんなに身体がだるいのだろう。首を動かすことですら億劫で仕方がない。

「気がついたのね」

突然上から覗き込まれたミレイユは、息が止まるほど驚いた。それは間違いなくあの女神の顔だったのである。

何度も夢見たその顔は、想像の中で思い浮かべたものよりも何倍も美しかった。

「あ、あの……」

「患者はどこだ！」

話しかけようとしたミレイユの声は、乱入してきた怒鳴り声にかき消された。

「ヒーリス先生」

女神がホツとした顔で、現れた男性を振り返る。熊のような風貌の男性の後ろで、ブリーズが荒い息をついていた。

「ああ、レイチエル！ お前が居てくれたか」

「ええ……とりあえず応急処置を施しておきました」

「と言うと？」

「バンノーマを使わせていただきました」

「なんとなんと！ 高価な薬を使ってくれたものだ。だがそれだけ緊急の事態だったのだろうし、応急処置としては上出来だ！」

ヒーリスは愉快そうに笑うと、レイチエルの肩を抱えた。その目には可愛くて仕方ないという愛情が浮かんでいる。

「ヒーリス！ そんなことより早く治療を……」

ミレイユを放置して呑気な雰囲気醸し出すヒーリスに、ブリーズが噛みついた。

「ああ、怒るな怒るな。バンノーマを使った後ならそんなに急がなくても大丈夫だ。……この娘がお前の秘蔵っ子だな」

ヒーリスは巨体に似合わない滑らかな動きでミレイユの側に腰かけると、傷口を丹念に調べ始めた。

「うん、バンノーマも適量だったみたいだな。全く運が良い、レイチエルがこの場に居てくれて。俺の弟子たちよりも腕が良いんだからな。本当に惜しいぜ癒術師にならないのは……」

独り言を呟きながら、ヒーリスは親指でゆっくりと円を描くようにミレイユの傷口を撫でていく。その手元は淡く緑色に光っていた。「ほい、出来上がりだ。しばらくの間はひきつるような痛みがあるかもしれないから無理するな。それにしても、どうしてこんな大怪我を負ったんだ？」

ヒーリスが不思議そうな声を上げる。その後ろで佇んでいた、ブ

リーズとレイチェルの視線までもが自分に集中するのをミレイユは感じた。

「あ……」

ごくり、と唾を飲み込む。喉元に大きな空気の塊がつかえてしまったように息苦しい。

ブリーズは痛いほど自分のことを心配してくれている。そして女神も……。

この二人の前で嘘を言わなければならないと思うと、胸が痛かった。けれど、そうしなければいけないことも分かっていた。

王宮（こし）で生きていくためには。

「わ、私……何も覚えてないんです」

顔をそむけたミレイユは、壁を見ながら弱々しい声で呟いた。

一粒だけ零れ落ちた涙が、頬をつたってシーツに吸い込まれていた。

「あ、あの、レイチェルさん……」

温室の扉を開けたミレイユは、おずおずと声をかけた。

「あら。あなただったの」

顔を上げたレイチェルがにっこりと微笑んだ。それだけでミレイユは舞い上がって緊張してしまう。

入って入って、と手招きしながらレイチェルは「私は貴族じゃないし、呼び捨てで良いわよ」と言った。

「レイチェル……」

嬉しそうな笑顔を浮かべながら、ミレイユがいそいそと近寄る。

「わ、私はミレイユ・ハリバートン。私のこともミレイユって呼んでくれますか？」

レイチェルは一瞬だけ眉を上げたものの、すぐに「あなたがそう呼んで欲しいのなら、もちろんよ。ミレイユ」と微笑んだ。

真っ赤になつたミレイユを見下ろしながら、レイチエルが小首を傾げた。

「そう、あなたが噂のミレイユ・ハリバートンだったのね」

噂の？ どんな噂なのだろう。

不安そうな表情を浮かべたミレイユの頬を、いたずらっ子のような笑顔を浮かべたレイチエルがつつく。

「あなた、三大美女の一人なのよ」

「三大美女……？」

「この王宮に居る女性の中で、最も美しい三人のうちの一人居るとよ。一人は私。もう一人はあなた。最後の一人は水魔法の神童と言われているアニー・ブラウン・バツカスよ」

ミレイユは目を丸くした。こんな自分がこの女神と同列に語られているなんて、とんでもない話だと思つたのだ。

驚きで声も出ない様子の彼女を見ながら、レイチエルは優しく微笑んで尋ねた。

「それで、怪我した所はあれからどう？」

「あ……もうすっかり良くなりました。あなたのお陰だとヒーリス先生もおっしゃってます。私、お礼を言いたくて先生にあなたの居場所を聞いたんです。……こ、ここで何をなさっていたんですか？」

「バンノーマの粉末を作っていたのよ」

「バンノーマって……」

「ええ。あなたの怪我に使った薬。大量に使ってしまったから、補充するために作ってるの」

レイチエルが身体を動かして、先ほどまで向かっていた机の上が見えるようにした。

レモン色の葉がガラス製の蒸し器の中に入っている。その隣にはすり鉢が置いてあった。

「バンノーマは長時間、光に当てないとレモン色にはならないの。」

ここは私が一昨日から光魔法を使っておいたわ」

温室の一角が区切られ、地面にいくつものランタンが置かれてい

た。中ではレイチエルの作りだした光球が眩しいほどに輝いている。「次に、収穫した葉を蒸すの。きっちり二時間。そしてすり潰す」レイチエルがすり鉢を取り上げ、ミレイユの前に差し出した。覗き込むと、つんとした刺激臭が鼻を刺す。

「これを倍量のお湯で溶かして、布で濾すの。布に残った繊維を、水分が完全に抜けるまで乾かす。そしてまたすり潰してお湯に溶かして濾すの。これを何度も繰り返す。段々と目の細かい布に替えながらね。繊維が針のように細くなるまで繰り返したら、石臼でひく。それで完成よ」

気の遠くなるような話に、ミレイユが思わずため息をついた。

レイチエルが苦笑する。

「この面倒な工程を踏まなければならないから、バンノーマはとても高価な治療薬なの。もう少し簡単にできれば、もっと世間に普及させることが出来るのだけれど……なにしろ完全に水分を抜くことが必要だから、どうしても時間がかかってしまうわ」

「火であぶって水気を飛ばすことは出来ないんですか？」

ミレイユの質問に、残念そうな顔でレイチエルは首を振った。

「乾燥中に高温にさらすと、効果が無くなってしまふの」

「……レイチエル……は、癒術師になりたいんですか？」

彼女に怪我を治してもらって以来、ずっと考えていたことをミレイユは口に出してみた。

もしかしたらレイチエルは、癒術師になりたくても身分のせいで夢がかなわないのかもしれない、と。

けれどレイチエルはミレイユの問いかけを、鈴の音を転がすような声で笑い飛ばした。

「いいえ！ ミレイユ、私の仕事が何か聞いてきたんでしょう？」

遠慮がちに頷きながら、ミレイユが答えた。

「宮中娼婦、なんですよね」

「そうよ」

にこやかに言い切ったレイチエルの態度は自信に溢れていて、日

陰者の卑屈さなど微塵も感じさせなかった。

「ねえミレイユ、病に悩んでいる娼婦がどのくらい居ると思う？」「不意に真面目な顔になったレイチエルに問われ、ミレイユが狼狽える。

「えっ、と……」

「十人の娼婦が居れば、九人が何らかの病を患うわ。出産や墮胎の時に命を落とす者も多い。……娼婦の寿命はとても短いの」

レイチエルが視線を落としてバンノーマの葉を見つめる。

まだ娼婦の仕事も、男女のこともよく知らないミレイユは、生々しい話に落ち着かない気分になった。けれど視線を落としたレイチエルの横顔が痛々しく感じられて、身じろぎせずに彼女の話に聞き入っていた。

「だから私は癒術を学んだわ。癒術魔法は使えなくても、薬草のことを学べば……娼婦を救えると思ったから。本当に、このバンノーマがもつと安ければ……」

もはやミレイユに聞かせるためというより、独り言のように呟くレイチエルは、両手にすくった葉を見つめ続けていた。

それを見ているミレイユの胸は、締め付けられるように痛んだ。じっとレイチエルの顔を見つめ、彼女の手の中の薬草に視線を移す。先ほど教えられた作業工程を思い返しながらレモン色の葉を見つめていたミレイユの瞳が、段々と見開かれていった。

興奮で胸がドキドキする。果たしてこれは上手くいくのだろうか。でも、考えれば考えるほど、出来そうな気がしてくる。

「レイチエル……」

ミレイユの声音に何かを感じたのか、レイチエルがゆっくりと顔を上げた。

その目を見つめながら、ミレイユは自分の計画をつつかえつつかえ打ち明ける。

「あの、レイチエル……私、あることを考えたの。も、もしかしたら、もつと簡単にバンノーマを作れるようになるかもしれない……」

「本当なの?! どうやって」

興奮してミレイユに詰め寄るレイチェル。その美しい顔を至近距離で見ながら、ミレイユは気持ちを落ち着かせるために一つ、深呼吸をした。

「……今は無理なんです。上手くいくか実験するのに、準備が必要で……しばらく待つてもらえますか?」

ミレイユは研究室に戻ると、自分の机の上にノートを広げた。脇目も振らずにペン先を走らせ、あっという間に真っ白いページは図面で埋め尽くされた。

彼女は字を読んだり書いたりするのが苦手だった。ハリバートン家に養女として迎えられてから教育は受けたけれど、まだ他の者より読み書きの作業に時間を要する。

だからミレイユは研究のアイデアをまとめる時、自分のイメージを絵にして残すことを好んだ。彼女が意図したことでは無かったが、それは結果的に彼女の研究内容を盗用から守ることにもなった。他の人間がこっそりノートを覗いても、判別できない不可解な図形しか載っていないからである。

どんだん頭の中に溢れ出てくる思いつきを、出るそばから捕まえては白いノートに縫いつけていく。それはスピードが命の勝負だ。表現方法を考えるために少しでも時間が空けば、アイデアは捕まえようとする手をすり抜けて霧散してしまう。

ミレイユがこの作業に没頭している時は、同僚たちの冷ややかな態度も自分の悩みも、全てが頭の中から消え去っていた。あったのは、イメージが途切れるまで一心不乱に手を動かし続けることのみ。「終わったか?」

机にペンを置いたミレイユが、フーツと大きく息を吹き出した。そのタイミングを待っていたかのように彼女の背後から声がかかる。

「ブリーズ室長」

振り向いたミレイユは慌てて立ち上がった。自分が作業に集中している時、ブリーズは集中力を途切れさせないよう、決して声をかけてこない。ミレイユはその気づかいを嬉しく思いながらも、彼を長く待たせてしまったのではないかと不安になった。

しかしブリーズの顔には満面の笑みしか浮かんでいなかった。彼はミレイユの肩をポンポンと叩きながら満足そうに告げる。

「おめでとう。陛下が君の研究内容をいたく気に入ったようで、今は実現化に向けて技術部と調整中だ」

「え……あのカゴの件、ですか？」

それは養父とミレイユの共同研究だった。

ハリバートン伯爵は、もっと簡単に人を空に浮かべることが出来ないかと考えた。

これまでは風魔法の使い手でなければ宙に浮かぶことが出来なかった上に、熟練の魔術師であつても魔法の制御が非常に難しかったのである。

卓越した魔法制御力を持つミレイユは、王宮つき魔術師の中で唯一、制御装置なしで空を飛ぶことが出来た。

ハリバートン伯爵から、飛行魔法のどこに最も制御力が必要なのかを問われたミレイユは、己の身体に浮力を持たせることだと説明した。多くの風魔法の魔術師は身体を浮かせるのがやっとで、そのまま空中を移動することまでは出来なかつたのである。

そこで炎魔法の魔術師であつた伯爵は、熱した気体の浮力を利用することを考えた。

まず巨大な布袋を用意し、人が乗れるぐらいの大きさのカゴと結びつける。カゴには炎魔法と風魔法の魔術師が乗り込む。布袋の口元で炎を焚き、気体が袋の中に充満すればカゴは浮力を得て宙に浮かぶ。そこから先の移動は風魔法で調整するのだ。

この方法であれば難しい魔法は不要なので、制御装置も使わずに空を飛ぶことが出来る。

ハリバートン伯爵とミレイユは、まずミニチュアを作って実験してみた。そして十分に実現が可能だと確信できる結果が出たので、王宮に報告したのである。

「陛下と言うより、皇太子のお気に召したらしい。空を飛んでみたかったと言っただけだ」

ブリーズが豪快に笑いながらミレイユの頭を撫でた。

「はあ……」

噂に聞いたただだが、皇太子は変わり者という話だった。非常に好奇心が旺盛で、陽気な性格だと言う。養父が軍事利用を念頭に開発した魔法だったが、皇太子であれば自分の愉しみのために使うことも不思議では無かった。

「これからもこの調子で、役に立つ魔法を開発するようにとのお達しだったぞ。よくやったな、ミレイユ。……それは新しい研究か？」
ブリーズがミレイユの頭越しに、開かれたままだったノートを見ながら言った。

はっとして振り返るミレイユ。部屋の中の空気が緊張したのが分かる。

同僚の魔術師たちは、視線こそ決して室長とミレイユに向けられないものの、しっかり意識は二人に集中させていた。自分の作業に没頭しているように見えて、ミレイユの研究内容を聞き漏らすまいとしている。

ブリーズのことは信頼しているが、研究内容を他人に明かすなど言う養父の声が蘇える。ズキン、と、治ったはずの腕の傷跡が痛んだ。

「いえ、あの……大したものじゃなくて、レイチエルへのお礼なんです」

ミレイユが言うと、ブリーズは「ああ、彼女には世話になったからな」と納得した顔で頷いた。

だがミレイユが気になったのは、同僚たちの反応だった。レイチエルの名前を出した瞬間、またしても部屋の中の空気が変わったの

だ。

(……なんで?)

今までに無い感覚にミレイユが首を傾げる。

その正体は、使いの者に呼び出されてブリーズが退室すると明らかになった。

「娼婦の知り合いだなんてお似合いね！」

緑色の髪の女性魔術師、パティがでヒステリックな笑い声を上げる。

たちまち数人の女性魔術師が同調し、口ぐちにミレイユを罵り始めた。

「よくあんな種類の人間と付き合えるわねえ」

「そこはほら。似た者同士ということではなくて？」

「おお嫌だ。おぞましいこと」

「いつそあなたも娼婦になれば？ お似合いよ」

「おい、やめろよ」

驚いたことに、彼女たちを止めたのは同僚の男性魔術師の一人だった。

「……レイチエルに知られたらマズイことになるぞ」

彼の一言に、パティたちは不満そうに「ふん」と鼻を鳴らして自分の仕事に戻った。

ミレイユも最近知ったことだが、王宮における宮中娼婦の権力は大きいのだ。彼女たちは表だって国政に携わることには無いが、愛人である重臣たちの耳に色々吹き込むことは出来る。その影響力は無視できない。

なおかつレイチエルは、王宮内で急激に権力を伸ばしていた。彼女が登城してから二年弱しか経っていなかったが、既にその地位は宮中娼婦の中でも上位に位置している。

再びミレイユを無視することに決めた女性魔術師たちと違い、何人かの男性魔術師たちがチラチラとこちらを伺っている。その視線に戸惑っていると、ジリアンが近づいてきた。

意味深な眼差しをした彼は、顔をぐつとミレイユに近づけると小声で囁いた。

「お前、レイチェルと親しいの？」

「え……」

唐突な質問にどう答えて良いか悩んでいると、ジリアンは更に身を乗り出してミレイユに耳打ちした。

「彼女の相手が多すぎて、俺の順番が回ってこないんだよ。お前からレイチェルに頼んでくれないか？」

ミレイユの顔にカツと血が上る。順番、と言うことはつまり……。

至近距離で見たジリアンの瞳には邪な欲望の光が浮かんでいて、ミレイユは恐怖を覚えた。周囲を見渡すと、他の男性魔術師たちも何かを期待するような目で自分を見ている。ジリアンと同じことを考えているのだろう。

そう考えた時、ミレイユは吐き気を覚えた。

「おい、聞いているのか？」

ジリアンの苛立たしげな声に、ゆっくりと視線を上げる。

「……いい、一応、レイチェルには伝えておきます」

どうにか返事をする、ジリアンは満足げな顔で自分の持ち場へと戻って行った。

呆然と立ちすくんでいたミレイユだったが、しばらくしてハッと我に返り自分のノートへと向き直った。

けれど一向に集中できず、ジリアンの言葉は頭の片隅に何度追いやってもしつこく浮かび上がって来る。

結局その日はそれ以上、仕事にならなかった。

1、それぞれの恋（ミレイユ）4

昼下がりにレイチエルと温室で話をする時間が、ミレイユの息抜きの時間となった。

まだ彼女のために関発中の魔法は出来ていないけれど、レイチエルはそんなことには関係なく、いつも優しくミレイユを迎えてくれた。

二人は時間の許す限り、色々な話をした。

「そのうち娼館を開くつもりなの」

「いつだったかレイチエルが話してくれたことがあった。

「娼館……？」

「そうよ。それも高級娼館。客が娼婦わたしたちを選ぶのでは無くて、女たちが相手を選ぶの。ろくでもない男なら門前払いよ」

愉快そうに笑うレイチエルとは対照的に、ミレイユが困惑する。

「そ、そんなこと出来るの？」

「もちろん、それを可能にするには娼婦たちのレベルが高くなければ無理よ。でもやってみせるわ」

それからレイチエルは、これから造る予定の娼館について計画を生き生きと語ってくれた。

娼婦たちには徹底的な教育を施すこと。自分は宮中で娼婦たちの地位向上のために活動すること。引退後の娼婦の生活保障のシステムを作ること……。

熱っぽく語るレイチエルの顔を、尊敬の眼差しで見つめるミレイユ。嬉しそうなレイチエルの顔を見るだけで、自分も嬉しくなってしまう。他人がどれだけ彼女のことを蔑もつと、やはりこの人は崇高な人だと思った。

「あなたも私と一緒に娼館やってみない？」

不意にレイチエルに言われた言葉に、目を丸くして驚くミレイユ。
「わ、私が？ だって私……」

レイチエルを見てみると、娼婦という仕事は特異なものではないように思えてくる。だが、とてもじゃないが自分には娼婦になる勇氣は無かった。

ミレイユの困っている様子を見て、レイチエルがおかしそうに笑った。

「あなたに娼婦になれとは言っていないわ。私が欲しいのは共同経営者よ」

「共同経営者？」

「そうよ。私が王宮にいる間、店を管理してくれる人が必要でしょう？　言ってみれば店長ね。店長と言えど店の看板だもの、美人じゃないとダメよ」

「そんな、私なんか……」

憧れのレイチエルに美人と褒められたことで、頬を染めるミレイユ。

彼女自身はハッキリ言っつて、己の容姿に自信を持てなかった。しかしそれも無理のないことだろう。

ミレイユが上目使いで見上げたレイチエルの顔は、どこから見ても完璧に美しい。これほどの美人を前にして、自分は美しいと宣言できる人間が居るのだろうか？

けれどレイチエルは、にっこりと微笑むとミレイユの手を両手で包み込んだ。

「本当よ。……私とあなたが初めて会った時を覚えてる？　あの時あなたを見て、こんな綺麗な人は見たことがないと思っつたわ」

「そんな」

「無理にとは言わないわ。でも、もしあなたが王宮つき魔術師を辞める気になったら、私の店のことを思い出して欲しい」

「……でも、私、お店の経営なんて出来るかどうか」

「大丈夫よ」

笑顔できっぱりと言い切るレイチエル。彼女の態度は常に自信たっぷり、優雅で、落ち着いている。

レイチエルの側に居るだけで、ミレイユは不思議と安心した。それ以来、レイチエルの娼館の話が話題に上ることは無かったが、ミレイユの記憶の中にはその日の会話が鮮明に記録されることになった。

ある日、ミレイユは出来たばかりの装置を抱えて温室を訪れた。彼女の姿を見て微笑んだレイチエルだったが、ミレイユの腕の中を見て不思議そうな表情を浮かべる。

それは丸い筒のような形をしていて、上に制御装置がついていた。よいしょ、と口に出しながらミレイユがその装置を机の上に置く。肩で息をついている所を見ると、見た目よりも重いものらしい。

「レ、イチエル。やっと、出来、ました」

小首を傾げているレイチエルに説明したいのだが、息が上がっていて切れ切れの言葉しか出てこない。

ミレイユは手を上げて「ちょっと見てて下さい」と意志表示をすると、机の上の乳鉢に手を伸ばした。中にはすり潰されたバンノーマの葉が入っている。

きつちり葉の二倍の量のお湯を計ると、ミレイユは慎重にそれを乳鉢の中に注ぎ込んだ。そしてゆっくりとかき混ぜる。

何度もレイチエルの作業を傍らで見えていたから、手順はすっかり頭の中に入っており、初めての作業であっても迷いは無かった。鮮やかな黄色になった水を、布で濾す。

ミレイユの持ってきた装置は、筒が二重になっていた。内側の筒は非常に目の細かい網で出来ている。彼女はその中に、布に残ったバンノーマの繊維を丁寧にかき集めて入れた。

「これでフタをして、制御装置に手を乗せて……風魔法を使います」
ようやく呼吸も整ったので、レイチエルに説明しながら手を動かした。

ミレイユが制御装置を通じて風魔法を送り込むと、内側の筒が回転し始める。

「ええと……この中では今、二種類の風魔法が発動しています。筒を回すことと、風を送り込むのと……。筒の中のバンノーマは、遠心力と風魔法によって水分を飛ばされるので、今までよりも早く乾きます。回転させる風魔法と、吹き付ける風魔法の強さを調整するのが思いのほか難しくても……でも、やっと魔法式を装置に組み込むことができました。それで……」

目を細めて嬉しそうに自分の手元を見下ろすミレイユの声は、満足感に溢れていた。

頬を紅潮させ、うつすらと微笑んだその顔は美しく、どこか妖艶ささえ感じさせる。

「あの……」

ミレイユが上目使いでレイチエルを伺う。先ほどからレイチエルの反応が無いことが、急に不安になったのである。

つい夢中になって風魔法の講釈をしてしまったが、ひよっとしてこの装置はレイチエルの役に立たないのだろうか。自分のしたことは無駄だったのだろうか。

自信を無くし、所在無げに視線を彷徨わせるミレイユ。

目を睜り、そんな彼女をじっと見つめていたレイチエルが口を開いた。

「すごいじゃないのミレイユ！ 本当に素晴らしいわ」

まばゆい笑顔と共に心からの賛辞を贈られ、ミレイユの顔が驚きに染まり、徐々に照れくさそうな微笑に変わっていった。

「レイチエルの役に立てればと思って……」

「そんなレベルの話じゃないわ！ あなたのお陰で癒術の歴史が変わるわよ。ああ、本当に素晴らしいわ！」

感極まったレイチエルが、ミレイユを抱きしめてその頬に口づけをした。ミレイユの耳が赤く染まる。

「ミレイユ、あなたは是非この装置のことを発表するべきよ！ 私、

ヒーリス先生を呼んで来るわ。あなたからも説明してちょうだい！」
レイチエルは身を翻して温室のドアへと向かった。しかし扉を開ける直前でピタリと足を止めると、再びミレイユの側へと駆け寄ってくる。

「ありがとう」

彼女はミレイユをギュッと抱きしめると、もう一度頬にキスをして、耳元で呟いた。

その温もりは、いつまでも消えずに留まっているような気がした。大事なものを守るように、そつと頬を片手で押さえながら、ミレイユはレイチエルの姿が見えなくなった後もそのまましばらく立ち尽くしていた。

ミレイユの「乾燥装置」はヒーリスも手放しで喜んだ。彼は喜びの雄叫びを上げるとミレイユを力強く抱きしめ、その巨体に彼女の身体をすっぽりと埋もれさせてしまった。

ミレイユは息苦しいほどの衝撃に目を白黒させたが、ヒーリスの抱擁はレイチエルと同じでとても温かいものだったので、嫌では無かった。

二人の愛情は懐かしい母の温もりを思い出させ……少しだけ切なくなつたミレイユは、ヒーリスの腕の中でそつと目を閉じた。

それからのミレイユは、レイチエルとヒーリスから「こんな装置は作れないか」と相談を持ちかけられるようになった。

ヒーリスはおもに、薬作りや癒術においての課題を解決するためのものを望んだ。

例えば湿度に弱く保管の難しい薬を管理するため、ミレイユは湿度調整機能のついた箱を彼のために開発した。

レイチエルももちろん癒術に関心があったが、彼女は将来、娯館で使えるような魔法の開発についてもミレイユに相談を持ちかけた。

娼館の客の中には、娼婦と他の客の様子を覗き見するのが趣味の者も居るらしい。しかし従来の覗き穴では視野が狭く、鮮明な光景を見ることが出来ない。と言って壁をガラス張りにしてしまえば、覗き趣味の人間は興味を失ってしまう。

そのような話を聞かされたミレイユは顔を真っ赤にしながらも、新しい光魔法を考え出してレイチエルに伝授した。

光の屈折を魔法で調整して、離れた場所に居ながら様子を見ることの出来る魔法である。必要とあれば、その映像を壁一面に映し出すことも可能とした。

ミレイユがこの魔法を開発するためには、恐ろしく複雑な魔法式を考え出さなければならなかった。

朝は研究室の誰よりも早く登城し、深夜まで実験に没頭した。睡眠時間を削り、ともすれば食事をとることすら忘れてしまいそうになった。

けれどもミレイユは全く辛さを感じなかった。

実験が完成し、レイチエルに「ありがとう」とにつきり微笑まれると……それだけで苦労は全て吹き飛び、幸福を感じた。

ヒーリスからの感謝の言葉ももちろん嬉しかったが、ミレイユにとって一番の活力源は、やはりレイチエルであった。

彼ら二人のお陰でミレイユが報告する新魔法と新装置の数は、驚くほどの数に上がった。同時に王宮内でのミレイユの知名度も上がり、養父とブリーズ室長は満足そうに彼女を褒めてくれた。

同僚たちの態度は相変わらずだったが、それよりももっとミレイユの頭を悩ませたのが、新たに持ち上がった問題だった。

「ご、ごめんなさい……」

申し訳なさそうな顔をして、ひたすら謝罪の言葉を口にするミレイユを見て諦めたのだらう。残念そうな顔をした兵士が立ち去った。ミレイユの知名度が上がり、彼女が三大美女の一人だという噂も広まると、交際を申し込んでくる男の数が増えたのだ。今の兵士も、全く面識の無い相手だった。

男慣れしていないどころか、内気なせいで人付き合いが苦手なミレイユにとって、こうしたことは非常に困った事態だった。

自分が断ることで相手を怒らせてしまうのではないか。自分の気持ちを上手に言い表せなくて、ただ謝罪するしか出来ない自分もどかしい。そのせいで相手を苛つかせてしまうのではないか。

それが恐くて告白されるたびに泣き出しそうになつてしまつ、と打ち明けたミレイユに「考え過ぎよ」とレイチエルは優しく言った。「どうせあなたのことをよく知らないのに交際を申し込んでくるような相手でしょう？ そんなに気を使う必要は無いわ。もちろん、付き合う必要もね」

冗談めかして笑うレイチエルだったが、ミレイユは拗ねたような顔で「そりゃあレイチエルには簡単だろうけど……」と口を尖らせた。

ミレイユとレイチエルとは、たった二歳しか歳が違わない。なのに男性に言い寄られた時のレイチエルのスマートな受け流し方と言つたら……とても真似できない。

なによりその精神的な強さは、ミレイユが自分では手に入れられないと分かつていても、憧れずにいられなかった。

何もかもが完璧なレイチエルに、自分の気持ちをわかつて欲しいと思うのは無理ではないだろうか。

決して彼女のようになれるとは思わなかったが、それにしても、もう少し落ち着いた対応は出来ないものだろうかと、自分のみつともなさを思い出してミレイユは肩を落とした。

レイチエルは少し困つたような微笑を浮かべて、優しくミレイユの髪を撫でながら言う。

「なんだか私のことを買い被つてるみたいだけど……」

しかし彼女はそこで、顔を上げたミレイユの目を見て口を噤んだ。「……そうね。じゃあ今度そういうことが起こつたら、私になつたつもりで行動してみたら？」

「レイチエルに？」

「そうよ。私だったらどうするかな、って考えて。私になったつもりで動くの」

「レイチエルになったつもりで……」

小さな声で呟いて、考え込むミレイユ。

彼女の自信なさげな表情を見たレイチエルは、元気づけるように明るい声を出した。

「そうよ！　じゃあ、髪をちょっといじらせてもらおうね」

「え？　ちよ、レイチエル？」

戸惑うミレイユの背後に回り、レイチエルは手早くお下げ髪をほどこいていく。そして器用な手つきで優雅なアップスタイルにまとめ上げた。

「これ……」

レイチエルの差し出した手鏡を覗き込んだミレイユは、息を呑む。ただ単に髪型を変えただけだと言うのに、まるで別人のような自分の姿があった。

「唇の色が綺麗だから色を乗せなくても充分ね。本当に綺麗よ、ミレイユ」

前髪もサイドの髪も後ろでまとめられ、顔の輪郭が露わになったミレイユは一気に大人びて見えた。微かに紅潮した頬も、艶やかな唇も、妖艶さに拍車をかけている。

だが食い入るように鏡を見つめているミレイユには、レイチエルの賞賛の言葉すら聞こえていないか定かでは無かった。

「あらミレイユ。それは何？」

レイチエルが水色のローブから覗く筒のようなものに目を留めて言った。

「え、ああ、これ……」

我に返ったミレイユがローブの中に手を入れて、それを引っ張り出した。今朝完成した装置で、レイチエルに見せようと思って持ってきたものだ。

ごく単純な作りだが、実は複雑な炎魔法と風魔法の魔法式が組み

込まれている。筒の先から冷風を出すことも出来るし、温風を吹き出すことも出来る。

ミレイユはこの装置を、王宮に来る前の生活を思い出して作ったのだ。

「私、ここに来る前は塗装の仕事をしていたの……」

装置の使い方を説明しながら彼女は、これまで誰にも語ったことの無い過去をレイチエルに打ち明けていた。

十歳で母を亡くしたミレイユを引き取って育ててくれたのは、隣家に住んでいた塗装職人だった。

彼は何人も弟子を持つ腕の良い職人で、慣れない大人数での生活に戸惑い満足に家事も出来ないミレイユに優しく接してくれた。

いくら腕が良くても暮らし向きは決して楽ではなかったはずなのに、弟子たちにもミレイユにもそんな素振りを見せない人だった。

いつしかミレイユは彼の仕事を手伝うようになった。子供ながらに彼への恩に報いようと一生懸命だったのだ。

最初は慣れない手つきで染料をかき混ぜたりする彼女を、親方も弟子たちも微笑ましく見守っていた。しかしメキメキと塗装の腕を上げたミレイユは、そこに魔法を組み合わせることで仲間たちから尊敬されるようにまでなる。

彼女の風魔法は、皺が寄らないように金箔を貼りつける時には重宝したし、高い場所の塗装には得意の飛行魔法がものを言った。

ある日、彼女が宙に浮いて神殿の外壁を塗装しているのを、通りがかった王宮関係者が見かけたのである。

そのままハリバートン家との養子縁組から宮中魔術師への登用まで、瞬く間に話は進み、親方たちとの別れも慌ただしいものになってしまった。それでも別れ際の彼らの表情はこの先も忘れることが出来ないだろう。しっかりと握ってくれた親方の、大きな手の感触も。

新しい装置は塗装の仕事に役立つものだった。温風を吹き付ければ古い塗装は剥がれやすくなり、冷風は塗料を乾かす時や金箔を貼

りつける時に使える。

ただミレイユはそこで、気がついてしまったのである。今は塗装用に調整してあるが、この装置をもっと大きくして熱風の出力を大きくしたらどうなるのか。

軍事目的のために転用された場合、とても非道な武器になってしまつのではないか。

ミレイユに装置の発表を躊躇わせる理由の一つがそれだった。

王宮つき魔術師の研究は全て、軍事力強化が目的となっている。

本来であればミレイユはこの装置を報告する義務があるのだが、自分の開発したものが他人を傷つけるかもしれないと思うと、恐怖を覚えた。

「あなたがそう思うのなら、報告する必要は無いと思うわ」

だがそんなミレイユの憂いを、あっさりとした口調で吹き飛ばすレイチエル。

「あなたが王宮つき魔術師になったのは、他人に決められたことよ。どうしようもなかったんだし。でも、どう生きていくかは自分が決めることだもの。やりたくないことで、しなくて済むなら、やらなくていい」

迷いのないレイチエルの言葉は、ミレイユの心を軽くする。いつものいたずらっ子のような笑顔を浮かべて「それに」とレイチエルは続けた。

「あなたには娼館の共同経営者という道もあるのよ。嫌になったらいつでも仕事を辞めて私の下へいらっしやい」

「レイチエルったら」

ミレイユが思わず吹き出すと、美少女二人の笑い声は温室内に響き渡った。その笑いが治まるころにはミレイユは随分と気が楽になっていた。

「じゃあ、その装置は捨ててしまつもの？」

レイチエルがミレイユの手の中を見つめながら聞いた。

「ええ。処分するつもりだけど……」

「ちょっとだけ私に貸してくれない？」

「ええ。いいわよ」

レイチエルの申し出に、ミレイユは何の躊躇いもなく装置を手渡した。何に使うかも尋ねなかった。すでに彼女は、レイチエルに対して全幅の信頼を寄せていたのである。

「ありがとう。今度、返すわ」

「いつでもレイチエルの都合の良い時でいいからね」

お互いに手を振って別れた後、研究室へと向かっていたミレイユは背後から名前を呼ばれて振り向いた。

足早に近づいてきたのはブリーズだった。彼は「ミレイユ、実は……」と話を切り出しかけたものの、ポカンと口を開けてそのまま固まってしまった。

「……ブリーズ室長？」

ミレイユが小首を傾げて名前を呼ぶと、ブリーズは感電したように身を震わせて正気に戻った。

「あ、ああ……すまないな、ミレイユ。なんとというか……その髪型だと普段と違って見えて……いや、その、良く似合っている」

狼狽し、しどろもどろになったブリーズは照れたように視線を落とした。頭をかいてみたり足先で床をこすってみたりと、落ち着きが無い。

赤面し、消え入るような声で「ありがとうございます」と答えながらも、ミレイユの胸は驚きでいっぱいだった。

外見を変えただけで、これほどまでに他人へ影響を与えるなんて自分よりも二十歳以上上のブリーズが、まるで十代の少年のようだ。

ミレイユは一步前に踏み出し、ブリーズとの距離を縮めた。

「室長……」

「な、なんだ？」

すぐ下から顔を覗き込まれ、視線を泳がせるブリーズ。

「ご用はなんでしょう？」

ブリーズの顔に、一瞬「わけがわからない」という表情が浮かぶ。「ご用があるから呼び止められたのでしょうか？」

「あ、ああああ……そうだ、そうなんだ」

顔を真っ赤にしたブリーズは、すぐに平静を取り戻して真顔になると、警戒するように周囲を見渡した。

ミレイユの耳元に口を寄せて、聞き取るのがやっとという大きさの声で囁く。

「実は、研究室にスパイがいるらしい。……君の研究に、盗作の疑いがかけられているんだ」

目を瞪るミレイユ。咄嗟に手で口を押さえ、声が漏れるのを防いだ。

「そんな、まさか……」

「本当だ。乾燥装置と湿度調整機能つきの箱だが……私が報告を上げる前に、水魔法の研究室から同様の発表があった。もちろん主要魔法を水系列に変えてはあるが、内容は全く同じだ。水魔法の研究者に知り合いは？」

ミレイユが首を振ると、ブリーズはしかめ面のまま頷いた。

「だろうな。となると、やはりスパイが居るといことだろう。私に報告する前に、誰かに研究成果を見せたことはあるか？」

ミレイユの脳裏にレイチエルとヒーリスの顔が浮かんだ。元々彼らのために作った装置だったので、当然のようにブリーズよりも先に見せたのだ。

あの二人がスパイだなんて信じられない。特にヒーリスは、基本的に癒術以外のことには無関心だ。ではレイチエルは？

ミレイユは胸に浮かんだ疑問を打ち消すように、ゆるゆると首を振った。レイチエルとの友情は本物だと思っている。

でもレイチエルは……状況に応じて、見事なまでに己を演じることができる。もし自分の前で見せている彼女の姿が、演技だとしたら？

「もしかしたら犯人は、私の机から報告書を盗み出しているのかも

しれない。もつと警戒を強めることにするが……ミレイユ、君も気をつける」

その言葉を強調するかのようになり、ブリーズはミレイユの肩に置いた手にギュッと力を込めた。いつになく険しい顔で、いつもよりも少しだけ長くミレイユの目を覗き込んだ後、踵を返して立ち去る。

かつかつと規則正しい足音を立てて遠ざかる姿を見送りながら、ミレイユは胸元で手を握りしめた。

小さな不安が渦巻き、先ほどレイチェルに貸した装置のことが思い出される。

馬鹿なことをと思いながらミレイユは悲しくなった。これが宮中で生きるということなのだろうか。友と信じる人間のことでまで疑わなければならないとは！

1、それぞれの恋（ミレイユ）5

盗作疑惑の件は、ブリーズの口からハリバートン伯爵へと内密に伝えられた。

養父はミレイユに対応策を考えるようにと命じ、それまでは研究内容をブリーズにすら伝えるなど言った。彼は味方のふりをしているだけかもしれないから、と。

ブリーズが自分のことを案じてくれている様子は本心からのものに見えたし、彼がスパイであるなど考えられないとミレイユは思ったが、もはや何を信じて良いか分からなくなつた彼女は途方に暮れていた。

誰も信用できる人間が居ないということは、こんなにも孤独で苦しいものなのだろうか。今の彼女には、悩みを打ち明ける相手も、気を許して笑い合える相手も居ないのだ。

いつもレイチェルと会う温室の片隅には水汲み場が設けられている。その側にしゃがみこんだミレイユは、顔を歪めてため息をついた。

泣き出したい気分なのに、涙は流れてくれない。涙には悲しみを和らげる効果があると言う。ほんの少しでもこの目から溢れてくれれば、自分の気持ちも癒されるかもしれないのに。

「ミレイユ、そっちに居るの？ ミレ……どうしたの！」

植物をかき分けて近づいてきたレイチェルが、うずくまる彼女の姿を認めて走り寄ってきた。

「何でもないの、レイチェル」

「そんなはずないでしょう！ 一体どうしたの、この服は」

レイチェルがミレイユの隣に膝をつき、抱きかかえるように肩に手を回した。レイチェルの言葉通り、ミレイユが身にまとっているローブは所々切り裂かれており、「何でもない」と言えるような状態では無かった。

ミレイユが黙っていると「また、嫌がらせを受けたのね」とレイチエルが怒りのこもった声で呟く。

研究室内の女性魔術師から、ミレイユが度々嫌がらせを受けていることをレイチエルは知っていた。そして嫌がらせをする女たちに対し、怒りを募らせていた。

ミレイユは小さく微笑んだ。レイチエルが自分のために怒ってくれることも嬉しかったが、彼女と付き合いだしたお陰で男性魔術師から嫌がらせを受けることがなくなったので、これでも以前に比べればずっと楽になったのだ。

そつと腕の傷跡を抑える。確かに制服のローブは随分と小さくなってしまったが、命に係わるような怪我をさせられなかっただけマシだろう。

数日前ブリーズから、一か月後の研究成果披露会でミレイユを『風魔法の部』代表とすることが発表された。

それぞれの研究室から選出された代表者は、王族が居並ぶ中で自分の研究成果を発表し実演することになっている。

当然のことながらかなりの実力と研究成果を持つ優秀な者に与えられる役目のため、代表に選ばれることは非常に荣誉なことだと思われるわれていた。

本来であれば王宮つき魔術師になって一年にも満たないミレイユに回ってくるような役では無かったが、彼女の功績とブリーズの鼻屑目によって選ばれてしまったのだ。

ブリーズの狙いはミレイユの盗作疑惑を吹き飛ばすことだった。彼女の實力を王宮中に知らしめれば、ミレイユに他人の研究を盗作する必要などないことを皆が思い知るだろう、と。

しかし彼の決定は同僚たちの嫉妬心と恨みの感情を増幅させた。特にミレイユが現れるまで、代表間違いなしと言われていたパティの怒りは相当なものだった。この切り裂かれたローブも彼女の嫌がらせの一つなのだろうが、証拠は何も無い。

「ミレイユ。ちょっと待ってて」

物思いにふけっていたミレイユに、突然レイチエルが声をかけた。そのまま彼女は足早に温室を去って行く。

その姿をぼんやりと見送っていたミレイユだったが、やがてレイチエルが大勢の女性を引き連れて戻って来たのを見て仰天した。

レイチエルが連れてきたのは、仲間の宮中娼婦たちだった。揃いも揃って華やかな美女ばかりで、その集団がミレイユをぐるりと取り囲むようにして立っているのだ。すっかり狼狽えた彼女は声を失ってしまった。

「待たせたわね。さあミレイユ、服を脱いで」

「え？ え？ ちよっ……きゃあ！」

レイチエルが無理やりミレイユのローブを脱がせる。

両腕で身体を隠しながら抗議の声を上げようとしたミレイユだったが、彼女の目の前で美女たちが次々に自分の服を脱ぎ始めたのを見て、呆気にとられてしまった。

「さあ皆、始めるわよ」

レイチエルの声を合図に、美女たちが魔法を使いだす。風魔法を使って服を切り裂き、針と糸を使って仕上げていく。彼女たちの裁縫の腕は見事で、あっという間に作業は完了した。

ミレイユのローブは両袖の無い形に変えられ、彼女がそれを着ると白くほっそりした腕が？きだしになり、艶めかしかった。

しかしこれまで、女性の服で腕を露出するものなど無かった。隠すことが当たり前になっていた部分を露出していることに、戸惑いと羞恥心を感じるミレイユ。

だが目の前の美女たちも皆同じ形の服を着ており、肌を露出することによって彼女たちの美しさに拍車がかかったように見えた。

こんなに綺麗なのに隠すなんて勿体ない。ごく自然にミレイユはそう思った。

その中でも眩いばかりに美しかったのがレイチエルだった。彼女はミレイユと腕を組むと、「行くわよ！」と弾んだ声を上げる。

「どっへ？」

「王宮中を歩いて、このファッションを流行らせるのよ！」

「ええ?!」

気づけば反対側の腕も美女の一人にがちりと捕まえられており、抵抗も空しくミレイユは引きずられていく。

抗議の声を上げるミレイユだったが、さすがに廊下に出てしまっ
てからは口を噤んだ。下手に騒ぎ立ると、余計に他人の注目を集
めることになる。

「……ほら、ミレイユ。私みたいに笑って」

レイチエルが笑顔を浮かべながら小声で囁く。

「だって……」

ミレイユは泣きそうな顔でレイチエルを見上げた。

先ほどから、廊下で出会う人たちは驚愕の表情を浮かべてこちら
を凝視してくる。ミレイユは先頭に立ってその矢面に立っているの
だ。失神しそうなほどの精神的緊張を強いられていた。

腕を？きだしにした美女たちの集団は、最初は見る者にかんりの
衝撃を与えた。

けれども彼女たちが美しい笑みを浮かべながら堂々と歩き、見物
人に愛想を振りまいているうちに、周囲の態度に変化が訪れる。

男たちは彼女たちの美しさに見とれ、笑み崩れ、口笛を吹いては
やし立てる。女たちは斬新なファッションに目を瞠り、一度は「は
したない」などと思うものの、男たちの好意的な反応に戸惑いを隠
せない。

「成功よ。これから流行るわよ、この服」

嬉しそうなレイチエルの声に、ギョッと目をつむって歩いていた
ミレイユが薄目を開けた。

顔を紅潮させた男たちが、興奮して口ぐちにはやし立てている。

女たちは興味津々でこちらを見つめていた。

「笑って」

再びレイチエルがミレイユに囁き、手本を見せるかのように、に
っこりと彼女に笑顔を見せた。それにつられたようにミレイユが微

笑みを浮かべる。その途端男たちが息を呑み、すぐに大きな歓声が上がった。

驚いたミレイユが顔を向けると、自分に向かって叫ぶ男たちと目が合った。

「ほら。思い出して。私みたいに振る舞うのよ」

レイチエルみたいに……。ミレイユは男たちの方を見据えたまま、微笑みを浮かべて手を振ってみた。一層大きな歓声が上がる。

彼女の胸に何とも言えない感情がこみ上げてきた。徐々にミレイユの態度が自信あふれたものへと変わって行く。

美女たちと談笑し、周囲の者に愛想を振りまき、堂々と歩くミレイユ。内気で臆病だった少女の面影は、そこにはもう無かった。

レイチエルの予言通り、この日以来袖なしの女性服が宮中で流行りだす。それはやがて城下町にも広がって行き、徐々に女性の肌の露出が増えるようになるのである。

宮中娼婦たちと一人の魔術師によるこの行進は、女性服の革新的なファッション改革として宮中の歴史に残ることになった。

2週間後の昼下がり、ミレイユが温室に行くと途方に暮れたレイチエルが待っていた。

「ああミレイユ……………私、大変なことを……………」

ミレイユの顔を目にした途端、レイチエルがよるめきながら近づいてきて縋りつく。

「一体どうしたの？ レイチエル」

こんなに憔悴している彼女は見たことが無い。ミレイユはレイチエルの顔を覗き込みながら、心配そうに尋ねた。

「以前あなたに借りた装置ただけけれど、盗まれてしまったようなの」

「盗まれた？」

「ええ……」

悔しそうに唇を噛むレイチエル。

彼女の話によれば、例の装置は娼婦たちの控え室に保管しており、洗い髪を乾かすのに使っていたのだと言う。

数日前レイチエルが保管場所の鍵を開けてみると、装置が無くなっていた。

「犯人は娼婦たちではないわ。それだけは間違いないの。ただ、私がかもつと嚴重に管理しなければいけなかったのよ。本当に、あなたには申し訳ないことをしたと思って……」

呆然と立ちすくむミレイユ。レイチエルは辛そうな表情を浮かべて下を向いてしまっている。

温室は静寂に包まれ、かすかな水音以外は何も聞こえない。

しばらくしてその沈黙を破ったのは、ミレイユの「嘘つき」という冷たくこわばった呟きだった。

「え……？」

「レイチエル。あなたがスパイだったのね。私が貸した装置を、水魔法の魔術師に渡したんでしょ？」

「ミレイユ、何を言っているの？」

顔を上げたレイチエルが、戸惑いながらミレイユに近づく。しかし彼女は触れられるのを拒むように後ずさった。

その顔は怒りで紅潮し、憎々しげにレイチエルを睨みつけている。つい先ほどブリーズから、水魔法の部が新しい研究を発表したと教えられた。

それは2日前にミレイユが考え出した内容と同じで、彼女はそれをレイチエルにしか明かしていなかった。ブリーズにすら教えていなかったのだ。

「そんな、ミレイユ。私がそんなことするわけないでしょう？ 誰かが私とあなたの話を盗み聞きしたのかもしれないじゃない」

「それは不可能なのよ」

ミレイユが感情のこもらない、落ち着き払った声で言った。

あの、ローブの袖を切り落とした日。ミレイユはレイチエルよりも先に温室にやって来ると、ある魔法をかけた。

それは温室の壁にそって真空状態の空間を作り出すという、ミレイユが考え出した魔法だった。真空であれば音は伝わらないため、こうすれば温室内での会話が漏れ出すことはない。

盗み聞きを防ぐための魔法だったが、皮肉なことにそれが犯人を見つけ出してしまったのだ。

ミレイユは目を閉じると、深く息を吸ってから吐き出した。

「目的は何？ 水魔法の魔術師に……好きな人でも居るの？」

質問をしている形になってはいるが、答えなどどうでも良いと思っ
ているのが分かる口調だった。

「あなたを……信じていたのに」

ミレイユが目を開ける。声にも瞳にも、深い悲しみが溢れていた。レイチエルが口を開きかける。けれどミレイユは、彼女の弁明を聞く前に踵を返すとその場から走り去った。

とめどなく流れる涙もそのままに廊下を走り続ける。やがて息が苦しくなって走るのを止めると、彼女の身体は力を失って床に崩れ落ちた。

「うつ……うつ……」

大きな柱の影に座りこみ、ミレイユは静かに涙を流し続けた。

研究成果披露会は、屋外の演習場で催されることになっていた。

高い位置に王族の座る台座が設けられ、周辺には騎士と魔法剣士たちが待機する。王宮つき魔術師たちは、それぞれの部に分かれて観客席に座っていた。

一般観客席には魔術師以外の王宮関係者が座るのだが、その中間
間違えようのない黄金の髪を見つけてミレイユは目を逸らした。

あれ以来レイチエルとは口をきいていない。会うことも避けてい

た。

何度かレイチエルの方から話をしようと伝言があったが、全て無視していた。

隣に座っているブリーズがミレイユの様子に気づき、視線を一般観客席へと移す。彼もレイチエルに気がつく、口を引き結んだ。

レイチエルがスパイだったことをミレイユが伝えると、ブリーズは烈火のごとく怒った。宮中裁判にかけると息巻く彼に、確固たる証拠は無いのだからとミレイユは言った。

投げやりとも違う、本当に関心など無いかのようなその淡々とした様子には、ブリーズの方が戸惑ったほどだった。

だがミレイユはもう、レイチエルのことなど考えなくなかっただけだ。思い出すたびに裏切られた痛みが胸を刺す。一切関わり合いになりたくなかった。

彼女は研究に没頭した。ブリーズは怒りが収まらないようだったが、怒るということは相手を想い続けるということだ。ミレイユは、レイチエルの全てを忘れたかった。

鬼気迫る様子で仕事をする彼女に同僚たちは圧倒され、嫌がらせもしなくなつた。もっともミレイユは、とつくに同僚の存在など忘れ去っていたのだが。

嫌がらせを受けようが陰口を叩かれようが、どうでも良かったのである。

ふとミレイユは突き刺すような視線を感じて顔を上げた。

反対側の観客席から、一人の女性がこちらを見つめている。まっすぐの赤毛を顎の位置で切りそろえた、かなりの美人だった。

けれど面識はない。なぜこんなに不躰な視線を送ってくるのだろう。あの席は、水魔法の魔術師が座る場所だけだ……。

「あれがアニー・ブラウン・バツカスだ」

ミレイユの方へと身体を屈めたブリーズが、耳元で囁いた。

聞き覚えのある名前だ。確か水魔法の神童と言われている、三大美女の一人だとか……。

不意にレイチエルの顔が脳裏に浮かぶ。そうだ、この話を教えてくれたのは彼女だった。

慌てて首を振ったミレイユに、「どうした？」とブリーズが声をかける。

「いいえ、あの……なぜか睨まれているような気がするんですが」慌てて誤魔化した。視線を戻すと、アニーはすでに違う方を向いている。

「そうかもしれないな。君のことをライバル視しているそうだし」「ライバル？　なぜ私なんかを？」

「君は風魔法の天才として有名だからな。おまけに三大美女としても肩を並べているし」

当たり前のことを、という口調でブリーズに言われミレイユは困惑する。だが次の瞬間、ブリーズが強張った口調で言った言葉に身を固くした。

「彼女が、君とほぼ同じ内容の研究を発表しているんだ。しかも君よりも先に」

改めてミレイユはアニーを見た。

レイチエルは自分が話した研究内容を、彼女に教えていたのだ。友人のふりをして、信頼を利用して。

一体、彼女とどういう関係なのだろう？

暗い顔つきで考え込んでいたミレイユは、鳴り響いたファンファールにはっと顔を上げた。

慌てて立ち上がり、養父に教えてもらった敬礼の姿勢を取る。

裾を引きずって登場した王族たちが、それぞれの台座に座った。国王の左側に座った皇太子は満足そうに演習場を見回していたが、ブリーズに目を留めるとウインクを投げかけてきた。

ブリーズの唇がひく、と歪む。騎士たちや他の人間の目がなければ、恐らく彼はニヤリと笑っていたことだろう。

「君がうちの代表者だと説明しておいたから、挨拶したかったんだろう。例のカゴの魔法を随分と気に入ってらしたからな」

「皇太子殿下と……仲がよろしいのですね」

着席しながらブリーズの方へと顔を向ける。

「ああ。色々和王族らしからぬ人でね。ご自身も風の神の加護を受けているから、うちの研究が気になるようだ」

ブリーズが笑いながら言った。どうやら彼と皇太子の間には、友情に近い関係が育まれているらしい。だが皇太子がこちらを見つめる視線には、どうもブリーズが説明する以上の理由が存在しているような気がする。

彼がミレイユを見つめる視線には好奇心が溢れているし、ブリーズへは冷やかすような目を向けている。

何となく気まずさを感じるミレイユだったが、気づいてみれば皇太子のみならず、何人も男たちがこちらを見つめていた。

今日のミレイユは部の代表者ということで、化粧を施されている。袖の無いローブから覗く腕には腕輪がはめられ、耳元にはイヤリングも揺れていた。どちらもブリーズが開会前にプレゼントしてくれたものだ。

華やかなミレイユの美貌は男たちの目を惹きつける。他のことに集中していたせいで目に入らなかつた彼らの視線に気づかされ、急にミレイユがそわそわと動き出す。

頬を染めて視線を落としたミレイユだったが、レイチエルならこんな時どうしただろうとふと思った。

レイチエルなら……レイチエルならきつと……。

背筋を伸ばして座り直したミレイユは、口元に微笑みを浮かべて堂々と男たちの顔を見返した。目が合った男たちは頬を紅潮させ、慌てて視線を演習場へと戻す。その後は、ちらちらと盗み見るように熱い視線を送ってくるだけになった。

顔に笑顔を貼り付け、微笑みを絶やさないままミレイユはそれぞれの部の発表を見ていた。

レイチエルのことを忘れようとしているのに、忘れられない。

彼女は自分を裏切っていたけれど、でも、何度も助けてくれたの

も事実だ。自分の一番苦しかった時を支えてくれたのも、彼女だった。

……優しくしてくれたこと全てを、裏切られた痛みで塗りつぶせたら良いのに。

微笑みの裏でミレイユは、必死に涙をこらえていた。

1、それぞれの恋（ミレイユ）6

炎魔法、花魔法、蔦魔法、光魔法……王宮内にはそれぞれの魔法ごとに研究室があり、その数は数えきれないほどである。そのため、発表会は七日間に渡って行われる。

ミレイユの発表は一日目の、午前の部の最後だった。

彼女の盗聴防止のための真空魔法は高評価を得て、その盛り上がりはデモンストレーションで最高潮に達した。

昼休みを終えてもなお観客たちの興奮は冷めやらず、口ぐちにミレイユの魔法を噂し合っていた。

「気の毒なことに、次の発表者は不利だな」

ちつとも気の毒に思っていない素振りでブリーズが呟く。

彼は愛弟子のミレイユが狙い通りのセンサーションを巻き起こしたことに、すっかり満足している様子だった。

次の発表者として演習場に歩み出たのは、アニー・ブラウン・バツカスだった。水魔法の神童の登場に、観客の期待は高まる。

風魔法の天才があれだけ素晴らしい発表だったのだから、水魔法の神童も同じくらい凄い内容に決まっている。果たしてどちらが優れているのだろうか。

観客たちの思惑が手に取るように分かり、居心地悪そうにするミレイユ。

それとは対照的に、アニーは好奇の視線に怯むことなく、堂々とした態度で何かを取り出した。

「あれは……！」

ミレイユの目が見開かれる。それはレイチェルに貸した、冷風と温風を吹き出す装置だった。

ひじ掛けを掴んで身を乗り出すミレイユに、ブリーズが「どうし

た？」と眉を潜める。

けれど彼女はアニーの発表を一言一句、聞き漏らすまいとしていた。

アニーが機械から勢いよく水を放出してみせる。会場からは喝采が上がったが、ミレイユは恐怖で肌が粟立った。

次にアニーが、炎を吹き出してみせると告げた時だった。

「やめて！」

思わずミレイユは立ち上がって叫んでいた。

しん、と会場中が静まり返り、視線が彼女へと集中する。ブリー

ズはあんぐりと口を開けてミレイユを見上げていた。

「やめて……やめて、そんなことは！」

ミレイユの叫び声に、アニーがすっと目を細める。

「どういう意味かしら？」

ハスキーな声は、不快さを隠そうとしていなかった。

「そんな危険なことは止めて！」

「危険とはどういうことだ？」

頭上から降ってきた声に顔を上げると、皇太子が興味深そうにこちらを見ていた。

ごくりと唾を飲み込んでそちらを凝視するミレイユだったが、その問いには答えずに視線をアニーへと戻した。

「あなた……その装置に何をしたの？」

ミレイユの言葉に、会場内にざわつきが広まって行く。

その音に負けまいと、ミレイユは声を張り上げてアニーを問い詰める。

「それは私が開発したもののよ。私は炎魔法と風魔法しか組み込んでいない。それ以外の魔法を加えると、制御装置を使ったとしても暴走してしまう恐れがあったから。……だけどあなた、さつき水魔法を使ってみせたわよね？ 一体、何をしてくれたの！」

ミレイユが装置の発表を躊躇った、もう一つの理由がそれだった。

風魔法と炎魔法の組み合わせ。それらが相互に影響しあうギリギリのところ、ミレイユの装置は絶妙にバランスを取っていた。アニーはそこに水魔法まで組み込んでしまったのだ。幸運にもまだ魔法は暴走していないようだが、いつ箍が外れてしまってもおかしくない状況だった。

「よくもそんなでたらめを！」

アニーが笑い声を上げた。彼女は皇太子に向き直ると、落ち着き払った声で告げる。

「皇太子殿下。そのミレイユ・ハリバートンという女には盗作疑惑がかかっております」

「盗作？」

「はい。私の研究のいくつかを盗用し、厚かましくもそれを自分の功績として発表しているのでございます」

「それは……っ！」

ブリーズが勢いよく立ち上がった。だが国王に鋭い口調で「それはまことの話か？」と問い詰められ、ぐっと拳を握りしめる。

「……私はミレイユの潔白を信じております。むしろ彼女の研究を貴女が盗用したではありませんか、アニー殿」

ミレイユは両手で口元を覆ってブリーズの顔を見つめた。皇太子も顔をしかめている。

明確な証拠も無いのにアニーを犯人呼ばわりするのは、行き過ぎた行為だった。普段のブリーズならば、もっと自分を抑えることが出来ただろう。

けれど彼はミレイユを侮辱されることに我慢が出来なかった。握りしめた拳は怒りに震え、血管が浮き上がっている。

会場のざわめきはもはや、騒音と言えるほど大きくなっていった。

「陛下。これは私、いいえ水魔法の部全体に対する侮辱ですわ。とんでもない言いがかりです。事実、私の研究発表の後にあの女は」アニーがミレイユを指差す。「ほぼ同じ内容の発表を行っているの

ですわ」

国王は無表情なまま、アニーとミレイユを見比べている。

「それが事実ならば、むろん、嚴重に処罰せねばならん」

重々しく告げられた言葉に、アニーの顔に勝ち誇ったような顔が浮かぶ。

反対にミレイユは真っ青になった。冤罪であろうと、自分だけが罰せられるのは構わない。だがブリーズまで巻き添えにしたくはなかった。

今のままでは自分たちの有罪は決定的だ。一体どうしたら良いのだろう。

「お待ちください、陛下」

風魔法で増幅されているはずなのに、驚くほど優雅さを保ったままの柔らかな声が響き渡った。

「レイチエルか」

目を細めて呟く国王に、演習場に進み出たレイチエルが膝を折る。彼女の右手は、肘の上まで白い包帯に覆われていた。

「恐れながら陛下。私はミレイユ嬢が潔白であるという証拠を持っております」

レイチエルの言葉に、再び会場がざわめきに包まれた。

アニーは凍りついたようにレイチエルを見つめている。

ミレイユは頭がくらくらした。レイチエルはアニーの味方ではなかったのか。一体、何を言おうとしているのだろう。それに、あの包帯は何があったの？

「じ、自分の立場をわきまえなさい！ 娼婦ごときが出しゃばるなんて」

アニーが叫ぶと、レイチエルは意味ありげな微笑を浮かべて彼女を見つめた。

そして、何とも妖艶な流し目で国王を見やりながら「公正な陛下のこと。真実を見定めぬまま処罰を下すような真似はいたしません

でしょう?」と甘えるような声で言った。

その声音を聞いた男たちが、一斉に身を震わせる。

「……ブリーズ室長?」

前の座席に手をつき、荒い息をついているブリーズを不思議そうに見るミレイユ。見渡せば、かなりの数の男性がなぜか前屈みになっていた。

「あ、ああ。いや、なんでもない。………さすがだ。これが当代一と言われる宮中娼婦の実力か……」

最後の方は小声すぎて聞き取れなかった。ミレイユは首を傾げたが、独り言のようだったので、とりあえず視線をレイチエルへと戻す。

「……いかにも。余は常に公正じゃ」

国王が口を開く。

「よろしい。レイチエルよ、風魔法の魔術師が潔白であるというなら、その証拠を提示することを許そう」

「お待ちください、陛下。正式に宮中裁判の場を設けては……」

「この場で有罪者を確定せねば、水魔法と風魔法の部には確執が残る。裁判まで日が空けば、証拠の隠滅なども起こり得るからな」

大臣の進言は、国王によって却下された。

「ではレイチエル。陛下より許可が下りた。この場で証言するが良
い」

皇太子の言葉に一礼したレイチエルは、王族を見上げながら口を開いた。

「アニー嬢がお持ちの装置ですが、間違いなく、以前ミレイユ嬢が私に下さったものでございます。ある日、私どもの控え室から盗み出されて以来、行方の知れなかったものです」

全員が目がアニーの手の中の装置へと向く。彼女はその視線から隠そうとするかのように、ギュッと装置を握りしめた。

「証拠は?」

「握り手が一部、欠けております。私が誤って石壁にぶつけてしまったため、欠けてしまったのでございます」

頬を染め、はにかんだように言うレイチエル。

「欠けた部分をヒールリス先生が調合した軟膏で繋ぎ合わせてありますので、調べればお分かりになるかと……」

慌ててアニーが握り手を調べ始めた。ミレイユの目には、彼女の動きが止まり、生唾を飲み込む様子が見えた。

数人の衛兵が彼女の手から装置を取り上げようと近づいて来ていたが、アニーは渡すまいとするようにギュツと抱え込む。

「更に、アニー嬢がミレイユ嬢の研究を盗用していたという、証人を連れて来ております」

レイチエルの言葉に、数人の宮中娼婦が一人の男を連れてきた。怪我を負っているらしく、レイチエルのように包帯を身体に巻きつけている。

その男を見た瞬間、アニーの顔が蒼白になった。

「その者は？」

「水魔法の魔術師、レーニエ・ウグレ・デレスです」

レイチエルは続けた。盗用されたミレイユの研究は、全て彼女が温室でレイチエルに説明してくれたものだった。

ブリーズにも明かしていない研究が盗まれたのならば、犯人は温室での話を盗み聞きしているに違いない。だがミレイユは、真空魔法を使っているのだから盗聴は不可能だと言った。

レイチエルは犯人が他の方法で盗聴をしているのだと考え、そこで思いついたのである。

温室内の水汲み場は、外部の小川から水を引き入れている。

水は音を伝える。

ミレイユが立ち去った直後、レイチエルは水汲み場に右手を突っ込み、自分の系列魔法を使った。彼女は雷いかずちの神の加護を受けていたのである。

水を伝わった雷により、盗み聞きをしていたレーニエは感電した。同時にレイチエルも自らの右手を火傷することになった。

「レーニエは盗聴した内容を、アニー嬢へと伝えていたのです」

「わ、私はそんな男、知らないわ！」

「同じ部に所属する魔術師なのか？」

アニーが叫ぶと、皇太子が訝しげに疑問を口にする。

彼女はうっと言葉に詰まると、国王へと向き直った。

「陛下、これは私を陥れようとする陰謀でございます！ 誓って私は潔白です！」

「……陛下。これはレーニエが保管していた書類でございます」

レイチエルの言葉とともに、彼女の風魔法が数枚の書類を国王の手元に舞い上げる。

それを受け取り、目を通し始めた国王の眉間に縦皺が刻まれていった。険しい視線を演習場に固定したまま、書類を皇太子へと渡す。「なぜこんな決定的な証拠を残しておくのか……」

皇太子が呆れたように呟いた。

それはアニーからレーニエへの綿密な指示書だった。盗聴の指示、ミレイユに危害を加えさせる指示、ブリーズの机から書類を盗み出す方法……。

アニー自身も呆然としている様子だった。なぜならその指示書には、この書類の内容を覚えたら破棄するようにと書いてあったからだ。

「愛しい女からの手紙です。捨てられなかったのですよ」

そっと、レイチエルが言った。

アニーはレーニエの恋心を利用して、犯行に加担させた。そしてその恋心ゆえに足元をすくわれることになったのだ。

「そしてこれは、アニー嬢の文箱から失敬させていただきました」
続いてレイチエルが提出した書類は、ミレイユを失脚させた後、

彼女とレーニエを始末することを外部の殺し屋に依頼した契約書の控えだった。

「ミレイユを暗殺だと?! なぜそこまで!」

激昂したブリーズに対し、レイチエルが静かに説明した。

「……彼女はハリバートン家の遠縁に当たります。ミレイユ嬢が現れなければ、アニー嬢がハリバートン家の相続人だったのでよ」
アニーはハリバートン家の家督を継ぐことは出来ないが、財産の相続権だけはあったのである。

彼女の生家であるバツカス家は、家柄こそ由緒正しいものの、決して裕福とは言えなかった。儉約しながらも、貴族としての対面を保つだけの出費は抑えられない。アニーは亡き母に代わり、常に借金とその返済に神経を使う生活を強いられていた。

しかし、そう遠くない未来に巨額の財産を受け取れるという将来が約束されていたからこそ、彼女はその生活に我慢できていたのである。

けれどハリバートン伯爵がどの馬の骨とも知らない小娘を養女に迎えたことで、アニーの計画は脆くも崩れ去った。

「う……うあああああつ!!」

突然アニーが叫び声を上げて、装置をレイチエルへと向けた。筒の先から勢いよく炎が噴き出し、危ういところで避けたレイチエルの髪を焦がす。

会場中に悲鳴が響き渡った。

「衛兵! 取り押さえろ!」

皇太子が立ち上がって叫んだ。兵士たちが慌ててアニーを取り囲むものの、炎のあまりの大きさに近寄れずに居た。

見ていた魔術師たちが、それぞれの魔法を使って取り押さえにかかると。だがアニーは空いている方の手を使って、見事なまでに魔法を駆使してそれを防いでいた。

アニーとて、だてに「神童」の名を背負っているわけではない。

「レイチエル！」

ミレイユが悲鳴を上げる。アニーが装置をレイチエルに向かって振りかぶったところだった。

レイチエルは身を翻してアニーの懐へと潜り込むと、装置の筒の部分を素手で掴んだ。

じょうう……という音と共に白煙が上がり、肉の焦げる嫌な臭いが立ち込める。

「レイチエルッ！」

皇太子やブリーズ、他の宮中娼婦たちから絶叫があがった。

しかしレイチエルは、じっとアニーの目を睨みつけている。今までに見たことの無い、険しい顔つき。その目は今にもアニーを殺しかねないほどの憎しみを湛えていた。

「……名譽、そして富。そんなもののために、あなたは人の命を奪おうとした」

レイチエルは更に、鼻がくっつきそうなほどアニーに顔を近づけた。

「私は、私の友人を傷つける者を許さないわ」

その迫力に息を呑むアニー。彼女はレイチエルから離れようと、慌てて装置を引っ張った。

ベリベリ、という音を立ててレイチエルの手が装置から引きはがされる。苦痛をこらえるように、僅かにレイチエルが顔を歪めて傷口を押さえている間に、アニーはその場から飛びのいた。

勝ち誇ったような顔をして、先ほどと同じように身体の前で炎の剣を構えるアニーだったが、観衆の見ている前で徐々に彼女の顔が恐怖に見開かれていった。

装置を握る腕が、がくがくと上下に揺れている。見ている者たちは何が起こっているのか分からなかったし、アニー自身も理解できなかったのだろう。

反対側の腕で必死に手を押さえている彼女は、パニックに陥って

いた。

(魔法が暴走している……！)

ミレイユだけが正確に状況を理解していた。改造によって狂った装置のバランスが、暴走し始めたのだ。

このままでは大惨事が起こってしまう。

ミレイユは飛行魔法で演習場へと降り立つと、アニーを見据えたまま慎重に魔法式を構築し始めた。

顔面蒼白となったアニーが、極限まで見開いた目に涙を滲ませながら、ミレイユの顔を見つめる。

ミレイユは怯えるアニーをしつかりと見据えながら、練り上げた魔法を一気に解き放った。

彼女が放ったかまいたちは、寸分の狂いもなく筒の根本を切り飛ばした。途端に、炎の噴出が止まる。

一方アニーも、短くなった装置を握りしめたまま、反動で勢いよく後方へと吹き飛ばされた。

地面に転がったまま、ぴくりとも動かないアニー。どうやら気を失ったらしい。

衛兵たちは恐る恐る様子を伺っていたが、安全だと確信すると慌てて彼女の身体を取り囲んだ。

ミレイユは大きく息をつき、緊張で浮かんでいた額の汗を拭った。そしてハッと気がつくのと、慌てて後ろを振り返った。だがそこにレイチエルの姿は無い。

演習場の中には衛兵や癒術師たちが入ってきており、人ごみが出来つつあった。

ミレイユは目をこらしてレイチエルの姿を探す。やがて彼女は、宮中娼婦たちに付き添われて演習場から出て行くこうとしているレイチエルを見つけた。

完全に姿が消える直前、彼女はチラリと演習場を振り返った。そして自分を見つめているミレイユに気がつく、にっこりと微笑んだのである。

その笑顔に身を震わせるミレイユ。沸き上がる罪悪感と後悔に涙が出そうになった。

「待つ……」

ミレイユがレイチエルを呼び止めようとした時、彼女の脇を通り過ぎようとした衛兵と肩が接触し、よろめいて地面に尻餅をついてしまった。

恐縮して謝罪する衛兵に手を貸してもらって立ち上がった時にはもう、レイチエルの姿は消えていた。

1、それぞれの恋（ミレイユ）7

ミレイユは誰も居ない風魔法の研究室で、私物を整理していた。所属していた期間が短かったこともあるが、元々あまり物を持ち込んでいなかったので片づけも楽だった。

トランクに必要なものを全て詰め込んだことを確認すると、最後の仕上げにミレイユは引き出しから宝石箱を取り出した。中にはブリーズからもらったイヤリングと腕輪が入っている。

ミレイユはその箱をブリーズの机の上にそつと置いた。自分がこれを返すことの意味を、ブリーズであれば察してくれるはずだ。

「ミレイユ！ ミレイユ！」

切羽詰まった声が聞こえたかと思うと、研究室の入り口にレイチエルが現れた。

「レイチエル……」

あの事件以来レイチエルに会うことのできなかったミレイユは、久しぶりにその姿を目にして喉を詰まらせる。

いまだレイチエルには正式に謝罪も出来ていない。彼女をスパイだと疑ってしまった己を恥じ、消えてしまいたいと思う反面、会えて嬉しいと思う気持ちと、怪我の具合を案じる気持ちが入り混じって、言葉にならなかった。

しかし今のレイチエルの心を占めていたのは、そんな問題ではなかった。

「ミレイユ、王宮を追放されたって本当なの？」

レイチエルの問いかけに、ミレイユは苦笑して頷いた。

演習場での騒動で捕えられたアニーは、宮中裁判にかけられることになった。

裁判の結果次第では、爵位を剥奪されずに済むかもしれない。だが彼女の悪事が白日の下に明かされた今、著しく家名が傷つけられたのは間違いない。たとえ貴族の地位に留まれたとしても、二度と表舞台に立てないことは確定済だった。

どうせ地に落ちた権威ならどうにでもなれと思ったのか、それとも自分だけが不幸になるのが我慢できなかったのか。

アニーは裁判の証言台で、ミレイユの秘密を暴露したのである。それは、ミレイユの母親が獄中死した罪人だというものだった。

恐らくアニーは、ミレイユがハリバートン家の養女になったところから彼女のことを探っていたのだろう。そしてミレイユの母親のことを知った時、この秘密をいざという時のための武器にしておいたに違いない。

アニーの狙い通り、宮中はこの新たなスキャンダルに騒然となった。

事の真相がハッキリするまでミレイユは拘束されることになった。外部との接触は禁止され、レイチエルはおるかブリーズにすら会うことが出来なかったのである。

やがて文官たちの調査によって、アニーの証言が真実であったと証明された。

ミレイユの母親は盗みの疑いで逮捕され、獄中にて死亡していたのである。しかし実際の所、盗みの被害者の証言は曖昧な点が多く、ミレイユの母親を逮捕した理由も非常に根拠の弱いものだった。

取り調べでもミレイユの母親は「知らない。自分は犯人ではない」ということを繰り返すばかりで、盗まれたものも発見されず、一向に捜査が進展しない。そうこうするうちに元々身体の弱かったミレイユの母親は、獄中で病死してしまったのである。

捜査関係者は、死人に口なしとばかりに彼女を犯人と決め付け、盗まれた品物は海にでも捨ててしまったのだらうということにして、強引に捜査を終了させてしまった。

ミレイユを始め、この母娘の近所に住んでいる住人たちはそれが

濡れ衣であることを知っていた。ミレイユの母は、とても悪事に手を染めるような女性では無かったのだ。

だがお上の決定には逆らえない。第一自分たちに何ができる？
彼女はもう、死んでしまったのだ。

こうして記録の上で、ミレイユの母親は罪人ということになってしまった。

しかしミレイユは母の無実を信じていたので、自分からそのことを他人に話したことはなかった。また彼女を王宮つき魔術師に登用する話が持ち上がった時、身元調査も行われなかったため、その秘密は誰にも知られることがなかったのである。

平民が王宮つき魔術師になるだけでも異例の処置だったというのに、それが罪人の娘であったという、前代未聞の事実が露見したのだ。

この緊急事態に重臣たちは召集され、深夜に及ぶ会議を毎日繰り返した。そして最終的にミレイユをハリバートン伯爵と離縁させ、王宮から追放することで合意を得たのである。

身元を故意に隠して宮中に入り込んだと噂され、流刑もあり得ると囁かれていたにしては、かなり甘い処置と言えた。

それはミレイユを支持する勢力の発言が大きかったことと、彼女のこれまでの功績が考慮されたからであった。

ブリーズはもちろんのこと、養父であるハリバートン伯爵も、重臣たちに圧力をかけるため不自由な身体で屋敷から駆けつけてきた引退したとは言え、炎魔法の研究室にはまだ伯爵が影響力を持つ魔術師たちが何人も居る。彼は自分の支持者たちをも巻き込んで、会議場に入り込んだのだった。

彼は居並ぶ重臣たちの顔を見回し、血走った目で睨みつけた。

「それで？ 君たちは生まれが庶民で親が罪人だからと言って、このかつてないほど優秀で、国家に多大なる貢献をした魔術師を葬り去ろうと言うのかね？」

筋金入りの研究者である伯爵にとって許せなかったのは、明晰で貴重な魔術師の存在が失われることだった。それは、これ以上ないほどの国家的損失だと考えていた。

伯爵はミレイユに愛情を感じていたわけではなかったが、同じ魔術師として彼女の価値を認めていたのである。そして価値のある魔術師という事実の前では、彼女の生まれなどというつまらない話とはとるに足りないことだった。

ハリバートン伯爵の勢いに気圧され、黙り込む重臣たち。彼らは既にミレイユの処罰を軽減してやってもいい気になっていたが、責任をとること嫌さに誰も口を開こうとはしなかった。

最終的にミレイユの身の振り方を決めたのは、皇太子であった。

一向に進まない事態に業を煮やしたブリーズは、重臣たちがのりくらりと結論を先送りしている状況を皇太子に訴えたのである。皇太子は、10以上も歳の離れた友人が、これほど取り乱して必死になっている姿を未だかつて見たことがなかった。

それだけに何とかしてやりたいという気持ちを掻き立てられ、忙しい政務の間をぬって、ミレイユに恩赦を与えるべく奮闘した。

「すまないブリーズ。私の力では、これが限度だったのだ」

ミレイユの追放が決まった時、皇太子はブリーズに謝罪した。

出来ることなら、この娘を王城に留めておいてやりたかった。歳の離れたこの娘に、ブリーズが恋慕の情を抱いているのは、誰が見ても分かるほどだったから。

けれどブリーズは皇太子の謝罪に、ただ黙って首を振った。

彼は、皇太子がどれだけ自分のために骨を折ってくれたか知っていたから。

睡眠時間を削ってまで自分のわがままに応えてくれたせいで、皇太子はやつれた顔をしていた。

処刑されるか、流刑となつて強制労働を課せられるか……それに比べれば、王城からの追放が何だと言うのだろう。この空の下で、

ミレイユは元気で生きていてくれる。

ブリーズは皇太子の前にひざまずくと、深々と頭を垂れた。永遠の忠誠を心に刻む彼の目からは、感謝の涙が静かに流れ落ちていた。

ミレイユは、自分が拘束されている間にそんなやり取りがあつたとは知らされていない。

しかし驚くほど軽い判決の裏に、自分を守り、支えてくれた人たちの存在を感じとり、ただただ有りがたいと思っていた。

王城に来る前は、庶民である自分が貴族に混ざって暮らしていくなど無理だと思っていた。無意識のうちに自分で壁を作って周囲の人間を遠ざけていたのだと、今ならわかる。

貴族であつても、身分の差に関係なく本気で付き合ってくれる人たちも居るのだ。そして彼等のおかげで自分は自信を持つことができた。変わることができた。ここを去れば永久に王城に来ることは無くなるが、どこに行っても何とかやっていけそうな、漠然とした予感があつた。

自分の身を危険にさらしてまで、ミレイユの無実を訴えてくれたレイチエル。

改めて彼女の友情に感謝し、しみじみと感慨にふけていたミレイユだったが、あることに思い当たった。

「レイチエル……どうやってここに来たの？」

王城から追放される罪人は、城を出るまで誰とも口をきくことが出来ない。移動には監視役の騎士が付き添う。

罪人がいよいよ城を出る当日には、王城で働く他の人間は、顔を合わせないように部屋に閉じこもらなければいけないのだ。

今も研究室の扉の外では、監視役が立っているはずなのだが……。

「ちよつと黙つてもらつたわ」

意味ありげな様子でレイチエルがニヤリと笑い、横目で戸口の方を見た。

思わずミレイユが赤面する。どんな手を使ったのか分からないけれど、詳しく知るのには遠慮したいような気がする。

「そんなことよりミレイユ。王城を出るなら、例の共同経営者の話、呑んでもらえるわよね！」

きらきらと目を輝かせながら、ずいっとレイチエルが前に出た。

「え……いや、それは……」

思わず背中を仰げ反らせたミレイユに、レイチエルは「じゃあ、どうやって生きていくつもり？」と更に詰め寄る。

ミレイユはすっかり面食らっていた。レイチエルにスパイの疑いをかけ、あんな危険な目に合わせてしまったのだ。その上「追放されたから共同経営者になります」なんて、厚かましすぎると思っていた。なのにレイチエルは全く気にしてないらしい。

「あの、また塗装の仕事に戻ろうかなって……」

「却下！」

「即答なの?!」

手をがっしりと握りこまれ、逃げ場を失くしたミレイユが悲鳴じみた声を上げた。

「いいい？ ミレイユ。あなた私に借りがあるのよ？ 命がけで無実を証明してあげたでしょう？」

「……っ！ ちょっとレイチエルっ、それ脅迫！ そしてその笑顔が本気で恐いわ！」

「あなたが承知してくれるまで手を離さないわよ」

それまで浮かべていた恐い笑顔とは一転、茶目っ気たっぷりの顔でウインクするレイチエルの顔は、一瞬、何もかも忘れてしまいうになるほど可愛らしかった。

「……確かにレイチエルには、感謝しているわ。本当に……」

ミレイユが自分の手を握っているレイチエルの白い手を見下ろした。

あの演習場で負った火傷はすっかり癒えたようだ。

肉体は娼婦にとって大切な財産だ。それを傷つけてまでミレイユ

の無実を証明するのは、正に命がけだったろう。

「こんな……怪我までさせてしまって……」

「なんて無茶なことをする、って皆から怒られちゃったわ」

ペロリと舌を出してレイチエルが笑った。その笑顔が、ミレイユの胸を締めつける。

顔を俯けて、こみあがってきた涙を落とそうと目を瞬かせた。

「でもね」

急に不穏な調子に変わったレイチエルの声に顔を上げると、その目に怒りの炎が浮かんでいるのを見て息を呑んだ。

「……徹底的に叩き潰してやらなければ、気が済まなかったの」

実はレイチエルは、アニーを失脚させるための証拠をかなり前から揃えていた。しかし、敢えてそれを発表会まで公表しなかったのである。それは大勢の観衆の前で悪事を明らかにすることで、アニーを再起不能にするためだった。

レイチエルの怒りは、それほどまでに深かったのである。

「意外と性格悪いのね……」

「あら。私を聖人君子とでも思ってたの？」

呆れるミレイユに対し、レイチエルはけろりと言い切った。

言われてミレイユは気づく。王城に来た当初、それに近い妄想をレイチエルに抱いていたことを。

女神と崇め、その性格もきつと容姿に相応しいものであるに違いないと思いついでいた。

付き合っていくうちに彼女の人間臭い面も色々と知って行ったが、それで幻滅することは決してなかった。

そして自分も、そんな人間臭い彼女の方が好きなのだ。

ミレイユは小さく息をつくど、まっすぐにレイチエルの目を覗き込んだ。

そう。どこに行ってもやっていける自信があるなら、未経験の職業であってもそれは同じことだろう。

しかもレイチエルと一緒に居るのだ。

いつも真っ直ぐに自分を見つめ、向き合ってくれる親友が。

「……まずは店を立てる土地を見つけてみましょうか」

ミレイユの言葉に、レイチエルはパツと顔を輝かせた。

1、それぞれの恋（ミレイユ）8

乾いた喉を紅茶で潤しながら、ニーナは空を見上げた。日が長いのでまだ明るい、そろそろ開店準備をしなければならぬ時間だ。ポットを空にするため、固まっている友人たちのカップに中身を注いでいく。けれど彼等は手を伸ばそうとせず、何か言いたげな顔でニーナを見つめるだけだ。ただしアキだけは椅子の背もたれに身体を預けて目をつむっていたので、ひよっとしたら寝ているのかとニーナは思った。

「……飲んじゃってけると、ありがたいんだけど」

早くしろと催促しつつ、自分のカップを残りの紅茶で満たし口をつける。

「ねえ、ニーナ？」

「うん？」

おずおずと口を開いたレナスに、ニーナがカップの縁から視線だけ上げる。

「貴族でなければ王宮つき魔術師になれなかったのって……」

「……先々帝閣下の時代のことだ」

尻すぼみになってしまったレナスの疑問に、ビルが答えた。

ニーナはカップをくわえたまま頷いて、彼の言葉を肯定する。

「ハリバートン家って……」

「確か私の祖父の代で、途絶えたと聞いている」

沈黙が訪れた。

黙り込んでしまったレナスとビルをよそに、ニーナは手早くテーブルの上の残り物を一つにまとめる。

「ざつと食器を洗いたいから、水魔法お願い。レナス」

「ちよつとは空気を読みなさいよ！」

「ばあん！」と両手を叩きつけて立ち上がるレナス。ニーナは間髪を置かずに、その真下にあった皿を取り上げた。

「姫、落ち着いてくれ」

椅子に座ったまま、ビルがレナスの身体に腕を回す。婚約者に優しく身体を撫でられ、彼女は荒い息をつきながらも大人しく腰を下ろした。

ちなみにニーナが救出した皿は、いつの間にか目を開けたアキが受け取り、水魔法で洗い流している。

「ニーナ、真面目に聞くわ。……レイチエルとミレイユって……何い歳なの？」

真剣な顔をしたレナスが、身を乗り出すようにして聞く。だが親友がそんなに深刻そうな様子をしているにも関わらず、ニーナは「知らない」とあっさり答えた。

「聞こうと思ったことないし」

「だからどうして！ そんなにっ！ 他人に関心が無いのよ！」

レナスの絶叫に、慌てて店を振り返るニーナ。

この時間であれば、まだ目覚めていない姐さんたちも居るはずだ。こんな形で起こされたとなると――特に寝起きの悪い姐さんは――1日中、機嫌が悪い。皆プロなので客の前ではにこやかに笑っているが、その分、割を食うのは後輩の娼婦たちや裏方のニーナなのだ。しかしニーナの心配とは裏腹に、建物は静まり返っている。それどころか、少し離れたところにいる野鳥たちも、何事もなかったかのようにのんびりと歩いていた。

一体なぜと思いつながら視線を戻すと、アキが感心したような顔で顎を撫でている。

「……アキ、何かした？」

「なかなか使えるな、この魔法」

愉快そうなアキの言葉に、レナスは呻き声を上げた。

アキは先ほどニーナから聞いた話だけで、ミレイユが開発した『真空魔法』の理論を理解し、魔法式を推察し、再現してみせたのだ。それだけではない。ミレイユの魔法は建物の壁に沿って真空の空間を作り出すものだったが、アキはそれを改良し、空間を切り取っ

て魔法を展開した。今、彼を中心とする半径10メートルほどの円の外側に、薄く真空の層が出来ていた。

とんでもない離れ業を見せつけられ、顔面蒼白になるビル。一方ニーナはアキが人外であることなど重々承知しているので、そんなことには驚かない。とりあえず騒音トラブルを防いでくれたことに感謝しておいた。

ビルはアキとレナスの顔を交互に見ながら、困惑した様子で口を開けた。だが言葉を発する前にレナスに視線で制され、大人しく黙り込む。

「……とにかく!」

咳払いを1つしておいてから、レナスが抑えた声で言った。

「意外と歳が行ってたのね、あの2人。見た目からは想像もつかないけど」

ビルも無言で頷いた。

「ミレイユはまだ処女なのか?」

「あんたの関心はそこかい」

アキの疑問に、ニーナが呆れた声を上げる。そこに若干の険が含まれていることに、レナスだけは気づいていた。

「いつもミレイユは、自分で客の相手はしないだろう? 今の話を聞く限り、宮中で勤めていたころも男と付き合っただことは無かったようだしな」

「でもアキ教授。ここは娼館ですよ? 宮中を去ってから今まで1度も経験が無いなんて、そんなことあり得ますかしら」

レナスが小首を傾げる。

さすがに彼女も直接的な表現は避けたが、普通の貴族の公女であれば口に出すのも憚られるような話題だ。

しかしビルは、レナスに慣れたのか、それとも貴族の子女の事情に疎いのか分からないが、特に眉をしかめることも恋人を諷めることもなく黙って話を聞いている。

「そう言えば、ミレイユが客をとったところって見たことないなあ

……恋人が居るって話も聞いたことがないし」

ニーナが宙を見ながら呟いた。

「ブリーズ室長だったかしら。あの人とはどうなったのかしら」

目を輝かせ、興奮気味のレナスが言った。

いかにもまだ十代の少女らしく、彼女はロマンス小説や他人の恋愛話を聞くのが好きだった。

ただ、同じ十代でありながら……しかもレナスより年下なのに……そういうことに全く興味のないニーナと並んで座ると、ずっと幼く見えてしまうのは彼女のせいではない。

「ミレイユが宮中を去って、それっきりじゃないか？ 今よりもずっと身分の差は厳しかっただろう」

アキが言うと、レナスが不満げに口を尖らせた。

「もしかしたら誰とも結婚せずに、ミレイユ殿に純愛を捧げたかもしれないぬ」

慰めるようにビルが口にした言葉に、レナスの顔がぱつと笑顔に変わる。だがアキが「いや、当時の貴族だろう？ 何年かしたら政略結婚せすにはいられなかっただろう」と続けたために、再びムツとした表情に戻ってしまった。

余計なことを……と睨みつけるビルの視線を、完全に面白がっている顔で受け流すアキ。

ニーナは男たちの無言の戦いに注意を払うことなく、「でも結婚してたつて、客として通つてくることはできるよね」と言った。

「それよ！ ニーナ、レイチェル……は教えてくれないかもしれないわね。年配の姐さんたちに、ブリーズという客がミレイユの所に通つてなかったか聞いてみてちょうだい！」

「ええー……」

明らかに嫌そうな顔をするニーナ。さり気なく話を聞き出すことは難しくないが、自分では全く興味のないことに、それだけの労力をかけるのは面倒くさい。

けれどそんなニーナの目の前に、レナスは餌をチラつかせた。

「今、隣の国の舞踏団がうちの城に滞在しているのだけれど」

舞踏の一言でニーナの目の色が変わる。酒場の踊り子の踊りだろ
うと、町中の芝居小屋で披露される踊りであろうと、ダンスと聞け
ばどんなものでもニーナは興味を持つ。一流の舞踏団によるショー
に、彼女が惹きつけられないわけがなかった。

「仕方ないな」

「ありがとう！　じゃあビル、貴方はブリーズの系譜を調べて」

「そこまでですわよ、お嬢様」

嬉々とした顔で振り向いたレナスは、にっこりと微笑んだミレイ
ユの笑顔に凍りつき。さらに自分の婚約者が、ミレイユにがっちり
と頭を抱え込まれ、その豊かな胸の谷間に埋もれてジタバタもがい
ているのを見て悲鳴を上げた。

当然のように再び魔法を展開したアキのお陰で、その声が遠くま
で響くことはない。

「本当に良い魔法だ、これは」

「お褒めにあずかって光栄ですわ」

にこやかに会話するアキとミレイユの傍らで、レナスが酸欠でぐ
ったりしているビルを必死で介抱している。

「レナス様。詮索はあまり良い趣味ではありませんよ」

ミレイユに穏やかに、けれどはつきりと諫められ、レナスが「だ
つて……！」と反論しようとしたが、ビルに「私もそう思う、姫」
と言われては口を噤むしかなかった。

「……じゃあミレイユが教えてくれる？　ブリーズとはどうなつた
の？」

「だめです。それは私とあの方の間の秘密です。……さあ、もう時
間ですよ。ニーナとアキ様は店にお戻りになって。ビルフレッド様
とレナス様も、お帰りを」

有無を言わせぬ口調だった。

ミレイユに急ぎ立てられ、慌ただしく片づけを済ませると、挨拶
もそこそこにニーナたちは解散した。

レナスは恋物語が聞けなくて明らかに残念がっていたが、いつまでもそれを引きずるような娘ではない。すぐに諦めるだろう。

「あらミレイユ。遅かったわね」

ミレイユが自室に続く階段を上っていると、レイチエルが下りてきた。

「珍しいじゃない、レイチエル」

「実は、新しく店に入れる娘のことで相談に来ただけど……うっかりあなたの外出日を忘れていたわけ」

ペロリと舌を出すレイチエル。薄暗がりの階段には自分たち2人の気配しかせず、レイチエルは宮中娼婦として身に着けた鎧を脱ぎ捨て、完全に素のままの自分をさらしていた。

娼婦たちに見られたらどうするのかと、眉をひそめるミレイユ。レイチエルにはオーナーとして威厳ある姿を示してもらわないと、規律が守られないではないか。

だがミレイユが文句を言うよりも早く、レイチエルが真面目な顔になる。彼女は小声で「それで、ブリーズとは話せた？」と囁いた。「……ええ」

ミレイユは毎年必ず、この日に休暇を取る。彼女は朝早くから出かけると、墓地へと向かう。そしてブリーズの墓の前に途中で購入した花束を供えると、その場に腰を下ろし、日暮れまでずっと心の中で彼に語りかけるのである。

実はミレイユが王宮を去ってから、しばらくはブリーズと手紙を通じて繋がりがあった。だがブリーズがどんなに願っても、ミレイユは彼と会うことを拒み続けた。1度、まだ娼館の開店していない時間に彼がやってきて面会を求めた時も、彼女は頑として顔を合わせることを拒否したのである。

会えば愛しさを抑えきれなくなってしまう。もはや自分は娼婦と同じ立場なのだ。彼にとって重荷にしかねない。

ミレイユの想いを理解したブリーズは、何も言わずに去って行く

た。そして数年後に彼が妻を娶った時、2人の文通も終了した。

遅い結婚だったせいかわりには子供がおらず、養子として迎えられた息子の一族が爵位を引き継いだ。だがそれも、もう昔の話だ。

「ねえミレイユ……、新しい恋を見つけたつもりはないの？」

レイチエルが遠慮がちに尋ねる。親友の顔が心配で翳っているのを見て、ミレイユは微笑みを浮かべた。

「不器用なんでしょうね。こんな生き方しかできないのよ」

そして腕を伸ばすと、レイチエルの頬を両側から引っ張った。

「……何するのよ」

ムツとした顔で睨みつけてくるレイチエルに、ミレイユは声を上げて笑った。

「私を不幸だと決めつけないでね。他人からどう見られても、今の生き方で幸せなんだから」

レイチエルは目を瞠ると、すぐになつこりと微笑んだ。

その笑顔を見てミレイユが満足そうに頷く。やはり自分の女神には、いつでも笑っていて欲しい。

「せっかくレイチエルが居るんだから、久しぶりに『昼と夜の女王』が2人揃ってお客様を迎えたら、喜ばれるんじゃないかしら」

「この私を利用しようとするなんて、いい性格になったものね」

「しっかり働いてもらうわよ、オーナー」

2人の美女は顔を見合わせてクスリと笑うと、そろって階段を下りて行った。

1、それぞれの恋（ミレイユ）8（後書き）

ミレイユは処女なのか否か。それは永遠の秘密です。

1、ラスト・テリユース

王城はピラミッド型の建物が縦一列に並んだ形になっている。

手前の建物が執政や外交の場に使われる「公」の場所で、奥に位置するのが王の私室と後宮にあたる「私」の場所だ。

この2つの建物を取り巻くように幾重もの城壁が築かれており、更にその周りを深い水路によって囲まれているため、上空から見れば王城は島の上に建てられているようにも見えるのだ。

ビルフレッドは今、水路にかかる橋を歩きながら首を傾げていた。その視線は斜め上に向けられている。

彼の位置からは城壁に遮られて王城の頂上付近しか見ることが出来ないが、普段は城の上空部分を覆っている魔法障壁が、何やらキラキラと光を反射しているのは見えた。

(警備担当の魔術師たちが新しい術式でも考え出したか……?)

ビルフレッドはそんなことを考えながら通行証を掲げ、城の中へと入って行く。上空に気を取られるあまり、入り口の両脇に佇む兵士たちが彼の顔を見て微妙な顔つきになっていたことには気がつかなかった。

城壁を通りぬけながらビルフレッドはますます違和感を強くした。庭の木々は紅葉に色づき、落ち着いた赤や黄色が美しい。この季節は風も少ないため、まるで1枚の静止画のように穏やかな景色が見られるのだが……先ほどから兵士や侍女たちがバタバタと慌ただしく走り回り、その庭に不似合な騒々しさが溢れている。よく見ると王宮つき魔術師たちまで一緒になって庭を駆け回っていた。

何か式典の準備にでも追われているのだろうかと思ったが、ビル

フレッドの記憶の中にそのような予定は組み込まれていない。

彼の属する正剣隊はその職務の性質上、城下町に出なければ仕事にならない。そのため毎日王城に来ることはないが、重要なイベントがあれば知らされているはずである。一体何が起こったのか。

ビルフレッドが足を止めて回廊から彼らの様子を伺っていると、背後から馴れ馴れしい声をかけられた。

「王城でお前さんの姿を見るとは珍しいな、ビルフレッド・ヘザー・レイ」

「定期報告だ。ラストー殿」

振り向くと、予想通りそこには赤毛の優男が居た。ゆるく束ねられた髪の毛は以前見た時よりも更に長く伸びている。

たまたま居合わせた通りすがりの兵士が、ラストーの物言いを耳に留めてギョツと目を？いていた。

ビルフレッドは軽く頷いて兵士に「気にするな」と伝える。彼は信じられないといった表情のまま、一礼すると足早に立ち去った。

「ん？　どうかしたか？」

「いや……まだ貴方に慣れていない新人の兵士だったようだ」

「ああー、なるほどね」

納得したように笑うラストー。

気心の知れた正剣隊の隊員たちでさえ、王城の中では畏まった言葉でビルフレッドに話しかける。それがレイ家の人間に対する礼儀だからだ。もし彼等が任務中と同じような口調でビルフレッドに話しかけ、ましてや名前を呼び捨てになどしたら……不敬罪ぐらいでは済まないだろう。

しかしこのラストーという男は貴族の階級など意に介さず、下働きの人間から恐れ多くも国王陛下に対してまで、同じように馴れ馴

れしい態度で接している。またそれが許されている異例の立場でもあった。

ラストー・テリユーズ。

どこか遠い国の出身であるということ以外、全てが謎に包まれている男。どこの出身なのか、なぜ王城で働くことになったのか、年齢はいくつか。国王陛下以外にそれを知る者は居ない。

彼の肩書は税務管理部の一役人に過ぎないが、陛下の信頼が厚く、宰相を差し置いて国王の補佐役となっていることは公然の秘密である。

目を細めるビルフレッド。彼は常日頃この男に対してある種の警戒心を抱いていた。

ラストーは愛想がよく人当たりもいいが、その笑顔の裏で何を考えているのか分からない所がある。

更に彼は、ビルフレッドが初めて登城した7歳の頃には、既にこの城で働いていた。

噂では現国王陛下が生まれる前から王城に居たという説もあるが、少なくともビルフレッドが知っているだけで、15年以上も歳をとらず今と変わらぬ姿で存在しているのである。

ある者は遠まわしに、ある者は単刀直入にラストーに尋ねてみた。なぜ歳をとらないのかと。

すると彼は愛想よく笑いながら「常に恋愛をしていることが若返りの秘訣だ」ととぼけるのである。

確かにその言葉通りラストーの女性関係は派手であるが、それだけ化け物じみた若さの理由にするには無理がある。

しかし国王陛下の寵愛と、ラストー自身の有無を言わさぬ態度が周囲の人間にそれ以上の質問を阻んでいた。

ビルフレッドは彼を、悪魔か善魔か、あるいは魔物の類だろうと思っている。だが人外存在であろうと害を為さないのであれば、警戒しつつ放置しておくのが彼の流儀だった。

もしラストーが帝国やレナスに対して少しでも悪意を見せようものなら、瞬時に切り捨てようとは思っていたが。

「遅くなったがラストー殿。先日は剣入けんいりへのご協力、感謝している」
「礼には及ばないぜ？ あれは職務の一部だからな」

夏にあった薬物事件騒動。

ランカード商会は倒産し、犯人であったランクル・ランカード改め魔王ヴォルトス、及び事件の関係者は未だ拘束中の身である。闇世界にも関係する事件だけに、人間だけでは裁判をすることが出来なかったのだが、近いうちに闇世界から地位の高い魔王が来ることに決まったと聞く。

近頃では珍しい大規模な剣入の行われた事件であったが、その際、有罪確定のため正剣隊に協力したのが税務管理部だった。

彼等は独自の捜査網を使って、剣入をするのに必要なだけのターマの密輸入の証拠を集めてきた。更に剣入後はランカード商会の納税記録および会計報告を調べあげ、正剣隊の徴収した証拠物品の中から巧妙に細工された裏帳簿を発見したのである。

その功績は税務管理部全体のものとなっているが、実際にはラストー1人の力によるものであることを、ビルフレッドは知っていた。得体の知れない存在ではあるが、仕事ぶりは堅実で信頼できる。それがラストー・テリューズという男だ。

ビルフレッドの礼に対して肩をすくめたラストーだったが、急に何かを思い出したように振り返った。

「そう言えば、お前さんの婚約者の名は？」

「……レナス姫が何か」

「なんで戦闘体勢に入ってたんだよ。いいから剣の柄から手を離せ。あと殺気を抑えろ」

「……」

ビルフレッドは無言で手を下ろした。だが殺気は抑えず、いつでも魔法を展開できるように魔法式を構築している。

肩の力の抜けないビルフレッドを前に、ラストーは「やれやれ」と呟くと壁によりかかって口を開いた。

「さつき、お前さんの婚約者が宰相殿に呼び出されたんだよ」

「姫が？ なぜ」

ビルフレッドが眉を潜めた。

レナスが正剣隊への入隊を宣言し、王城が大混乱に陥ったことは記憶に新しい。

本人の思惑とは関係なく、レナスには幼い頃から王宮つき魔術師の椅子が用意されていたのである。国防の花形とも言えるその地位を蹴って、下級貴族や庶民で構成される部隊への配属を希望するなど正気の沙汰ではないと誰もが思った。

しかし国中の貴族に衝撃を与えたこの件は、重臣たちが「とりあえず様子見」と問題を先送りにしたことで収束したはずだった。今更レナスが宰相に呼ばれる理由が分からない。

「レナス嬢は、美人だろ？」

「もちろん。我が国1番の見目麗しさだ」

迷わず即答したビルフレッドに、ラストーがしばし絶句する。

（おいおい、本気かよ）

ビルフレッドのレナスへの傾倒ぶりは、正剣隊の隊員たちの口から漏れ聞こえていた。だがその話を聞いたとき、ラストーは即座に鼻で嘲笑ったのである。

あの無骨者が、女が出来たぐらいで変わるものかと。
それがこの色ボケぶりはどうだ。

「……意外と単純な男だったんだな」

「？ 意味が分からん」

「いや、いい。気にするな。レナス嬢の話に戻るが、美貌に加えてあの魔力の高さ。家柄はそれほど高くなかったが、お前さんと結婚すれば将来的に八選家の一員になるわけだ」

「ああ。それが何か」

「宰相は、うってつけだと思っただらしい」

「……？」

首を傾げるビルフレッドから視線を逸らし、ラストーは呟いた。

「陛下の正式愛妾に」

突然ボンツという爆発音のようなものが聞こえてラストーが振り返ると、庭の生垣が5倍以上の大きさに急成長していた。この怪現象に、走り回っていた侍従たちから悲鳴が上がる。

啞然として首を元に戻せば、ビルフレッドが拳を握ったり開いたりして懸命に気を静めようとしているところだった。

「なぜ、姫を？」

表情を消し、抑揚のない声で言葉を紡ぐビルフレッドの身体からは、触れれば火傷しそうなほどの怒りのオーラが滲み出していた。

「宰相殿は最近、勢力が落ちてきているからな。陛下の覚えを良くしたいんだろ」

「……愚かな」

ため息とともに身体の力を抜くビルフレッド。

レナスを愛妾にするなど、自分の両親が決して承諾しないだろう。何より、陛下自身が承諾しないことは分かりきっている。

王妃は「三大美女」の1人であり、陛下は彼女と子供たちを溺愛しているのだ。宮中娼婦にさえ見向きもしない方だというのに。

おまけに皇太子を含め子供が8人もいる国王に、なぜ愛妾が必要だというのか。

「そんな策しか出てこないんだろうよ。俺たちに追い詰められて」

ニヤリとラストーが笑った。

ここ数年、国王命令によって各貴族の所領の実態調査が行われている。ラストーたち税務管理部は主に収益と納税の面で調査を行っているのだが、すでにかかりの功績を上げていた。

長年、慣習として行われてきた不正。賄賂などで見逃されてきた違法な増税。それらが白日の下にさらされ、大規模な改革が行われようとしている。

なかでもロンダリング宰相は相当数の不正を暴かれ、税収の面では痛手を被ったらしい。

本人は「全ては管轄を任せていた部下のせいだ。所領が広大すぎて目が届かなかった」と不正に対する自らの関与を否定しているが、当然のことながら彼に対する周囲の風当りは強くなった。

国王陛下からの信頼も揺るぎ、急速に勢力が弱まりつつある。

涼しい顔をしているが、こんな苦し紛れの策を持ち出してくるあたり、ラストーたちの調査が宰相に与えた影響は想像以上に大きいのだろう。

満足した様子でニヤニヤと笑っていたラストーが、口を開く。

「しかしお前さんの反応、婚約者殿と一緒にだな」

「どづいづことだ」

「宰相殿が彼女に公式愛妾の話を持ちかけた瞬間、庭園中の池が爆発音とともに巨大な水柱を吹きあげたんだ」

ほら、と上空を指差すラストーに従ってビルフレッドが上を見上げる。

「池のマスが魔法障壁にくっついてる」
「……」

どうやらキラキラと光っていたのは、水滴だったらしい。

「姫さんは宰相を殴り倒して出て行った」

話し終えたラストーは、とんだじゃじゃ馬姫だと思いながらビルフレッドの反応を待った。

「さすがは姫」

「……ダメだコイツ」

感服したようにレナスの所業を賞賛するビルフレッドに、ラストーは首を振った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6116o/>

神と悪魔と人魚

2011年12月25日23時54分発行